

31
94

稅關月報附錄ノ三十

(非賣品)

大阪稅關沿革史

第貳期
第參期

大阪税關沿革史

第二期

例



本史は筆を明治五年七月運上所か大藏省租稅寮主管に移れる時に越し同二十三年九月税關法發布の前は撰ぐ此間編を分つこと四、曰職制、曰警察、曰貨物、曰船舶

一明治五年十月横濱税關を各港税關の本局とし同六年三月大阪税關を神戸税關の出張所に指定せられて以來大阪税關の事務は渾へて神戸税關の指揮に待つを以て沿革上重要な出来事は悉く神戸税關沿革の一部として記慮せらるゝか故に今や元税關本局たる横濱税關及び大阪税關の幹部たりし神戸税關の各沿革史出て、後大阪税關の沿革史を編むは猶ほ陽出て、燭を乖るか若く寧ろ何等の異彩なきを怪まんや

一本史は各税關を通する一般の法規條令にして既出各税關沿革史に現れたるもの、如きは多く省略に従ひ唯大阪税關に於ける慣行例規の類は蒐集記述することに勉めたり

大阪税關沿革史目次

第二期

第六編 職制

第一章 租税寮主管	一
一 所屬の變更	一
二 分課及吏員の配置	三
三 長官の異動及地位	六
四 税關職制の配布	七
五 税關の稱呼始めて一定す	一
六 關吏の定員	二
七 大阪税關の地位	三
八 庶政一括 (租税寮主管時代)	三
一 服制一定の稟議	四
二 營造物の授受	四
三 履歷書を徴す	八
四 出勤時間を匡さしむ	〇
五 月給支給方法を定む	〇
六 天長節と酒饌料	一
七 太陰曆を廢す	一

目次

一

目次

八 御用仕舞及御用始.....二二

九 石油使用の禁止.....二二

十 宿直賄料の給與.....二二

十一 鎖關の通告.....二三

十二 税關旗章の改廢.....二四

十三 職員月給録編制式の發布.....二五

十四 慰勞金下賜の率を定む.....二〇

十五 税關事務の閉鎖及賜暇.....二〇

十六 宿代賜方規則の發布.....三一

十七 申牒と名宛.....三四

十八 長官異動.....三四

十九 夜業料給與の改正.....三四

二十 當直宿直の勵行.....三四

二十一 廳舎の移轉.....三五

二十二 病氣欠勤と診斷書.....三八

二十三 電信符號の内達.....三九

二十四 官舎貸渡規則及其改正.....三九

第二章 關稅局主管.....四四

九 所屬の異動.....四五

十 鑑定役の新設.....四九

十一 税關職制并事務章程の改定.....五一

十二 庶政一括二.....五四

一 惡疫に關する注意.....五四

二 國旗の撤去.....五五

三 水夫以下の増給.....五五

四 文房具に關する達示.....五七

五 税關附屬船旗章の改正.....五八

六 執務時間の一定.....五九

七 簿冊及發受文書類.....五九

八 正副二通及文書掛.....六二

九 火災に對する注意.....六二

十 長官の異動.....六三

第三章 主稅局主管.....六三

十三 主管變更と吏員.....六三

十四 事務章程及分掌規程の制定.....六四

十五 庶政一括三.....七一

一 事務分掌規程の變更.....七一

二 給仕以下の給與方法.....七一

三 附屬官舎の購入.....七一

四 官舎賃下料を一定す.....七一

目次

四

第四章 大蔵省直轄……………七四

十六 税關官制の制定……………七四

十七 特別輸出港規則の發布と出張所の設置……………七七

十八 四日市税關支署沿革……………八一

十九 庶政一括四……………八六

一 執務規律……………八六

二 雇員の退職及死亡賜金……………八七

三 被服料下賜……………八七

四 文具料支給規則を定む……………八八

五 税關長職權中の追加……………八九

第五章 經費……………八九

二十 經費の豫定計畫……………八九

二十一 阪神兩關經費の合併……………九一

二十二 經費配賦の手續……………九三

二十三 公金取扱の手續……………九四

第七篇 關稅警察……………一〇五

第一章 組織及配置……………一〇五

一 巡警卒及監船吏の新設……………一〇五

二 監吏課の新設……………一〇七

三 監吏課の改稱(職制及章程の改正)……………一一六

四 任用……………一二一

五 賞罰……………一二五

六 行賞加罰の實例……………一四二

七 哨船……………一四四

八 水夫……………一四八

九 配置……………一五一

第二章 警察事務……………一五八

十 監吏心得書及改正……………一五八

十一 變亂と税關の警戒……………一九五

十二 犯則調査及處分……………一九九

第三章 雜件……………二二二

十三 服制及給與……………二二二

十四 監視官吏の證票……………二二三

十五 監視官吏の寫眞を徵す……………二三四

十六 監吏補の營業を禁せしむ……………二三五

十七 監吏補と兵役の免除……………二三五

第八篇 貨物……………二三九

第一章 輸出入及回漕……………二三九

一	輸出入手續一斑	二三九
二	各申告及回漕免狀書式	二四一
三	回漕及引取	二四六
四	關印の改正	二四七
五	回漕品假納税	二五二
六	運賃停滯貨物引留規則の發布	二五五
七	船移貨物取締方法	二五九
八	銅錢の輸入	二六〇
九	適例なき輸入貨物の措置	二六二
一	色硝子	二六二
二	家禽及家畜	二六三
三	金箔	二六三
四	鐵板	二六四
五	砂糖	二六四
六	水犀角	二六七
七	パーチング、ドロエルス	二六八
八	山馬皮	二六八
九	純鉛及水銀の量目	二六九
十	屑亞鉛	二七〇
十	硝石	二七一

十一	銅錢	二七二
十二	再輸出貨物	二七三
十三	内外製産品の區別	二七三
十四	輸出特許	二七五
第二章	鑑定	二七七
十五	改品に關する注意	二七七
十六	従價品買上及買上品處分	二七八
十七	目利人と分一税	二八四
第三章	課税	二八六
十八	手數料の徴收と廢止	二八六
十九	關稅返戻の適例	二八七
二十	輸入品元價換算法の變更	二八九
二十一	監吏の派出検査手數料	二九三
二十二	關稅事務の聯絡	二九四
二十三	輸入貨物諸係費課税の疑議	二九六
第四章	犯則	二九八
二十四	犯則品と官民の賞與	二九八
二十五	虚偽申告の處分に對する疑議	三〇一
二十六	清國民に對する阿片密輸入と其處分	三〇二
二十七	處罰及特典	三〇五

第五章 貿易獎勵	三〇八
二十八 貿易獎勵	三〇八
二十九 昆布輸出の一頓挫と善後策	三一〇
三十 輸出免稅品	三一六
三十一 交付金及戻稅	三一九
第六章 公用品及旅具提携品	三二二
三十二 公用品	三二三
三十三 政府雇入外國人自用品	三二六
三十四 同上内國産提携品に關する處分	三三二
三十五 内外公使館及軍艦乗込員自用品	三三三
三十六 旅具檢査	三三八
第七章 保管及藏置	三四〇
イ、上屋	三四〇
三十七 上屋の設置	三四〇
三十八 上屋規則の制定	三四二
三十九 内許免狀書式改正の通知	三四四
ロ、借庫	三四五
四十 庶庫	三四五
四十一 借庫増設の計畫及落成	三四九
四十二 庫租	三五二

ハ、火藥庫	三五六
四十三 田中新田火藥庫	三五六
四十四 火藥庫慣行法	三六一
四十五 對武庫司火藥倉敷料の紛議	三六三

第九篇 船 舶

第一章 西洋形船舶	三七三
イ、外國船	三七三
一 外國船に對する取扱一般	三七三
一 郵船の取扱	三七三
二 外國郵船便乗手數料	三七四
三 商船	三七五
四 雇入外國船	三七五
五 遊船漁獵船及遭難船	三七六
六 神坂間航行の小蒸氣船	三七七
二 出入外國船統計	三八〇
三 外國船賣買と噸稅	三八四
四 外國船と檢疫	三八八
五 外國船乗込規則の發布	三八九
ロ、内國船	三九一

六	沿海回漕船	三九一
七	外航船舶及統計	四〇二
八	内國船の賣買と入出港手數	四〇三
九	外航船と船籍證書	四〇四
十	航海公證	四〇五
十一	船難報告及證書	四〇七
十二	船切符發賣所	四一一
十三	官船と入出港手數	四一五
十四	木津川流域と西洋形船舶	四一六
十五	碇泊税及國內回漕規則	四一八
十六	摸擬船に對する疑義	四二六
第二章	日本形船舶	四二八
十七	外航日本形船舶	四二八
十八	解船及客船	四三〇
十九	解船會所	四四五
二十	解船の貸銀問題	四四六
二十一	規則違反の處分	四五〇
二十二	曳船回漕會社の設立	四五二
二十三	解船統計	四五三
第三章	臨時開廳積卸特許	四五四

二十四	臨時開關規則の發布	四五五
二十五	回漕貨物と臨時開廳	四六〇
二十六	臨時勤勞手當	四六一
二十七	豫定時間	四六五
第四章	波止場	四六六
二十八	川口波止場の擴張	四六六
二十九	波止場と警察	四七一
三十	假波止場	四七三

大阪税關沿革史

第二期

第六篇 職制

第一章 租稅寮主管

一、所屬の變更 從來各開港及開市場に於ける運上所は所在地方長官の監督の下に外務省に隸屬せる一課たるに過ぎざりしが後明治四年八月二十八日大藏省の主管に轉し同時に大阪運上所は大阪府以外に獨立する一府なるべかりしも當時之を行政上に打算して依然其事務を大阪府に委任し機の熟するに俟つて之を租稅寮の手に收めんことを期せり然るに翌五年六月外務省は租稅寮通牒の意旨を誤解し遂に此月二十八日を以て公然大阪運上所主管の變更及長官の異動を駐劄各國公使に通告して曰く

以手紙致啓達候然者大阪港運上所之義は是迄大阪府長官ニテ取扱來候處向後租稅權頭中山讓治右運上所事務一切取扱相成候筈ニ付右關係ノ事件ハ同人ヨリ同所在留貴國領事へ引合可致候間此段兼而貴國領事へ御通達有之度候右可得御意如此御座候以上

明治五年六月二十八日

外務卿 副島種臣

各國公使閣下 (各通)

然るにこの通告は大藏省當局が當初の心事に違ふものありしと雖も既に一旦公示せる外務當局の通告をして茲に空しく無効に歸せしむるか如きは更らに失躰たるを免れずと爲し大藏省は遂に翌日を

第六篇 職制 租稅寮主管

二

以て神戸運上所長官中山租稅權頭として大阪運上所事務の引繼を了せしめたり
大阪税關不日租稅寮出張之官員請取可申答ニ付別紙一號(此文書缺ク)之通リ外務省へ打合置候處
同省ニテ誤解致候哉第二號(前出外務卿通告書)之通各國公使へ相達候右者最前打合置候趣意トハ
行違居候ニ付可取消筋ニ候得共内外之區別モ有之一旦公使へ相達候儀ヲ今更達直シ候モ御不体裁
且同所税關之儀ハ到底可請取儀ニ付委曲外務省達面寫ニテ了解之上至急請取方可被取計此段御達
申入候也

壬申六月二十九日

滋澤 從五位
上野 從五位
井上大藏 大輔

中山租稅權助 殿

斯の如くにして七月一日運上所と大阪府との間に事務の授受を結了し五日租稅寮(大阪出張)に「當
大阪港運上所事務内國向ハ去朔日同府廳ヨリ請取候ニ付本省へ可然御届有之度就テハ從前勤續之者
差向別紙名面之通(別紙今これを省略分課)府廳へ掛合之上當寮へ採用夫々出仕申付候間此旨承知有之度
候」と報告し一面に於て在留各國領事に對し運上所管轄の異動及長官以下新任の披露を爲せり
以書翰致啓上候陳ハ當港税關之事務是迄當府長官ニテ取扱來候處今般更ニ大藏省中租稅寮管轄相
成拙者儀當港及神戸運上所事務取扱候ニ付爾後稅務ニ關セル百般ノ事件ハ一切從拙者御引合オヨ
ブベク候間其旨當港在留ノ貴國人民へ御布告有之度就テハ將來殊ニ親睦ノ厚カラン事ヲ望ム
壬申七月九日 租稅權頭 中山讓治

大阪在留各國領事 貴下

以書翰致啓上候陳ハ大阪港運上所今般更ニ大藏省中租稅寮管轄相成拙者儀同所長官兼務被命一切
之稅務取扱候間此段爲御心得申進置候謹言

壬申七月九日

租稅權頭 中山讓治

神戸港在留各國領事 貴下

以書翰致啓上候陳ハ拙者儀大阪及ヒ神戸港運上所事務取扱候間其旨當港在留之貴國人民へ御布告
有之度就テハ將來殊ニ親睦之厚カラン事ヲ望ム謹言

壬申七月九日

租稅寮七等出仕 厚東樹臣

大阪在留各國領事 貴下

以書翰致啓上候陳者拙者儀自今大阪港運上所事務モ取扱候間其旨同港在留之貴國人民へ御布告有
之度就テハ將來殊ニ親睦之厚カラン事ヲ望ム謹言

壬申七月九日

租稅寮七等出仕 厚東樹臣

神戸在留各國領事 貴下

以書翰致啓上候陳ハ拙者儀自今大阪港運上所事務ヲモ取扱候間此段爲御心得申進置候謹言

壬申七月九日

租稅寮七等出仕 厚東樹臣

神戸在留各國領事

二、分課及吏員の配置 七月一日事務の授受を結了すると共に更めて税額、收税、検査、諸務、
翻譯、監船、巡警の七課及改品科、検査等を置き吏員を配置せしむ是より先、四年十一月十日大藏
省に於て新たに各港運上所職制を定め先づ試みに之を神奈川運上所に施行せしめ其結果により漸次
各港に及ぼさんことを期せり現に大阪運上所の分課は蓋し是に基きしのみ今試に當時(五年七月二
十六日現在)吏員の配置を示せば左の如し

第六篇 職制 租稅寮主管

三

第六篇 職制 租稅寮主管

稅額課

十一等出仕

本月十八日阪地出張(朱書) 租稅寮より轉課
西藤 龍之

兼出納課 井上 則政

少屬 十二等出仕

栗山 寛教

收稅課

十四等出仕

中島 喬重

檢査課

中屬 平川 武柄

神戶より出張の處本(朱書) 月二十日在勤になる

十一等出仕

荒木 道繁

十三等出仕

岡 利光

改品科

等外一等

金澤 信可

神戶より出張の處本(朱書) 月二十日在勤になる

四 岡部 益明

竹内 清秀

井上 庸普

三宅 敬直

諸務課 馬田 本教

十等出仕

十一等出仕

本月十八日阪地出張(朱書) 租稅寮より轉課
方 高

本月十八日拜命(朱書) 鵜殿 基照
在神

等外一等

岸 洪平

本月十八日拜命(朱書) 高井 義忠

翻譯課 嬉野 君彥

神戶より出張(朱書) 十四等出仕

監船課 分課長助勤心得

十五等出仕

檢査課 土屋 收

十五等出仕

加藤 利正

等外一等

小笠原 依知

弓削 宗豐

三宅 頼行

神崎 寛

村竹 祐保

中村 清房

巡警課 上野 方康

伍長

等外一等

金子 信一

村上 義孝

卒等外二等

山下 義正

横川 正孝

二宮 爲正

青木 信義

後九月十七日諸務課を改めて總務課と稱せしめ更らに十月十二日巡警、監船の兩課を併せて監吏課と命し海、陸監吏を配置して専ら關稅警察の任務に服せしむ又新たに倉庫課を置く等隨て吏員の配置異動を見ること左の如し

檢査課

植村 昌茂

中屬

平川 武柄

同屬

荒木 道熊

權中屬

英方 專

十三等出仕

岡 利光

十四等出仕

嬉野 君彥

十五等出仕

野田 米十郎

五

第六篇 職制 租稅寮主管

第六篇 職制 租稅寮主管

六 立花 伊右衛門

等外一等 岡部 益明

倉庫 課 平川 武柄

同 三宅 敬直

關 關 方 享

同 石黒 康光

關 關 利 光

監 御 上田 市兵衛

權中屬 西 藤 龍之

其他事務の繁簡輕重により阪、神兩運上所の間に於て吏員の便宜流用せるは時宜に迪せる措置とし

て之を許せるもの、如く左の公文書は事實を證明して餘ありといふへし
大阪兵庫兩港之間ニ限リ一時融通之爲メ臨機官員出張達方之儀過日御申出有之候ニ付大藏大輔へ
相伺候處時々出張之分ハ申出之通御取計有之候テモ可然候得共兩地在勤之輩變更之儀者本寮へ申
出候様可致旨決判相成候間其旨ヲ以御處分可有之候此段御達申入候也

壬申十月七日

陸 奥 租 稅 頭

厚 東 樹 臣 殿

三、長官の異動及地位 明治四年八月二十八日大阪運上所の租稅寮主管に歸して以來同六年一月
四日大阪稅關を改稱するに至る間長官の異動を問へは先づ租稅寮主管の過渡の時代即ち五年七月一
日に至る間は大阪府參事藤村紫朗之を主宰し以後に在つては神戸運上所長官租稅權頭中山讓治之を
兼攝し同二十七日中山長官の他に轉するや大藏省七等出仕厚東樹臣神戸、大阪運上所長官に代り事
務を理め同八月二十七日租稅助本野盛亨新々に長官に任せられて神戸運上所に在り大阪運上所事務

を兼攝す後十月二十三日大藏省五等出仕(同月十三日租稅助に陞せらる)瓜生寅神、阪兩運上所長官
を命せらる此間厚東樹臣次官たること元の如し而して此月二日各港運上所長官の地位を定むること
左の如し

今般橫濱稅關ヲ各港稅關ノ本局ト被相定候ニ付テハ橫濱在勤ノ長官ハ各稅關ノ長官タルヘキ條以
後各港在勤ノ租稅助、權助ハ都テ次官ト可相心得尤七等出仕ニテ在勤ノ場所ハ次官ノ代理ト可相
心得事

但橫濱ヲ除ク外各港稅關職制并章程ハ追テ相達候マテ從前ノ通

右之通相定候條中嶋租稅權頭如其他各港在勤官員ヘ可相達事

壬申十一月(五年)

大藏大輔 井 上 馨

租稅頭 陸 奥 宗 光 殿

茲に於て從來の大阪運上所長官は大阪運上所次官として橫濱運上所長官の指揮を仰ぐことになれり
四、稅關職制の配布 明治五年十月二十二日橫濱運上所を以て各港運上所の本局と定め先づ是か
職制及分課規程を制定し同十一月十二日に至り初めて各港稅關職制及章程を治定配布せること左の
如し

各港稅關職制

長 官 一員

租稅權頭の所任にして現今橫濱稅關の各港稅關の本局とするか故に同港にのみ之を
置き他港は次官以下を置く

長官掌管の事務は橫濱稅關職制に審まり

次 官

第六篇 職制 租稅寮主管

第六篇 職制 租稅寮主管

租稅助權助の所任なり然れ共助權助在勤せされは七等出仕を以て代理せしむ
職任長官に亞く

長官不在の稅關に在勤する次官或は次官代理は其稅關中諸官員の首長にして當港出
入物品稅の事務を幹理するを掌る

關中諸官員の處務を指令し各課の事務を幹理す

關中諸般の事務成規と章程とに照して踐行修整するに於て寮頭及稅關長官に對し擔
保の責任を有す掌管の事務に於て實際障礙の事故あれば其顛末を審案具狀し長官に
對し其當否を論辨するを得る諸課を廢立し規則を更革するは本局へ申牒長官同意の
上寮頭の決判を乞ふて之れを處置す

關中定額官員の能否勤惰を監視して之を進退黜陟するは寮頭の決判を受け處分の後
寮頭へ届出へし

以上之を奏任官とす

- 大 屬
- 權 大 屬
- 中 屬
- 權 中 屬
- 少 屬
- 權 少 屬
- 十四等出仕
- 十五等出仕

譯官 一等譯官より七等譯官迄假置之

監吏總長

監吏副總長

海監吏長

海監吏副長

大海監吏

中海監吏

少海監吏

陸監吏長

陸監吏副長

大陸監吏

中陸監吏

少陸監吏

次官及び次官代理の指令に従て各分課に就き従事すへし

少海監吏大陸監吏以上判任とし中陸監吏以下を等外出仕とす可し

檢 査 課
貨物の眞偽を精閲し度量の虛實を詳檢し差出書積荷目錄を對較し現價原直を會照し姦
詐を觀破發摘するの事務を總管す

收 稅 課

出入及其他の願書を受け免狀を付し船舶の手数料物品の運上金并に各項の收納金を收

第六篇 職制 租稅寮主官

十

領し且物品買上代を賣主に付與する等の事務を總管す

倉庫課

火災請合貨物の出入借庫の開閉上屋の進退上陸場の検査等の事務を總管す

文書課

内外往復の申牒關中例則の編纂及簿記書籍新聞紙等出入の事務を總管す

諸務課

關中一切の雜務を幹理し及檢印と免狀に捺押し税金を本寮に廻送し其他金銀の出納用

度の付給館柵の營繕官員の月給等の事務を總管す

海陸監吏課

海陸を巡警し密商脱税を謀る徒を監察發摘する等の事を總管す

右各港稅關職制確定候條履行踐守すへき事

明治五年壬申十一月十二日

大藏大輔

井上

馨

各港稅關章程

第一條

稅關の事務は各港同一ならんを要するか爲に横濱港を以て各港の本局とす其取扱の事務は同港規則中に掲る如し

第二條

各港稅關は横濱港と氣脈を通し凡百の事務難決は横濱に資問して同港之示達を受け施行すへし

第三條

稅關申請般の事務成規定例あるは長官決判して行ふ可しと雖も金銀に關係せるは小事たり其本寮

頭へ申達之上其筋の許可を経されは施行するを得す

第四條

稅關中官員の職階は本寮頭へ申達し其筋の許可を得て任すへし尤も等外以下の輩時宜に寄り其職階を其稅關長官手限り取扱ひ追而本寮頭に届出するも妨げなかる可し

但權頭在勤之地は此限に非ず

第五條

稅關の長官より本省或は其他の各省へ申達伺届等總て本寮頭へ指出し寮頭より夫々へ申達すへき事

壬申九月

大藏大輔

井上

馨

五、稅關の稱呼始めて一定す 由來運上所なる稱呼は舊幕府時代より襲用せる頗る古く成語にして其稅館なる文字は既に文久年間神奈川運上所使用の印影に之を見又明治初年に於て公文書中適々

收稅館なる譯字を見るに至れるも是れ寧ろ偶然のみ都て運上所を以て呼べり然るに明治四、五年の

交に至り漸く新思想の注入と共に翻譯的の流行を來たし運上所の名稱も亦稅關と呼ひなされ官廳の

布達等に於ても或は運上所と記し或は稅關と書する等其稱呼區々に互ひ甚な弊を失へるものありし

されは五年十一月横濱運上所本局より稅關の稱呼を一定せんことを稟議し遂に六年一月四日を以て

全然運上所の舊稱呼を廢して稅關の新稱呼を確定せしむることとなり

從前各運上所ノ稱呼區々相成不体裁ニ付以後各港共一様何港稅關ト改稱之儀舊年中御申出相成

正院へ相伺候處御許可相成候條其旨御詳知外各港へモ右改稱之儀御通達可有之候此段申入候也

明治六年一月四日

陸奥 租稅頭

中島 租稅權頭 殿

第六篇 職制 租稅寮主官

十二

訓令に遵ふて措置處辨を要するもの甚だ繁多なるものありし今年次を逐ふて其一班を示せば左の如し

一、服制一定の稟議 五年七月十八日運上所吏員の服制を一定ならしめんと欲し横濱、兵庫兩港運上所の例に慣ひ大屬已下權中屬に至る一人金貳拾兩、少屬以下十四等出仕に至る一人金拾五兩、十五等出仕一人金拾參兩、等外一等以下一人金八兩、水主一人金四兩貳分而して定人足一人金四兩の率を以て服料給與を申請許可せらる

二、營造物の授受 大阪運上所の事務引繼は既に七月一月を以て之を結了したりと雖も營造物の授受到就て茲に端なく運上所と大阪府との間に見解を異にし大阪府は該營造物は之を授くべきにあらすと爲し運上所は之を受くべきものとし遂に運上所より之を租稅寮に訴へ租稅寮は更らに正院に致し速かに該營造物を受領せんことを以てしたり

今般當港運上所事務大阪府ヨリ請取候ニ付運上所屬之建物ハ不殘引渡方可有之等之處從前運上所本局ニ相成候分は當時當府外務局ニ所用イタン居候赴ニ候得共一應引渡可致様及懸合候處彼是苦情申立急ニ引渡可致勢ニ無之即今運上所之義ハ是迄荷物相改候場所ニテ事務取扱居外國人應接所等モ無之右外務局ニ相用候地所ハ運上所借庫近傍ニテ將來運上所所轄ニ無之ヲハ他日不都合モ可相生且從前運上所名儀ニテ營繕相成居候趣ニ付斷然當寮へ引渡候様同府へ御達相成候様御取斗有之度依之別紙往復書寫爲御見合差進候間御商議之上至急御處置有之様致度此段申進候也

壬申七月五日

厚 東 樹 臣

陸 奧 租 稅 頭 殿
古 谷 簡 一 殿

中山 租 稅 權 頭

租稅寮は正院を経て左の指令を得直ちに之を運上所に回報せり

本月七日付ヲ以テ從前大阪府ニ於テ稅關事務取扱中本局ニ相用居候建築引渡方御掛合之末續々御申越ニ任セ別紙之通回議ニ附シ正院へ相伺候處一昨二十日御達相成候旨ヲ以テ本日御差下相成候ニ付其旨御承知請取方御取計有之度此段申進候也

壬申七月二十二日

古 谷 簡 一

松 方 租 稅 權 頭
陸 奧 租 稅 權 頭

中山 租 稅 權 頭 殿
厚 東 樹 臣 殿

(別紙寫)

大阪港稅關事務同府取扱中ハ外務局ニテ惣轄致シ收稅之義者荷物改品同様之場所ニテ取扱居候處今般稅關事務之儀ハ當寮へ請取候ニ付テハ稅關所屬之建物悉皆引渡可相成之處右外務局之儀者同所ニ於テ從前之通り外部關係之事務取扱候趣ニ付稅關ヨリ壹號之及掛合候處彼是抵牾ヲ生シ引渡之形狀無之即今稅關之義ハ右荷物改所同様之場所ニテ事務取扱居外國領事其外入來之節應接所モ無之端ト差支且右外務局ト唱へ居候建物ハ將來稅關所屬無之ヲハ不都合有之元來舊政府中建築之砌モ運上所之名義ニテ出來相成候義ニ付早々引渡相成候様同府へ御達有之度旨三號之通り申越候間正院へ之御伺案左ニ相伺申候

正 院 へ

大阪港稅關事務同府取扱中ハ外務局ニテ惣轄致シ收稅ノ義ハ同所近傍貨物改所同様之場所ニテ取扱來候處今般稅關事務之義ハ租稅寮へ請取候ニ付テハ右外務局之儀ハ從前之通り同府ニ於テ外國

事務取扱候局ニ相用度趣ヲ以テ右改所同様之場所而已引渡有之不取敢右場所ニテ事務取扱居候得共外國領事其外入來之砌應接所等モ無之甚タ以御不体裁ニ有之候而已ナラス將來取締之方法等故正イタシ候ニ付テハ右外務局建家之儀ハ要々必需之儀ニ有之元來右場所建築之節モ運上所ニ相用候筈ニテ造營相成候儀ニモ有之同府外國事務之儀ハ素ヨリ府廳ニ於テ取扱至當之儀ニ有之候間右外務局之儀ハ稅關へ引渡外國事務之儀ハ府廳ニ於テ取扱候様御達有之度因而此段奉伺候也

大藏大輔 井上野景範
大藏大輔 井上馨

正院 御中

七月二十日 伺之通相達候事 正院之印

(朱書)

今般其府開港場稅關之事務出張租稅寮へ引渡候ニ付テハ已後外務之事件府廳ニテ取扱外務局建家之義ハ早々同寮へ引渡可申事

太政官

運上所は是を將て大阪府に迫り該營造物の授受を速かにせんことを促せり然れども大阪府亦該營造物の授與は外交事務の上に最も不便ありとして直ちに之を肯せず遂に事情を具して正院に訴へて曰

今般其府開港場稅關之事務出張租稅寮へ引渡候ニ付テハ已後外務之事件ハ府廳ニ於テ取扱外務局建家之義ハ早々同寮へ引渡旨御達之趣承知仕候然レ處右外務局之儀ハ從前稅關ニ係リ候場所ニ

無之則廳中分課ノミ一局ニテ此度稅關租稅寮へ引渡候同局迄可引渡理モ不被相考乍併御都合ニ依テハ理不理ニ不拘如何様トモ取計可致ハ至當ニ候得共何分外國人居留地府廳トハ三十町餘モ懸隔致シ即今分局ヲ置キ夫々掛員ヲ据置候テヌラ間々不都合有之程之儀ニ候處御達之如ク府廳ニ於テ外務ノ事件取扱候儀ニテハ彌不都合不少抑外國御交際之重大ナルハ今更ニ喋々申述候迄モ無之然ルニ右様居留地ト懸隔候テハ自然外交之際事情等行違候テハ不相濟儀ニテ於實地不都合ニ付引渡候義ハ今暫ク御猶豫相成度此段申進候也

壬申七月二十七日

大阪府

正院 御中

追而當府廳ハ不便利且破損不少ニ付新廳建營之義已ニ大藏省へ伺出置候次第モ有之右建營相整候上ハ素ヨリ引渡候筈ニ候間夫迄ノ處ハ何分引渡難相整候此段申添候也

正院は之を大藏省に致し該營造物の授受に關し大藏省の意嚮を叩き大藏省は直ちに左の回答を爲し遂に大阪府廳の新築功を竣ると共に該營造物は全然之を租稅寮の手に收めんことを以てせむ即ち先般大阪港稅關租稅寮へ受取候處從前同府外務局ニ相用成候建家ヲ除キ候テハ外國人接對之場所モ無之差支候ニ付同府外國人關係之事務ハ府廳ニ於テ取扱右建家引渡候様御達相成度段申上候通御下命有之候處同府廳之義ハ外國人居留地ト懸隔致居事情充分不通之際ヨリ抵牾ヲ生シ候憂慮不尠且府廳追々頽壞相成當分新規築造之儀伺中ニ有之候間追而建築相成迄ノ處引渡方御猶豫有之度段申立之趣無餘儀相聞候得共稅關ニ於テモ當今事務取扱居候處ハ從前ノ貨物改所同様之場ニテ外國人接對ヲ差支候趣是亦不待止義ニ有之候結局府廳築造相成次第稅關へ可引渡建家之儀ニ付先般御達之通リ稅關へ爲引渡追而府廳營繕相成候マテノ處事務取扱之義ハ双方談判ヲ遂ケ辨利ヲ要トシ同所ニ於テ双方トモ公務爲取計候ハ、差支筋無之被存候間其旨御下命有之度仍テ大阪府申立書

返戻御答及候也

八月三日

史官御中

大藏省

大阪府も亦遂に此意を領し左の如く之を大藏省に回答せり

今般當府稅關ノ事務出張租稅寮へ引渡有之ニ付テハ外務ノ事件ハ府廳ニ於テ取扱外務局儀ハ同寮へ引渡ヘキ旨正院ヨリ過日御達有之候處事務取扱之差支不少且ハ外國人ヨリモ必苦情申出候ハ願然ニ付不都合ノ事情申立引渡御猶豫之儀申出候處租稅寮ニ於テモ同局受取不申テハ外國人應接ニ差支之趣申出候ニ付出張租稅寮へ談判ヲ遂ケ委細之儀ハ御省へ打合可申旨更ニ御達相成候ニ付双方打合セ租稅寮ニテ外國人應對日々差支候節ハ何時ニテモ繰合セ用立可申尤唯今之通府廳居留地ニ懸隔ニテハ不都合ニ付兼テ御願申出候通新府落成之上ハ何時ニテモ相渡可申旨遂談判候儀ニ付此段申進候也

壬申八月二十日

大阪府參事

藤村 信 郷

井上 大藏 大輔 殿

大阪府權事

渡邊 昇

後七年七月十九日大阪府廳新築功竣るを告げ茲に始めて元外務局所在の營造物を收領し了んぬ

三、履歷書を徵す 七月二十日(五年)運上所吏員の履歷書を徵せしむ

各員御一新以來ノ奉職履歷別紙雛形ノ通相認來ル二十五日マテニ當課へ差出可被成候也

但用紙美濃紙

壬申七月二十日

稅額 課 改 品 課

諸 務 課

收 稅 課 監 船 課

檢 査 課 巡 警 課

翻 譯 課

此回達留リヨリ御返却ノ事

(別紙)

本貫屬族

元本貫

苗 字 實 名

通 稱 某 名

壬 申 幾 歳

年號干支何月幾日

一任 某 官 或ハ某職被仰付候事 申付候事

但御達書全文可書載事

同 上

一免 本 官 或ハ某職被免候事 差免候事

但 全 上

同 上

一内外御用出張

但 全 上

同 上

一賞 典

但 全 上

第六篇 職制 租稅寮主管

二十

右ノ外職務ニ關係ノ儀ハ一切可書載事

四、出勤時間を匡さしむ 又同二十一日遅刻缺勤に關する規定を配付して出勤時間を匡さしむ
出務遅延及病氣届ノ規則

毎日出務十字ヲ過ル時ハ出勤帳へ「遅」ノ字ヲ相印シ可申若シ故アリ出頭遅延又ハ病氣引籠リ等ノ
時ハ其届書右時限迄ニ諸務課へ可差出事

壬申七月二十一日

諸務課

税額課	收税課
検査課	改品課
翻譯課	

五、月給支給方法を定む 此月二十五日太政官より官吏の新任轉任に對する月俸の支給及免職
勤續に對する支給法を改定配布し運上所官員の支給方法は一に之に遵はしむ

新任轉任之輩へ月給賜方左之通り改定候事

第一章

一新規拜命之者直ニ

宣旨拜受請書差出候日ヨリ奉職スルモノハ其本任ノ月給賜ルヘシ

第二章

一各方ニテ 宣旨拜受請書差出シ任所ニ赴クヘキモノ其日ヨリ七日ノ間ニ上程セハ第一章ニ准
シ月給ヲ賜ルヘシ若公用之外事故アリテ七日内ニ上程スヘカラサルトキハ其事實ヲ申達許可ヲ
得テ滞在スル者ハ八日日本官月給四分一ヲ賜ルヘシ
但第一章新規拜命請書差出シ置キ本廳へ出仕セサルモノ亦之ニ准スヘシ

第三章

一他官へ轉任ノ者赴任奉職迄ノ間心得及月給賜方等新規拜命ニ異ナラス都テ第一章第二章ニ准ス
ヘシ尤舊官ノ事務取扱中タリトモ轉任ノ者へハ拜命ノ日ヨリ本官ノ月給ヲ賜ルヘシ

壬申七月二十五日

大政官

諸官員免職後勤續之儀ニ付尤辛未八月中大藏省ヨリ相達候處更ニ左之通り御改定相成候條此旨
相達候事

一諸官員免職後從前奉職年數ニ應シ被下候御賞與品以來代料ヲ以免職詞合一同目錄相渡可申事
但年數之儀ハ等級不拘最初被召出等外ニ候共其出仕之月ヨリ相數可申且御品物受ノ上ハ仮令

其月内ニ再拜命スト雖トモ追テ免職之節更ニ拜命之月ヨリ年數可取調事
敕任織紋直垂地壹疋代金貳拾圓奏任無紋直垂地壹疋代金拾五圓判任相壹疋代金拾圓
晒壹疋代金五圓

右之通り御定相成候事

大政官

壬申七月二十五日
六、天長節と酒饌料 五年天長の佳節に丁り運上所吏員に酒饌料を賜ふこと差あり

判任	十八人	但一名四拾五錢ツ、
外等	十五人	但一名貳拾五錢ツ、
内二人	給仕	銀行手代
水夫	小使	定人足

但一名 錢三百文ツ、
代金貳錢四圓

七、太陰曆を廢す 十一月九日詔して太陰曆を廢し太陽曆を行はしむ即ち明治五年十二月三日
を以て六年一月一日と爲し尋て太陽曆を頒布し假りに祝日祭日を定め又晝十二時を改めて二十四時

第六篇 職制 租稅寮主管

二十一

となさしむ

八、御用仕舞及御用始 同二十八日年末に於ける鎖關及年始の開關の事を布達す
當年御用仕舞來癸酉年開關左之通決定候間御達申進候也

一 來十二月朔日 二日 但割休

一 第一月一日 惣休

一 第一月二日ヨリ三日迄 但割休

一 第一月四日ヨリ開關

但當直泊り番之義ハ從前之通

壬申十一月二十八日

諸 務 課

收 稅 課

檢 査 課

倉 庫 課

文 書 課

海陸監吏課

九、石油使用の禁止 火災豫防の故を以て自今石炭油の使用を禁止せしめて曰
各稅關官廳ニ於テ石炭油相用候向モ有之候處火災豫防專要ニ付以來相止可申此段申進候也

六年一月三十日

瓜 生 租 稅 助 殿

陸 奧 租 稅 頭

十、宿直賄料の給與 租稅寮主管以來大阪稅關官吏の宿直に對しては他官廳官吏の小夜食賄料
の給與あるに似ず未だ何等の給與ありしを以て本年一月本局に上申して該給與の請求を爲せり

諸官廳宿直ノ官員ハ從來小夜食賄料被下來候趣然ルニ神戶大阪稅關之儀ハ當寮管轄以來一切不
被下様相成居候處種々諸廳ノ類例ヲ押立苦情モ不少得ト勘考致候處無餘儀筋ニモ相聞候間御異存

無之候ハ、貴港ヨリ本寮へ御申立之上至急御回答有之候様致度此段御談方申進候也

明治六年一月(日ヲ缺ク)

瓜 生 租 稅 助

中 島 租 稅 權 頭 殿

本局は更らに之を本寮へ申請し本寮より左の如く指令し爰に始めて宿直給與を受くるに至れり

書面宿直ノ者へ食料被下方ノ儀ハ判任官以下等外出仕ニ至ル迄其夕翌朝兩度分一人ニ付七錢ツ、

被下其他事務繁劇或ハ臨時差掛候調物等有之退廳夜ニ入八時ヲ過キ候得ハ是亦判任以下等外出仕

ニ至ル迄賄料參錢五厘ツ、被下候條已後右ニ照會渡方可被取計候此段相達候事

但小使宿直ノ者ハ其夕翌朝兩度分貳錢五厘ツ、被下候條臨時退廳夜ニ入八時ヲ過キ候得者右

割合ヲ以渡方可被取計事

六年二月八日

租稅頭 陸 奧 宗 光

後監吏課の振合に就て更らに答ふ處あり其回答に曰

稅關宿直之官員ハ賄料被下方之儀御許可相成候キ付テハ監吏課之儀ハ如何取計可申哉云々御問合

越之趣承知右當關ニ於テハ監吏長并副長之儀ハ隔日之宿直ニ有之候間同様被下候儀ニ有之已下ハ

素ヨリ晝夜分務之職掌誠ニ屢勤士官ニモ有之候ニ付別段不被下候儀ニ有之候此段及御回報候也

明治六年二月二十八日

租稅權頭 中 島 信 行

租 稅 助 瓜 生 寅 殿

十一、鎖關の通告 當時稅關事務の閉鎖に付在留各國領事へ左の如く通告せり

以書翰致啓上候然ハ當港稅關休務日毎月日曜日ノ外左ノ通取極候間此段申進置候拜具

一月一日 五日 廿三日 廿九日

四月七日

十一月五日 十一日

十二月廿五日 三十一日

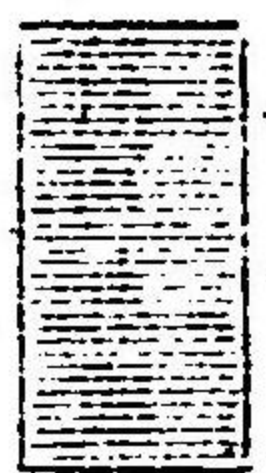
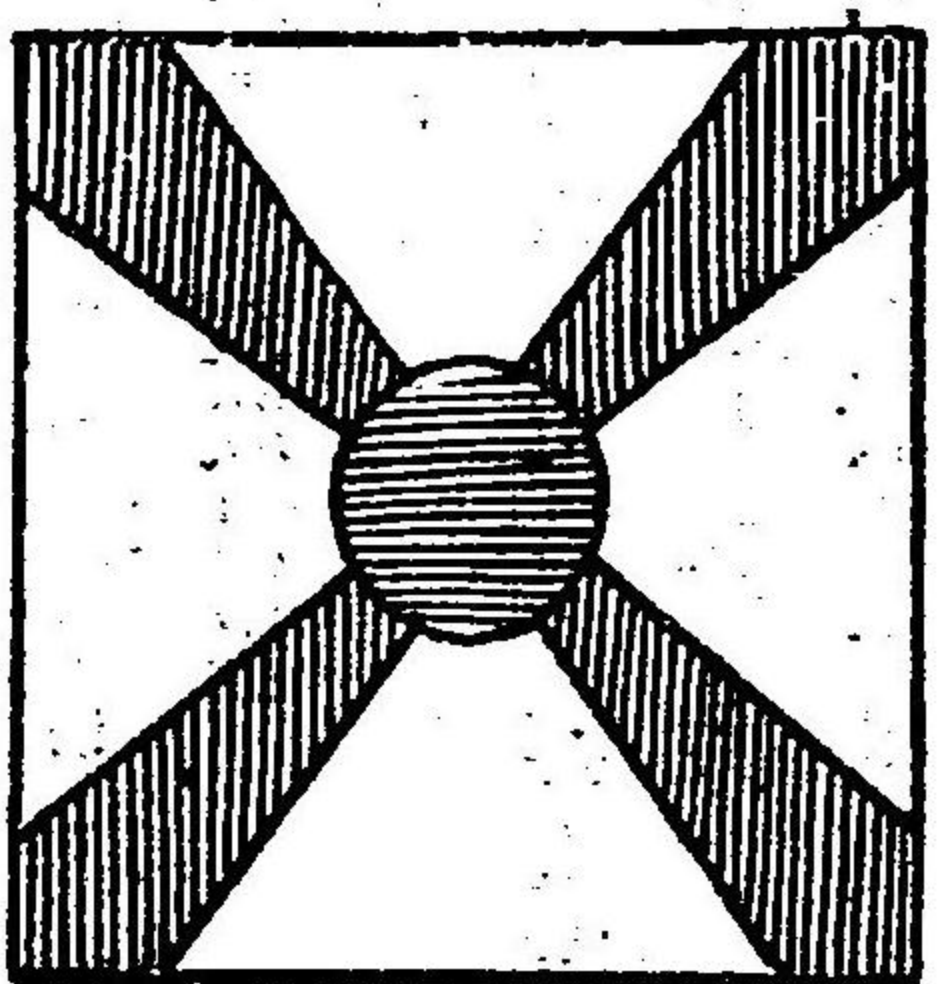
右之外地方祭日ニ付閉關日未定候間追而可及御通達候以上

明治六年二月六日

租稅助 瓜生 寅

各 國 領 事

十二、税關旗章の改廢 明治四年十月二十七日太政官に於て各開港及開市場税關并に艦船及附屬船の旗章を定むること左の如し



印ハ赤色



印ハ青色

地 白 色

後六年三月三十一日之を廢せしむ

各開港開市場税關旗章之儀辛未年中雛形ヲ以テ太政官ヨリ御達シ相成候處今般御詮議之次第モ有之被相廢候旨井上大藏大輔殿ヨリ被相達候ニ付テハ御關ヘモ可相達旨本寮ヨリ申越候間此段及御通達候也

明治六年三月三十一日

中島 租 稅 權 頭

瓜 生 租 稅 助 殿

追而港内碇泊之外國船へ往來故候小船等へハ目標ノタメ通常之御國章ヲ相用可申旨ニ付此段モ及

御達候也

然るに後十二月海軍旗章の改定と共に日章旗の使用を停められしを以て一時赤色旗を用ひ來りしも動もすれば火藥運送船と混同せるを以て遂に七年七月十八日稟議して別圖の旗章を制定せり

各税關附屬ノ皇國様小船旗章更正ノ儀ニ付伺

横 濱 税 關

去明治六年十二月第四百十六號御布告海軍旗章御更正ニ付テハ

皇國様ノ大小船御國內ニ於テ日之丸旗章禁止ニ有之候ニ付各税關附屬之小艇ニハ赤旗章代用致度段相伺許可相成居候處從前御布告相成候火藥運送船へ相用候様標旗ト紛敷此程氣付候處爾來各税關共更ニ別圖ノ如キ旗章相用候様致度此段相伺候也

明治七年七月十八日

租稅助 吉原重俊

租 稅 頭 松 方 正 義 殿

(以上朱書)

伺之通許可相成候條圖面之通更正可被取計候事

明治七年八月十八日

租稅頭 松方正義

税	地	白
關	字	黑

十三、職員月給録編制式の發布 六年四月十三日太政官に於て官員月給及任免給與の規則を改正發布せらる

第二百三十三號

令般官員月給新任轉免等ノ輩給與ノ規則被相改候ニ付テハ毎月差出來候職員表書式ノ備本年三月分ヨリ別紙雛形及ヒ編制式ニ照シ取調早々可差出尤當四月ヨリハ是迄ノ通其月分諸省ハ翌月十日開拓使并各府縣ハ同二十日迄ヲ限リ差出大藏省ヘモ同様可差出事

明治六年四月十三日

太 政 官

職員月給錄編制式

第一章

本官出仕ノ別ナク總テ等級ヲ以テ區分シ人員月給トモ合算記載スヘシ例ハ八十等十人皆勤ナラハ十等十人金四百圓ト記スルノ類

第二章

新任轉任病氣百日以上引籠歸省出仕差止中免職病死等ノ分ハ雛形ニ倣ヒ每等皆勤ノ次ニ記ス可シ

第三章

職員ノ内月給高一般定則ト異ナル者ハ何等幾人ノ下ニ一人ニ付若干圓ノ數ヲ記スヘシ

第四章

技術ノ者及ヒ諸生徒等ニテ官等アル者ハ本錄ニ記載シ官等ナクシテ月給日給等ニ定リアル類ハ附錄ニ記スヘシ

錄ニ記スヘシ

第五章

本錄ノ末ニ月給高并現在ノ職員ヲ合計シ前月トノ比較ヲ記スヘシ但歸省病氣引出仕差止中タリトモ在職ノ者ハ總テ現員ニ算入スヘシ

第六章

病氣并奉職滿何年ノ者免職ニ付別段ノ賜金ハ之ヲ附錄ニ記スヘシ

第七章

御雇御用掛等無等級ニシテ月給日給ニ定リアル類及ヒ雇人外國人等ハ附錄ニ記スヘシ

第八章

他方派出ニ依リ取越ノ月給等ハ其月々ハ割合人員トモ皆勤ノ部ニ加フヘシ

明治六年幾月職員月給錄雛形

一等一人

五百圓

二等以下皆勤ノ例ヲ省キ拜命免職其他月給渡方差異アルモノ、例ヲジテ小ノ月三十日ノ割合ヲ以テ之ヲ掲ク此他大ノ月等ハ各其日數ニ應シ算スヘシ

二等一人 五日拜命ニ付下二十六日分

參百四拾六圓六拾六錢七厘

三等一人 二十一日免職ニ付上三十一日分

貳百四拾五圓

四等一人 十五日五等ヨリ轉任ニ付上十四日分前等下十六日分後等

貳百貳拾六圓六拾六錢六厘

五等二人 一人ニ付百六拾圓宛

參百貳拾圓

六等一人 二十日他へ轉任ニ付十九日分

九拾五圓

七等一人 病氣引籠ノ所十六日ヨリ百日以上ニ付十五日分全額下十五日分三分ノ一

六拾六圓六拾六錢七厘

八等一人 二十五日病死ニ付上二十五日分

五拾八圓參拾參錢參厘

九等一人 歸省ノ處二十日ヨリ出勤ニ付上十九日分四分ノ一

貳拾六圓貳拾五錢

十等一人 二百免職ニ付上二十日分

貳圓六拾六錢七厘

十一等二人 一人ニ付八拾圓宛

百六拾圓

十二等三人 出仕差止中ノ處五日ヨリ出勤ニ付上四日分五分ノ一下六日分全額

九圓

第六篇 職制 租稅案主等

三十七

第六篇 職制 租稅寮主管

二十八

十三等一人 廿六日十二等ヨリ轉任ニ付上十五日分前等下十五日分後等
十四等見習十人 一人ニ付十八圓宛
十五等見習十人 一人ニ付十三圓宛十三日拜命ニ付下十八日分

貳拾貳圓五拾錢
百八拾圓
七拾八圓

等外モ右ニ準シ此次ニ記スヘシ
技術ノ者ニテ官等アル分ハ何等技術幾人ト此次ニ記スヘシ

合計

月末現員三十一人

月給金貳千參百參拾六圓七拾五錢

前月比較

人員 幾人

金 若干圓

増減 増減 減

附錄

三等一人 二十一日免職御用滞在ニ付下九日分三分ノ一

八等一人 病死ニ付三ヶ月分被下

十等一人 免職ノ處滿ニケテ年以上奉職ニ付一ヶ月分並御相代被下

參拾五圓
貳百拾圓
四拾七圓五拾錢

技術ノ者並諸生徒等官等ナキ分及ヒ御雇御用掛ノ類月給日給ノ定リアル分ハ技術ノ者幾人一人ニ付若干圓ツ、若干圓或ハ生徒御用掛ト各給料多寡ヲ以テ區別シ記スヘシ

合計金貳百九拾貳圓五拾錢

御雇外國人有之向ハ此次ニ國名給料多寡ヲ以テ區別シ何國人幾人一人ニ付若干圓宛若干圓ト記シ二名廉以上ナルトキハ金高ノ合計ヲ記スヘシ

本錄附錄ノ金高ヲ總計スヘシ

總計金貳千六百貳拾九圓貳拾五錢

官 苗 字 名 印

明治六年幾月
後七年一月二十二日大藏省所屬判任官の月給を改正し各地方廳と均一ならしむ

第六號
判任官月給之儀別紙之通御達有之候ニ付此段相達候事

松 方 租 稅 頭

明治七年一月二十七日

神 戶 瓜 生 租 稅 助 殿
追而大阪稅關へモ御通知可有之候也

大 藏 省

其省判任官月給之儀明治六年八月中府縣同様改正候様相達置候處自今官等相當ヲ以テ支給候條此旨相達候事

明治七年一月二十二日

太政大臣

三 條 實 美

第六篇 職制

租稅寮主管

二十九

十四、慰勞金下賜の率を定む 六年十一月十七日官吏慰勞金下賜の率を定め横濱税關本局より之を布達せり

各税關在勤判任官以下之者其特別之勤勞有之廉ヲ以テ各自定額金之内臨時酒饌被下方之義伺出置候處今般許可相成判任官一人ニ付金貳圓等外出仕並ニ日給拾圓以上御備之者へ一人ニ付金壹圓月給拾圓以下之者小遣水夫ノ者一人ニ付金五拾錢宛爲慰勞金被下候旨本寮ヨリ達候間此段相達候也
明治六年十一月十七日 租稅權頭 中島 信行

瓜生租稅助殿 夫の祭日若しくは祝日を以て税關事務を閉鎖するは去る五年十一月九日太陽曆の發布と共に始めて治定せられたるものに係り而して地方鎮守祭日當日の鎖關の如きは開港當時以來既に之を慣行し來れるも夫の佳吉神社大祭の當日即ち六月三十日を以て永く鎖關の事を決せるは抑も明治六年十二月九日神戸税關より大阪に於ける該祭日を調査一定せしめたるに仍る

第四百五號

來明治七年中休暇日ノ内地方鎮守祭日之儀ハ其地方ニテ區々ニ可有之候間年内一度大典タルヘキ祭日ヲ以テ休暇致候等ニ付御取調不日御申越有之度右ノ日ヲ相究メ候上書加へ各國領事へ及布告候義ニ有之候依テ爲御心得別紙横濱港ヨリノ來書寫相添差進候也

十二月九日

神戸税關

大阪港税關御中

住吉神社

六月三十日

生國魂神社

九月九日

斯の如くにして六月三十日を以て大阪に於ける地方鎮守祭と決し七年中に於ける鎖關の日を定むると共に遂に永く除らざらしむ

第九十號

來ル明治七年休業日之内鎮守祭日之儀於當關ハ別紙之通相定候様長官ヨリ御指令ニ付則一同書連子御承知迄差進申候御落手有之度候也

十二月九日

大阪文書課

神戸文書課御中

新年	一月一日
元始祭	一月三日
新年宴會	一月五日
孝明天皇祭	一月三十日
紀元節	二月十一日
神武天皇祭	四月三日
鎮守祭	六月三十日
神嘗祭	九月十七日
天長節	十一月三日
新嘗祭	十一月廿三日
煤拂	十二月廿五日
歲末	十二月卅一日

當時税關事務の閉鎖は其都度豫め之を在留各國領事に報知したるといふ今其一例を掲ぐれば左の如

(例一)

以書翰致啓達候然者來ル十一月十一日當關休務之旨第七號附書翰ヲ以申進置候處右取消シ今般更ニ同月三日ニ休務致シ候條此段及御報知候拜具

明治六年十月十七日

瓜生租稅助

各國領事貴下

(例二)

以書翰致啓達候陳者來ル十一月五日當關休務致シ候旨本年第七號附書簡ヲ以申進置候處右期日ヲ取消シ今般更ニ十一月二十三日ヲ以休務致候條此段及御報知候拜具

明治六年十一月四日

租稅寮七等出仕 長岡義之

各國領事貴下

其他官員に對する暑中休暇の如きは常に太政官の指令を待つて初めて之を定めし即ち

院省使府縣ノ官員奏任以上ハ本年八月一日ヨリ十五日以内判任以下者五日以内之休暇ヲ賜リ候條御用向指支無之様便宜御見計休暇可申付事

一長官之儀ハ次官ト可申合事

一休暇中旅行致候儀ハ勝手次第第二御座候得共行ク先々其筋へ相届可申事

但東京在官之分ハ八月一日ヨリ同三十一日迄地方ハ九月三十日迄ノ内ヲ以テ本文ノ如ク休暇賜候儀ト可相心得事

明治六年七月二十二日

太政大臣 三條實美

十六、宿代賜方規則の發布 七年一月十二日太政官より宿料給與に關する規則を配布す

宿代賜方規則

第一條

一東京ヲ除ク外本廳支廳ノ別ナク其在勤ノ官廳ヲ距ル二里未滿ノ地ニ自己ノ邸宅アルモノハ宿代賜ハラス二里以上ヨリ賜ルヘシ

但各寮頭ヨリ各地方ニアル支廳ニ在勤スル者モ亦之ニ準ス

第二條

一官宅アリト雖トモ勝手ヲ以テ居住不致者へハ宿代賜ラサルヘシ

第三條

一拜命赴任トモ月ノ十五日前後ヲ以テ一ヶ月半ヶ月ノ區別ヲ立賜ルヘシ

第四條

一甲廳ヨリ乙廳ニ轉任スルモノハ發程十五日午前ナレハ上半ヶ月分ヲ甲廳ニテ下半ヶ月分ヲ乙廳ニテ渡スヘシ尤モ轉任又ハ赴任トモ行旅中ヲ算セス到着ノ日ヲ以テ前文ノ區別ヲ立ヘシ

第五條

一御雇ノ名義ヲ以テ出仕候者ハ月給ノ多少ヲ以テ左ノ通賜ルヘシ

月給金高

宿代金高

八百圓ヨリ參百五拾圓迄

一ヶ月參圓

貳百五拾圓ヨリ五拾圓迄

貳圓

四拾圓ヨリ參拾圓迄

壹圓七拾五錢

貳拾五圓ヨリ六圓迄

壹圓五拾錢

但給料金高本文月給高ニ確定セサル分ハ其差異ノ金高半數ヨリ多キハ上ノ金高其以下

第六條

一常ニ公廨ノ内ニ住居スル者并ニ兵卒選卒等ノ屯營アル者其他小者日雇職人ノ類ハ宿代賜ラサルヘシ

宿代表

勅任 自一等至三等	奏任 自四等至七等	判任 自八等至十三等	判任 自十四等至十五等	等	外
一月 金 四 圓	同 金 參 圓	同 金 貳 圓	同 金 壹 圓 七 拾 五 錢	同 金 壹 圓 五 拾 錢	

十七、申牒ト名宛 同二十九日を以て租稅寮關係の申牒は自今卿の名宛たるへきを布達せり
壬申常省第百二號ヲ以租稅寮關係之申牒者租稅助宛名ニテ可差出旨及布達置候處右者取消候條
以來卿之名宛ニテ本省へ可差出此旨相達候事

明治七年一月二十九日

大藏卿 大隈重信

十八、長官異動 七年二月二十八日神戸大阪稅關長租稅助瓜生寅大藏省五等出仕に對し神戸大
阪稅關次官長岡義之神戶大阪稅關長に任せられ從六位に叙せらる

十九、夜業料給與の改正 七年三月三十五日第三十三號達を以て夜業料給與を改正す
判任以下事務繁劇亦ハ差掛調物等有之退廳午後八時ヲ過キ候得者辨當料一度被下候處向後夜十二
時ヲ過キ候節ハ二度徹夜ニ至リ候節ハ翌朝分共三度被下候條此旨相達候事

明治七年三月二十五日

大藏卿 大隈重信

二十、當直宿直の履行 八年一月二十日當直宿直の服務を履行せしむ

其關當直宿直共別紙之通相定候間可被得其意候是迄宿直セシ者ハ翌日定刻ヨリ早ク退關致候向モ
有之哉ニ相聞候得共右等ハ當港ヘモ差響不都合ニ候間自今右様之義無之様精々注意有之度此段申
入候也

一月二十日

長岡 關 長

植村 大屬 殿

(別紙)

自今開應當直宿直共壹人宛ニ相定候事

但當宿直中若急病等相發シ難相勤節ハ其次番繰上ケ交代可相勤事

明治八年一月二十日

關 長

二十一、廳舎の移轉 現在大阪稅關の所在地は舊東洋銀行館舎の敷地にして舊大阪稅關の所
在地は東に連續せる現在上屋所在地の一部なりしなり而して初め稅關移轉の年月に就ては確た
る記録の存するものなきを以て今之を知るに由なしと雖も舊東洋銀行館舎を管理せる造幣寮と
の間にて該營造物の授受に際し往復せる當時の文書に徴すれば略其推定を爲すに難からざる
へきを乎左に當時兩者の間に往復せる文書を順次一括して左に之を掲げん
過日貴寮ヨリ御掛合相成候大阪川口東洋銀行建物當關へ引渡之儀今日漸ク本寮ヨリ指令有之候ニ
付來月一日右請取方致度貴寮ニ於テ御差問無之候哉此段前以及御打合候也

神阪稅關長長岡租稅權助代理

植村 租稅 大屬

八年二月二十七日

石 九 造 幣 權 頭 殿

引 渡 目 録

第六篇 職制 租稅寮主督

第六篇 職制 租稅寮主管

三十六

一富島町八拾貳番地

壹ヶ所

但坪數其他圖面之通

右地面内

一煉化石建家并附屬日本建家共

但建家内金庫鉄戸付

一右圖面

壹ヶ所
壹枚

右之通引渡候也

明治八年三月一日

造幣權頭 石九安世

神阪稅關長

長岡租稅權助代理

植村租稅大屬殿

當地川口元東洋銀行へ貸家屋敷是迄造幣寮所轄ノ處一昨一日御引渡相成候趣同寮ヨリ申來候就テハ今般地所名稱區別御改正相成當今所用之次第柄再應可申旨内務省ヨリ御達有之候間石家屋敷御用之次第柄詳細御取調至急御申越有之度此段及御掛合候也

八年三月三日

大阪府知參事

稅關御中

本月一日造幣寮ヨリ請取候當地川口元東洋銀行貸家敷入用之次第柄可申進旨御掛合之趣致承知候右ハ當關方今之建物手狹ニ付追而住居替ノ上關廳ニ相用候義ト御心得候ヘトモ猶關長歸神之上可及御確答此段御報申進候也

八年三月五日

大阪港稅關

大阪府知參事御中

貴寮御所轄富島町八拾貳番地并右地面内建家共本月一日貴寮出仕大東盛光ヨリ引渡目錄繪圖面相添へ當關租稅中屬荒木道繁へ御引繼相成候ニ付即別紙請取證壹葉差進候間御落掌有之度此段回答及ヒ候也

神戶稅關長

租稅權助長岡義之代理

植村租稅大屬

明治八年三月五日

造幣權頭 石九安世殿

請取證

一富島町八拾貳番地

壹ヶ所

但坪數其他圖面之通

右地面内

一煉化石建家并附屬日本建家共

壹ヶ所

但建家内金庫鉄戸付

一右圖面

壹枚

右正ニ請取候也

神阪稅關長

租稅權助長岡義之代理

植村租稅大屬

明治八年三月五日

造幣權頭 石九安世殿

第六篇 職制 租稅寮主管

三十七

此程造幣寮ヨリ當關へ請取候東洋銀行建物所用之次第柄委細可申進段過日御掛合有之候處右ハ其節代理之者ヨリ申進置候通リ當關手狹ニ付追而關廳ニ相用候積ニ有之此段更ニ及御答候也

神戸大阪稅關長

明治八年三月十五日

長岡租稅權助

大阪府知參事御中

是迄貴寮御所轄富島町八拾貳番地元東洋銀行建家之儀本省達之趣ヲ以テ過日拙者出京中右地面并建家共御引渡シ相成然ルニ大藏卿ヨリ之御達ニハ元東洋銀行建家於貴寮御不用ニ屬シ候ニ付大阪稅關へ所轄可致云々下有之建物而已請取候答ニテ地面之儀ハ書載無之就テハ地面并建物共悉皆請取之儀ハ御達面ニ齟齬致候間御引渡目錄御改正御差越有之候様御取計被下度左候ハ其節御送致相成居候目錄ハ追テ返戻ニ可及此段及再應御掛合候也

八年三月二十二日

長岡租稅權助

石丸造幣權頭殿

尙々本文建家之儀地所トモ一轄不致候テハ不都合之儀モ有之於御寮御差支モ無之候ハ右地面共悉皆請取候様申立度候へ共可相成ハ是迄御所有之譯ヲ以悉皆御引繼可相成候様御寮ヨリ御申立被下間敷乎此段モ一應及御頼談候也

二十二、病氣欠勤と診斷書 八年四月二十四日病の故を以て勤務を欠かんとするものは醫師の診斷書を要せしむ

別紙ノ通御達相成候間御通達オヒビ候也

四月二十四日

諸務課 關

檢査課

收稅課

倉庫課

文書課

諸務課

監吏課

是迄病氣欠勤之節届方等閑ニ致シ候向モ有之不都合ニ付向後者時々諸務課へ宛届書差出シ猶一周日ヲ經全快不致向者更ニ醫師診察書ヲ以テ可被届出候事

關長代理

八年四月二十四日

租稅七等出仕 植村昌茂

二十三、電信符合の内達 九年三月七日大藏省に於て電信符號を定めて之を内達す

秘密ニ涉ル至急事件等電信ニテ往復ヲ要スル節換字用法共別紙之通假定候條其旨可相心得此段及内達候也(別紙欠之)

(但本文之儀ハ正副長而已相心得居可申候)

明治九年三月七日

大藏卿 大隈重信

租稅寮七等出仕 植村昌茂殿

三十四、官舎貸渡規則及其改正 九年五月官舎貸渡規則を設け之を配布せり(便宜上改正せるものをも年次一括して掲けり)

第五拾三號

院省使廳府縣

明治七年七月第九十三號同八年五月第八十八號達ヲ廢シ更ニ官舎貸渡規則別紙之通相設候條從來

但獄舎懲役場倉庫定番見張番等并ニ鐵道各驛長各所燈明番等常住官舎ヲ以公用ヲ辨スルモノハ此限ニアラス

第二條

其他公務ノ都合ヲ以官舎貸渡スモノト雖トモ宿代取建ツルハ勿論ナレトモ該官舎ノ内公用私用ニ供スル間席ヲ區別シタル向ハ其私用ニ供スル間席ノミ宿代取立候ヘシ

第三條

官舎新營ノ分ハ其建築費ノ總額古家作分ハ買直段或ハ當時買買スヘキ直段ヲ以滿三年間ノ元金ト定メ爾後滿三年毎ニ一旦評價セシメテ元金ヲ改ム可シ目今新營或ハ買上ノ年度ヨリ現ニ滿三年ヲ過ルモノハ此節一旦評價セシメテ元金ヲ改ム可シ

但新營ノ分元金ハ石礎入費ヨリ計算ス可シ且貸渡ノ節修繕ノ分ハ其費額元金ニ加ヘ爾後修繕ノ費額ハ加ヘサル可シ

後十一月を以て左の如く修正を加へたり
第八十七號

官院 省使 府縣

本年三月第三十七號達官舎貸渡規則第一條中(當住官舎ヲ以公用ヲ辨スルモノ)ノ拾四字削除候條此旨相達候事

明治十三年十一月二十七日

太政大臣 三條 實美

二十五、入舎心得書 官舎規則の精神に伴ひ税關所屬官舎入舎心得書を配布せり即ち左の如し

第三條

官舎ハ事務上便宜ノ爲メ建設セシモノナレハ此戸數ニ滿ルマテハ當税關吏ハ之ニ入舎セサルヲ得ス

第二條

官舎ノ數ハ八戸ニシテ其一號ハ課長ノ名義アルモノニ貸渡スモノトス其餘七戸ハ一切ノ判任官ニ貸渡ス可シ

第三條

單身ニテ一舎住居ニ不便ノモノハ同僚或ハ監吏補ニ限り合居スルヲ得可シ右ノ場合ニ於テハ許可ノ上之ヲ取計フハ勿論惣テ此舎ニ付テノ責ハ入主タルモノ之ヲ負フモノトス

第四條

官舎外廻リノ修繕ハ官費ナリト雖モ疊建具壁窓扉同硝子叩キ漆喰庖厨ノ附屬品及ヒ井具ノ修理等ハ自費ヲ以テ辨給スルモノトス尤モ官費ノ分ト雖トモ天然ニアラス過チニテ破毀セシトキハ一切自費ニテ辨セシム

第五條

官舎ニ付屬スル一切ノ物品ハ入舎ノ節借用證書ヲ差入可シ之ヲ還納スルニ當リ其證書ト照合シ若シ欠點又ハ毀損アルトキハ規則第八條ノ如ク之ヲ償辨ナサシム

第六條

入舎人自費建増ハ免許ヲ得ヘシ若シ允許ヲ得スシテ官舎ノ模様ヲ變更シ或ハ煖爐ヲ仕付又ハ附屬品ヲ交換スル等ノコトヲ見認ルトキハ直ニ從前ノ姿ニ爲サシムルハ勿論自然建築上惣体ノ保チノ害トナルコトアレハ之ヲモ相償ハシム

第七條

第六篇 職制 租稅寮主管

四十

ノ官舎或ハ官廳附屬ノ家屋等貸渡候向ハ本年一月一日ヨリ宿代取立大藏省へ可相納尤モ元金建坪等取調之義院省使ハ大藏省廳府縣ハ内務省へ可申出此旨相達候事

但借地ノ義ハ明治八年七月第百十四號布告官有地第二種但書之通可相心得事

明治九年五月十五日

太政大臣 三條 實美

(別紙)

官舎貸渡規則

第一條

官舎貸渡ストキハ毎月宿代取立ツ可シ

但倉庫定番牢番見張番等及其他本人ノ情願ニ由ラス公務ノ都合ヲ以テ貸渡スモノハ此限リニアラス

第二條

宿代ハ元金之八分ヨリ一割迄ヲ制限トシ適宜斟酌シテ取立ツ可シ

右取立高之内七分ハ上納三分ハ其廳ニ備置修繕費ニ充ツ可シ

第三條

官舎新營之分ハ其建築費ノ總額古家作ノ分ハ買上直段或ハ當時賣買スヘキ直段ヲ以テ元金ト定ム可シ

但貸渡ノ節修繕ノ分ハ其費額ヲ元金ニ加ヘ爾後修繕ノ費額ハ加ヘサルヘシ

第四條

宿代ハ年ヲ以テ計算ス可シト雖トモ取立方ハ月割タルヘシ

但十六日以後ニ貸渡タルトキ又ハ十五日以前ニ返却シタルトキハ半月分取立可シ

第五條

宿代上納方ハ三ヶ月毎ニ取調修繕費差拂ノ分ハ毎年六月マテニ精算帳差出シ殘金アラハ後日ノ費用ニ充置ク可シ

第六條

官舎外廻リ雨漏又ハ臨時大破ノ外一切ノ修繕ハ自費タルヘシ

第七條

拜借人自費建増等願出ルトキハ實地検査ノ上差支無之分ハ允許スヘシ

第八條

拜借人交換ノ節ハ篤ト検査ヲ遂ケ若毀損スル所アルカ又ハ附屬品等不足スルキハ辨償セシムヘシ

但自費建増等ノ存廢ハ新舊拜借人ノ示談ニ任ス可シ

後十三年左の改正を爲して之を達示す

第三十七號

官 院 省 使 府 縣

明治九年五月第五拾三號達官舎貸渡規則第一條但書并第三條左之通改正候條來ル四月一日ヨリ可致施行此旨相達候事

明治十三年三月二十七日

右大臣 岩 倉 具 視

(別 紙)

官舎貸渡規則

第一條

官舎貸渡ストキハ云々

第六篇 職制 租稅寮主管

四十二

但獄舎懲役塲倉庫定番見張番等并ニ鐵道各驛長各所證明番等常住官舎ヲ以公用ヲ辨スルモノハ此限ニアラス

第二條

其他公務ノ都合ヲ以官舎貸渡スモノト雖トモ宿代取建ツルハ勿論ナレトモ該官舎ノ内公用私用ニ供スル間席ヲ區別シタル向ハ其私用ニ供スル間席ノミ宿代取立候ヘシ

第三條

官舎新營ノ分ハ其建築費ノ惣額古家作分ハ買直段或ハ當時買買スヘキ直段ヲ以滿三年間ノ元金ト定メ爾後滿三年毎ニ一旦評價セシメテ元金ヲ改ム可シ目今新營或ハ買上ノ年度ヨリ現ニ滿三年ヲ過ルモノハ此節一旦評價セシメテ元金ヲ改ム可シ

但新營ノ分元金ハ石礎入費ヨリ計算ス可シ且貸渡ノ節修繕ノ分ハ其費額元金ニ加ヘ爾後修繕ノ費額ハ加ヘサル可シ

後十一月を以て左の如く修正を加へたり
第八十七號

官院 省使 府縣

本年三月第三十七號達官舎貸渡規則第一條中(當住官舎ヲ以公用ヲ辨スルモノ)ノ拾四字削除候條此旨相達候事

明治十三年十一月二十七日

太政大臣 三條 實美

二十五、入舎心得書 官舎規則の精神に伴ひ税關所屬官舎入舎心得書を配布せり即ち左の如し

第一條

官舎ハ事務上便宜ノ爲メ建設セシモノナレハ此戸數ニ滿ルマテハ當税關吏ハ之ニ入舎セサルヲ得ス

第二條

官舎ノ數ハ八戸ニシテ其一號ハ課長ノ名義アルモノニ貸渡スモノトス其餘七戸ハ一切ノ判任官ニ貸渡ス可シ

第三條

單身ニテ一舎住居ニ不便ノモノハ同僚或ハ監吏補ニ限り合居スルヲ得可シ右ノ場合ニ於テハ許可ノ上之ヲ取計フハ勿論惣テ此舎ニ付テノ責ハ入主タルモノ之ヲ負フモノトス

第四條

官舎外廻リノ修繕ハ官費ナリト雖モ疊建具壁窓扉同硝子叩キ漆喰庖厨ノ附屬品及ヒ井具ノ修理等ハ自費ヲ以テ辨給スルモノトス尤モ官費ノ分ト雖トモ天然ニアラス過チニテ破毀セシトキハ一切自費ニテ辨セシム

第五條

官舎ニ付屬スル一切ノ物品ハ入舎ノ節借用證書ヲ差入可シ之ヲ還納スルニ當リ其證書ト照合シ若シ欠點又ハ毀損アルトキハ規則第八條ノ如ク之ヲ償辨ナサシム

第六條

入舎人自費建増ハ免許ヲ得ヘシ若シ允許ヲ得スシテ官舎ノ模様ヲ變更シ或ハ煖爐ヲ仕付又ハ附屬品ヲ交換スル等ノコトヲ見認ルトキハ直ニ從前ノ姿ニ爲サシムルハ勿論自然建築上總体ノ保チノ害トナルコトアレハ之ヲモ相償ハシム

第七條

第六篇 職制 租稅寮主管

四十四

入舍人申値ノ上執事ヲ設ケ戸籍其他該區ニ關スル一切ノ雜務ヲ管理ス可シ

第三條

家屋中ハ勿論其他道路之如キハ常ニ清潔ニ爲サ、レハ健康ニ害アルヲ以塵芥ヲ堆積シ或ハ濫リニ腐敗物ヲ捨テ汚穢セサルコト并前後兩側ノ道路其中央ヲ界トシテ之ヲ掃除スルコトハ各舍主ノ責任ト雖トモ兼テ之レカ方法ヲ取設ケ置クヘシ而シテ執事ハ其監督ヲ主ルヘシ

第九條

若督責之上之ヲ等閑ルモノアルトキハ直ニ掃除人ヲ雇入之ヲ掃除ナサシメ其賃金ハ其舍主或ハ戸別ヨリ取立ルコトアル可シ

第十條

官舎ハ第一ニ火災ノ憂ナカランコトヲ要スレハ若煖爐設クルモノアラハ過失ナキ様注意ス可シ又石炭油ハ危險ノ物質ニシテ不慮ノ大害ヲ發スルモ難計ケレハ就寢後ハ必ス之ヲ點燈スルヲ許サス

第十一條

風雨其儘ニテ臨時ノ大破アルトキハ速ニ其懸ヘ申出可シ事實檢閲之上官費ニ屬スヘキモノハ修理ス可シ

第十二條

地租ヲ除クノ外ノ賦課ハ惣テ入舍人ヨリ之ヲ辨ス可シ

第十三條

當關奉職ヲ止ムモノハ其日ヨリ十日内ニ官舎ヲ還納ス可シ

第二章 關稅局主管

九、所屬の異動

明治十年一月十一日各省中の諸寮を廢し又官等を改定せしむ此結果大藏省中租稅寮を廢し更らに租稅關稅の兩局を設け各稅關の所屬を關稅局に歸せしめ大、少書記官（正權）を奏任とし判任の等級を一等屬以下十等屬に分ち又一等以下四等に至ル等外吏を置かしむ

今般別紙ノ通廢寮被仰出候處判任官以下之義ハ當務爲取扱當分是迄ノ通可爲致此旨相達候事

租稅局長 吉原重俊

神戶大阪稅關長

長岡義之殿

(別紙寫)

第三號

院省何廳府縣

各省中諸寮被廢候事

但從前諸寮事務ハ各省長官ノ見込ヲ以適宜ニ局ヲ設ケ可届出事

各省中大小亟己下被廢候事

諸省書記官屬官等級左之通被定候事

大書記官	四等	月俸	貳百圓
權大書記官	五等	同	百五拾圓
少書記官	六等	同	百圓
權少書記官	七等	同	八拾圓
以上奏任官	八等	月俸	六拾圓
一等屬	八等	月俸	六拾圓

第六篇 職制 關稅局主管

四十五

第六篇 職制 關稅局主管

二	等	屬	九	等	同	五	拾	圓
三	等	屬	十	等	同	四	拾	圓
四	等	屬	十一	等	同	四	拾	圓
五	等	屬	十二	等	同	參	拾	圓
六	等	屬	十三	等	同	參	拾	圓
七	等	屬	十四	等	同	貳	拾	圓
八	等	屬	十五	等	同	貳	拾	圓
九	等	屬	十六	等	同	拾	五	圓
十	等	屬	十七	等	同	拾	貳	圓

以上判任

勅任官以上錄稅自今總テ二割ヲ被徵候事

岩相達候事

明治十年一月十一日

乙第四號

太政官 三條實美

府 縣

本年第三號公布ノ通り當省ノ諸寮被廢候ニ付更ニ九局ヲ設置シ且卿輔ノ詰所ヲ本局トシ附屬ノ分課別紙ノ通相定メ候條此旨相達候事

但從前租稅出納國債頭等ニ宛差出ヘシ文書ハ總テ該各局長ニ宛可差出候尤銀行ノ事務ハ改テ大藏卿ニ宛貸附掛首長宛ノ書類ハ國債局長ニ宛可差出候事

明治十年一月十七日

大藏卿 大隈重信

大藏省分局

第一	租稅	稅局
第二	關稅	稅局
第三	檢査	稅局
第四	國債	稅局
第五	出納	稅局
第六	造幣	稅局
第七	紙幣	稅局
第八	常平	稅局
第九	記錄	稅局
第十	本局附屬分課	稅局
第十一	議案	稅局
第十二	傳票	稅局
第十三	銀行	稅局
第十四	受付	稅局
第十五	統計	稅局
第十六	翻譯	稅局
第十七	用度	稅局

乙第五號

第六篇 職制 關稅局主管

府 縣

四十七

第六篇 職制 關稅局主管

四十八

當省各局長人名左之通候條此旨相達候事
明治十年一月十七日

租稅兼關稅局長
 檢査局長
 國債局長
 出納局副長
 造幣局長
 紙幣局長
 記録局長

大藏卿 大隈重信
 大書記官 吉原重俊
 大書記官 安藤就高
 大書記官 郷純造
 少書記官 與倉守人
 大書記官 石丸安世
 大書記官 得能良介
 大書記官 遠藤謹助

この變更と同時に元神戶、大阪稅關長岡義之大藏少書記官に任し關稅局勤務、神戸大阪稅關長を命せられ大阪稅關屬僚の等級を定むること左の如し

大阪港稅關官員姓名

大藏六等屬 五島 貞眞
 同 七等屬 荒木 道繁
 同 八等屬 田島 蕃樹
 同 九等屬 梅島 重遠
 同 九等屬 野田 米十郎
 同 九等屬 岡部 益明
 同 十等屬 益田 賀眞

御用掛 但(等外吏之心得)
 大 監 吏 三宅 頼吉
 同 玉置 義行
 同 山崎 信利
 中 監 吏 阪本 長迪
 同 石原 信唯
 同 弓削 信
 同 横川 向

少 監 吏 神崎 拙夫
 同 村竹 祐保
 同 官内 猪三郎
 同 山下 有任
 同 大國 義一

少 監 吏 中村 清房
 同 吉井 正教
 同 寺西 三吉

而して別に監吏に對し關稅局長より左の如く達せり

大神戶 稅 關

今般租稅寮被廢止候ニ付監吏總長以下諸官名モ都テ被廢止候儀ニ候條追而何分之御沙汰有之候迄
總長吏長之職務ハ屬ニテ取扱可爲致且監吏之職務ハ當分舊ノ如ク御用掛ヲ以大中少監吏申付舊額
ノ月俸給與候様可被致此旨相達候事

十年一月二十五日

關稅局長 吉原重俊

後ち五月二十六日監吏及監吏補を置き之に關する規程を制定せり

十、鑑定役の新設 從來通關貨物に對する鑑定事務は之を目利人と名け市井の經驗ある商人に囑し品質價格の鑑別に任せしめたるも貿易事業の進歩に伴ひ貨物の品類に雜駁を加へ來り到底從來の如く單に之を目利人に一任する能はざるを以て遂に明治十一年十月新に鑑定役を設け之を各稅關に配置せしむ

第四十四號

官省院使府縣

大藏省中鑑定役ヲ置キ月俸左ノ通被定候事

鑑 定 役 判 任 月 俸 貳拾圓以上 貳百圓以下

第六篇 職制 關稅局主管

四十九

第六篇 職制 關稅局主管

五十

鑑定役見習 等 外 月 俸 貳拾參圓以下

右相達候事

明治十一年十月二十三日 太政大臣 三條實美

茲に於て關稅局長より鑑定役及同見習の官等の次第を定めて之を達示すること左の如し
今般鑑定役同見習ヲ被置候ニ付テハ他ノ判任官以下へ對シ順次之儀ハ左之通可被相心得此段相達候事

明治十一年十一月十八日

遠藤關稅局長

長岡稅關長殿

一等監吏

二等監吏

以下順次之レニ倣フ

鑑定役

御用掛

第 外 吏

鑑定役見習

監 吏 補

准 等 外

但前同斷

後更らに目利人廢止の期を示して曰

第五三六號

神 戶 稅 關

本年太政官第四十四號ヲ以テ鑑定役被置候旨被相達候ニ付テハ稅關目利人之儀ハ來ル明治十二歲一月ヨリ被相廢候條此旨相達候事

明治十一年十二月十七日

關稅局長 遠藤謹助

十一、稅關職制并事務章程の改定 明治十五年三月三十日稅關職制并事務章程を改定す是より先一月十七日關稅局職制并に事務章程を定め各稅關を統轄し關稅事務一切を管理せしむ此結果今回の改正を見るに至れり改正職制及章程は左の如し

稅關職制并事務章程

稅關ハ關稅局ニ屬シ海外輸出入貨物ノ稅務ヲ管理スル所ニシテ左ノ諸課各其事務ヲ分掌ス
檢査課、鑑定課、收稅課、倉庫課、諸務課、監視課
但鑑定課監視課ヲ設置セサル稅關ニ於テハ其事務ハ檢査課之ヲ兼任ス

職制

長 一人

一 部下ノ官吏ヲ統率シテ主管ノ事務ヲ總理ス

一 判任官ノ進退黜陟ハ之ヲ卿ニ具シ等外以下ハ之ヲ專行ス

一 主管ノ事務ニ付要スル所ノ法律規則ヲ起算シ關稅局長ニ具スルヲ得

屬

一 各諸務ニ從事ス

監 吏

第六篇 職制 關稅局主管

五十一

監吏補

一 密商脫稅ノ監視ニ從事ス

鑑定役

鑑定役見習

一 輸出入貨物ノ鑑定ニ從事ス

検査課

一 船長又ハ貨主ノ願書ヲ受ケ之ヲ翻譯シテ其願書ト積荷目錄ヲ對照シ其貨物ノ尺度斤量ヲ調査シテ姦詐ヲ摘發スル等ノ事ヲ掌ル

鑑定課

一 貨物ノ性質價值ヲ査定シ及有稅無稅ノ區畫ヲ鑑別シ且損傷ノ有無ヲ調査シテ課稅ノ正鵠ヲ得ル等ノ事ヲ掌ル

收稅課

一 貨物船舶倉庫等ニ係ル諸稅金ヲ收領シ及ヒ各種ノ免狀證書類ヲ授與シ又ハ增價買上品ノ代金ヲ賣主ニ附與スル等ノ事ヲ掌ル

倉庫課

一 倉庫上屋ヲ開閉シ及ヒ貨物ヲ出納シ又ハ入庫貨物ノ火災損傷ヲ請負ヒ其他手數既濟ノ貨物ニ檢印スル等ノ事ヲ掌ル

諸務課

一 公文ヲ受授シ書類ヲ編纂シ諸表ヲ調製シ及ヒ各種ノ免狀證書ニ捺印シ其他關中一切ノ雜務ヲ掌ル

監視課

一 本課ハ監視章程ニ照シ從事ス

事務章程

主管ノ事務左ニ列記スルモノハ關長其意見ヲ付シ關稅局長ヘ伺テ經テ施行ス其他ハ關長之ヲ專行スルコトヲ得

但主管ノ事務ヲ施行スルニ付テハ長皆其責ニ任ス

第一條

條約上ニ關シ疑義ニ涉ル事件ヲ處分スル事

第二條

成規慣例ナキ事件ヲ處スル事

第三條

出張所并各課ヲ廢置シ及ヒ其事務條款ヲ設定又ハ變更スル事

第四條

外國領事ノ裁判不服ノ節控訴或ハ上告スル事

第五條

管掌ノ帳簿及表式ヲ定メ又ハ更正スル事

第六條

新タニ書籍ヲ刊行スル事

第七條

關長自ラ各地方(東京ヲ除ク)ヘ出向スル事

第八條

部下官吏ノ勤勞ヲ按シテ手當金又ハ褒賞ヲ給與スル事

第九條

雇外國人へ歸省又ハ休暇ヲ許與シ或ハ他所へ派出ヲ命スル事

この改定に伴れて大阪税關は四月十三日を以て諸務課中に文書掛を置き左の任命を爲せり

- 文書掛 長 五等 屬 水 上 守 如
- 文書掛 兼 勤 六等 屬 堀 百 千
- 同 等外一等出仕 久 浦 鹿 太 郎

十二、庶政一括二 關稅局主管の時に於て當稅關事務の功程を問へは先づ十年一月大藏省租稅寮の廢止に伴ひ稅關事務は擧げて同省關稅局の主管に歸し從來の稅關長は大藏少書記官を以て宛て屬僚以下の官等改正する又新たに監吏監吏補を置き官等月俸並に服制等を規定し十一年十月始めて鑑定役、同見習役を置かるゝと共に翌年一月一日を以て從來の目利人を廢する等は等を主要なるものとして諸般事務の上に刷新を加ふると共に諸種の設備計畫等改進の域に漸く歩一步を進め是を人に喻ふれば猶ほ加冠獨立せんとする時の如き乎今庶務に關する主なるものを一括すれば畧左の如し

一、惡疫に關する注意 十年九月二十五日コレラ病流行に際し衛生上に關する訓示を爲して曰

虎列刺ニ關スル件

近日當港へモ虎狼痢病漸々浸入之趣ニ相聞へ不容易之事ニ付兼テ各自可心得箇條左ニ

一 當關吏員之儀ハ殊ニ來港ノ民人及荷物ニ密接スルヲ以テ最モ感染之恐アレハ豫テ豫防藥ヲ給與致置ニ付出入動作ノ際之レヲ用ヒテ之カ扞禦ヲ爲スヘシ右平生家居之時各能其身體ヲ保養シ其注意ヲ爲スヘキハ言ヲ俟ス候事

一 在關之節頓ニ該病ニ罹リ現ニ吐瀉等ノ痕跡ヲ留ムルモノハ速ニ消毒之術ヲ施サ、レハ他ニ傳播之憂アルヲ以テ同僚之内ヨリ直ニ之ヲ報スヘキ事

一 未タ發病セサルモ已ニ其病ノ崩アルモノヲ互ニ看得セハ亦速ニ之ヲ報スヘキ事

一 各自家眷之内發病ノ者アル時ハ出關セシテ其旨ヲ報スヘキ事
十年九月二十五日 長岡 稅 關 長

二、國旗の撤去 同十二月十八日官衙掲揚の國旗を撤せしむ
第九十四號

大 藏 省
開 拓 使
府 縣

自今府縣廳并ニ稅關等國旗掲揚スルニ不及候條此旨相達候事

明治十年十二月十八日

太政大臣 三 條 實 美

三、水夫以下の増給 十三年八月十八日水夫定人足以下増給に就て上請許可せらる今右伺案を掲げて當時の事情を悉さん

水夫定人足及小使増給之儀ニ付伺

近年諸物價非常之騰貴ニ因リ水夫定人足及小使トモ活路甚困窮之趣キヲ以相當之増給歎願致候回顧セハ今迄御給與相成居候同人等給料之儀ハ去明治五年頃則米價石ニ付凡四圓左右之頃御取定相成シモノニ有之候然ニ當今ニ到テハ右米價未曾有之騰貴則石ニ付拾壹圓餘ノ價額ニ達シ歎願之旨趣何分難默止儀ト愚考仕候ニ付試ニ當地一般之人足賃料等ヲ取調見候處大別三等トセハ上給參拾錢中等貳拾五錢尤モ下給之者ト雖モ貳拾錢ヲ降ス依テ今假ニ當關定人員及其他之者ヲシテ他之上

第六篇 職制 關稅局主管

五十六

中日雇人足輩ニ比スレハ定人足ハ上等ニ適充スヘシ且小使等ノ如キモ猶中等ニ當ラサルヲ得ス尤モ當關御雇之輩ヘハ二季共ニ服及靴等被下候ニ付夫是ヲ見込出格之御詮議ヲ以別紙之通リ御増給相成様仕度此段相伺候也

明治十三年八月十八日

四等屬 五島貞真

關長 高橋新吉殿

水夫定人足小使等増給見込書

月給之分

是迄七圓

一七圓五拾錢

但シ別ニ賜レモノナシ

是迄六圓

一六圓五拾錢

是迄五圓

一五圓五拾錢

但シ別ニ宿直賄料壹ヶ月七拾五錢ヲ賜ル

同

右月給

日給之分

水夫小頭

壹人

并水夫

四人

小使小頭

壹人

參拾六圓

參拾九圓也

是迄拾九錢

一貳拾參錢

但シ別ニ賜モノ無之

同拾五錢

一拾七錢

但シ別ニ宿直賄料壹ヶ月凡七拾五錢ヲ賜ル

同

參拾圓六拾錢

右日給

但シ以上日給ノ分ハ壹ヶ月三十日ヲ以テ起算ス

四、文房具に關する達示 十三年十二月十六日大藏省官吏使用の筆墨を一定する外數件の規定

を達して曰

第二六〇號

當省官吏使用ノ筆墨ヲ一定スル外數件別紙ノ通相定候條此旨相達候事

十三年十二月十六日

(別紙)

一官吏以下普通使用之筆墨左ノ種類ニ相定メ用度課ニ於テ豫テ買入書各局課掛ノ請求ニ應スヘシ

尤モ自今寫字生ニハ筆墨ヲ相渡サ、ルヘシ

上水筆 壹枚凡並水筆 壹枚凡眞書 壹枚凡此種類ノ外事務上格別ノ品類入用ノ節ハ其筆墨ニ名稱ト取

第六篇 職制 關稅局主管

五十七

要之事由ヲ詳悉シ伺フ^{合評}度課經ルヘキ事

但造幣印刷局及各出張所各稅關ニ於テ普通使用ノ分ハ本文代價ニ準據スヘシ尤格別ノ品類入

用ノ節ハ本文同様伺フ經ヘキ事

一省中相互ニ往復スル文書^{或ルモノ}ハ除ク半紙十三行野ヲ用フヘキ事

但經費收支仕出書ヘ見合ノ爲添付スル回議寫等ノ如キモ同様相心得ヘシ

一普通使用ノ半切ハ鼠或ハ最下等ノ品ヲ用ヘキ事

但事務上格別ノ品類ヲ要スル節ハ筆墨ノ例ニ依ルヘシ

一時計ハ各局課掛共一ケヲ限リ候事

但事務上増加ヲ要スルトキハ伺^{合評}出ツヘキ事

一煙草盆ハ一室ニ壹個若クハ貳個ヲ限リ候事

一各局課臨時雇上本綴經師職ハ用度課脇ノ一ケ所ニ差置同課ニ於テ職工進退ヲ監視スル事

右之通相定候事

五、稅關附屬船旗章の改正 十四年二月二十三日稅關附屬船に掲揚する旗章を改定す

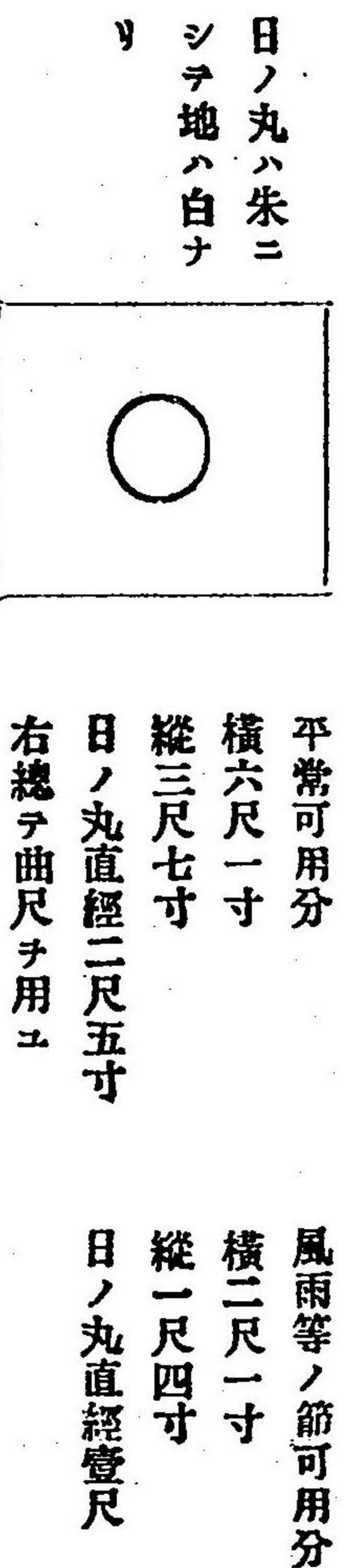
神 戶 稅 關
大 阪 稅 關

稅關附屬船ニ掲揚スル旗章ノ義ハ其船ノ種類ニ從ヒ別紙雛形ノ通相定候條可被得其意此旨相達候事

明治十四年二月二十三日

關稅局長 蜂須賀茂韶

各稅關附屬ノ小蒸氣船ニ用ユル旗章



六、執務時間の一定 同四月十二日稅關開鎖時間を一定して曰

大 阪 稅 關

當關開鎖之義ハ本月十五日ヨリ以降午前第十時ヨリ午後第四時迄ト改正候條此旨相達候事

但毎年五月ヨリ十月迄開閉時間モ本文同様改正候事

明治十四年四月十二日

大阪稅關長 高橋新吉

茲に於て從來毎年五月より十月まで十一月より翌年四月まで開閉時間の相異は此改正以後年中一定せるに至れり其他同七月十一日當關判任以下の暑中休暇日を定め判任官十日等外吏七日小使定人足給仕等は昨年の如く五日間を以てせしむ

左の如し

明治十三年七月ヨリ十四年六月迄大阪稅關調書

精算セシ港稅簿

收稅金原簿

全返戻簿

同受拂簿

壹 冊
壹 冊
壹 冊

第六篇 職制 關稅局主管

五十九

第六篇 職制 關稅局主管

六十

同種類仕譯簿

壹册

當港收納計算ハ其一日毎ニ必ス之ヲ審密ニ查算シ之レヲ積テ一月一歳ノ精算ヲ成セリ別ニ後日ニ至リ精算ヲ要セス

製爲セシ諸表簿

諸官省往復留

壹册

本局指令書并御達留

壹册

神戸税關來翰留

壹册

神戸税關往翰留

壹册

諸官省電報往復留

壹册

關長へ伺書

壹册

收税金出納局及本局納書

壹册

經費金精算書留

壹册

製爲セシ諸計表

需用費計算表

貳拾四葉

官員出勤表

拾貳冊

藥種表

參拾六葉

輸出入物品表

甲乙 貳拾四葉

同元價國分要計

貳拾四通

收稅表

貳拾四葉

傳票

貳百四拾六通

返稅二十八通
受換十一通

監視課日表

參百六拾五枚

倉庫出入表

六枚

船舶積荷元價表

拾貳冊

收税金毎旬間報告表

七拾貳通

但正副共

諸帳簿類

需用品受拂簿

壹册

經費金受拂簿

壹册

內國西洋形船出入港調查簿

壹册

送付セシ公文

參百八拾七通

領収セシ公文

貳百六拾七通

送付セシ電信

拾五通

領取セシ電信

九通

領取セシ諸願書

百六拾貳通

臨時開關及仕役共ニ無之

住翰之部

來翰之部

神戸税關

參百五拾貳葉

全電報

拾貳度

關稅局全

壹度

商務局全

壹度

第六篇 職制

關稅局主管

六十二

第六篇 職制 關稅局主管

長崎稅關電報	壹 度	
橫濱稅關書翰	壹 通	
諸官省全	參拾四通	壹 通
全各國商人ヨリ差出シタル輸出入願書之部		參拾五通

有稅品	九百貳拾六枚	輸出之部
無稅品	五拾壹枚	七百八拾五枚
稅濟品	貳百九拾參枚	貳百拾壹枚
官用品	四拾貳枚	五拾枚
預り稅	拾壹枚	五枚

各國商人倉庫敷料納書	參拾壹枚
全貨物庫出願書	七枚
全貨物庫入願書	五枚

八、正副二通及文書掛 十五年二月十六日神戸稅關文書掛よりの照會により自今諸同上申等に
して指令を要するものは正副二通を送付せしめ同四月十三日新たに諸務課中に文書掛を置き
吏員を任命す

九、火災に對する注意 十六年一月四日火災に就て注意する處あり即ち

火災ノ恐ルヘキハ勿論之處冬候ニハ暖爐等自然火ヲ用ユル故一層注意ヲ爲シ疎漏無之様可被相心
各縣

得段大藏卿ヨリ御口達之旨ニ依リ本局長ヨリ達ノ趣モ有之候ニ付取締方一層注意可致此段相達候
事

一月四日

大阪稅關長 穎川君平

十、長官の異動 十年一月十一日租稅寮の廢止官等改正の結果神戸、大阪稅關長岡義之を大
藏少書記官に任じ更に神戸、大阪稅關長を命せられ十三年三月(六日乎)他に轉じ大藏少書記
官高橋新吉後を襲ひて神、阪兩稅關長を兼ね十四年十一月七日高橋關長上京不在中は鑑定官
役渡邊牧太事務代理たり後十二月八日神、阪稅關長高橋新吉米國紐育領事に轉じ十日渡邊鑑
定役神戸、大阪稅關長心得を命せられ同十五年六月二十四日渡邊稅關長心得を免せられ大藏
少書記官穎川君平神戸、大阪稅關長を命せらる

第三章 主稅局主管

十三、主管變更と吏員 明治十七年五月二十日租稅關稅の二局廢せられ新たに主稅局を置き各稅關
をして同局の主管に歸せしめ又稅關に一等より十等に至る主稅屬一等より九等に至る主稅監吏及び
一等より四等に至る監吏補を配置せしむ當時大阪稅關に於ける吏員は左の如し

六等主稅屬	前野直久	九等主稅屬	中島重三郎
六等主稅屬	岡部益明	十等主稅屬	佐々信吉
七等主稅屬	結城正章	等外一等	倉田稔
七等主稅屬	山口太郎	一等主稅監吏補	横川向
七等主稅屬	三栗三十郎	一等主稅監吏補	中村清房
八等主稅屬	栗原和二郎		

第六篇 職制 主稅局主管

第六篇 職制 主稅局主管

等 外 二 等	林 鐵次郎	三 等 主 稅 監 吏 補	樺 野 清 三
等 外 一 等	渡邊弓五郎	四 等 主 稅 監 吏 補	横 川 祥 太 郎
二 等 主 稅 監 吏 補	神 崎 拙 夫	四 等 主 稅 監 吏 補	藤 森 滋 雄
三 等 主 稅 監 吏 補	北 出 元 信	四 等 主 稅 監 吏 補	平 井 團 次 郎
三 等 主 稅 監 吏 補	小 松 作 次 郎	四 等 主 稅 監 吏 補	富 永 亮 三 郎
三 等 主 稅 監 吏 補	菟 東 清	四 等 主 稅 監 吏 補	丹 治 於 菟
三 等 主 稅 監 吏 補	笹 田 淺 太 郎	御 雇	小 島 市 兵 衛
三 等 主 稅 監 吏 補	大 國 義 一	御 雇	鹽 野 新 三 郎
三 等 主 稅 監 吏 補	中 野 甲 子 郎	御 雇	杉 眞 次 郎

六十四

十四、事務章程及分掌規程の制定 十七年七月四日稅關事務章程及分掌規程を制定し主稅官長より之を配布す

事務章程

主管ノ事務左ニ列記スルモノハ稅關長其意見ヲ付シ主稅官長ニ伺テ經テ施行ス其他ハ稅關長之ヲ專行スルコトヲ得

但シ主管ノ事務ヲ施行スルニ付テハ稅關長皆其責ニ任ス

第一條

條約上ニ關シ疑義ニ涉ル事件ヲ處分スル事

第二條

成規慣例ナキ事件ヲ處分スル事

第三條

出張所并各科ヲ廢置シ及ヒ其事務條款ヲ設定又ハ變更スル事

第四條

外國領事ノ裁判不服ノ節控訴或ハ上告スル事

第五條

掌管ノ帳簿及ヒ表式ヲ定メ又ハ變更スル事

第六條

稅關長自カラ各地方(東京ヲ除ク)ニ出向スル事

第七條

雇外國人ニ歸省又ハ休暇ヲ許與シ或ハ他所ニ派出ヲ命スル事

第八條

判任官以下ノ勤勞ヲ按シテ手當金又ハ褒賞ヲ給與スル事

第九條

新ニ書類ヲ刊行スル事

第十條

例規ナキ官金出納之事

第十一條

一廉百圓以上ノ費額ヲ以テ諸書式帳簿ヲ印刷シ及消耗品并備品ヲ購買スル事

第十二條

船舶ヲ製造シ又ハ購買シ及ヒ拂下ケ又ハ貸渡ス事

第六篇 職制 主稅局主管

六十五

第六篇 職制 主稅局主管

六十六

第十三條

一 廉百圓以上ノ費額ヲ以テ各所ヲ新營シ及ヒ修繕シ又ハ變更スル事

第十四條

一 廉百圓以上ノ費額ヲ以テ船舶ヲ修繕スル事

第十五條

地所家屋ヲ買上ケ又ハ拂下ケ及ヒ借入又ハ貸渡ス事

稅關分掌規程

稅關

主稅局ニ屬シ海關稅務ヲ管理スル所ニシテ左ノ諸科各其事務ヲ分掌ス

檢査科 鑑定科 收稅科

倉庫科 文章科 製表科

監視科 會計科

但鑑定科監視科ヲ設置セザル稅關ニ於テハ其事務ハ檢査科之ヲ兼掌ス

稅關長 壹名

部下ノ官吏ヲ統率シテ主管ノ事務ヲ總理ス

判任官ノ進退黜陟ハ之ヲ主稅官長ニ具狀シ等外已下ハ之ヲ專行ス

主務ノ事務ニ要スル所ノ法律規則ヲ起草シ主稅官長ニ具申スルヲ得

稅關副長 壹名 橫濱稅關ニ限リ之ヲ置ク

稅關長ノ職務ヲ助ケテ庶務ヲ幹理ス長事故アリテ欠席スル時ハ之ガ代理タルヲ得

料 長 壹員

稅關長ノ指揮ヲ受ケ主務ヲ管理ス

主稅監吏

主稅監吏補

稅關長ノ指揮ヲ受ケテ輸出入品ノ監視ニ從事ス

主稅鑑定役

主稅鑑定役見習

稅關長ノ指揮ヲ受ケテ輸出入貨物ノ鑑定ニ從事ス

檢査科

船長又ハ貨主ノ願書ヲ受ケ之ヲ翻譯シテ其願書ト積荷目錄ヲ對照シ且貨物ノ尺度斤量ヲ調査シテ姦詐ヲ發摘スル等ノ事ヲ掌ル

鑑定科

貨物ノ性質價位ヲ査定シ及有稅無稅ノ區畫ヲ鑑別シ且損傷ノ有無ヲ調査シテ課稅ノ正鵠ヲ得ル等ノ事ヲ掌ル

收稅科

貨物船舶倉庫等ニ係ル諸稅金ヲ收領シ及各種ノ免狀證書類ヲ授與シ又ハ増價買上品ノ代金ヲ賣主ニ附與スル等ノ事ヲ掌ル

倉庫科

倉庫上家ヲ開閉シ及貨物ヲ出納シ又ハ入庫貨物ノ火災損傷ヲ請負其他手數既濟ノ貨物ニ檢印スル等ノ事ヲ掌ル

文書科

第六篇 職制 主稅局主管

第六篇 職制

主稅局主管

第六篇 職制 主稅局主管

六十七

第六篇 職制 主税局主管

内外文章ニ屬スル事項及免狀證書之檢印等ノ事ヲ掌ル
製表科

貿易ニ關スル諸表ヲ編製スル事ヲ掌ル

視監科

海陸ヲ巡回シテ密商脱税ヲ監視禁遏スル等ノ事ヲ掌ル

會計科

經費及財産ニ屬スル事故給仕水夫火夫小使ノ進退等ヲ掌ル

後七月十八日主税局分掌規程を改正し部長税關長等の職權及税關事務章程を改定す今税關に關するものを抽出すれば左の如し

税關

檢査科 鑑定科 收税科 倉庫科

文書科 製表科 監視科 會計科

但シ鑑定科監視科ヲ設置セサル税關ニ於テハ其事務ハ檢査科之ヲ兼掌ス

税關長 每關壹員

主税官ヲ以テ之ニ充ツ

税關中ノ官屬ヲ統卒シテ主管ノ事務ヲ擔任シ主務官長ニ對シテ其責ニ任ス

税關副長 壹員

主税官ヲ以テ之ニ充ツ 但横濱税關ニ限リ之ヲ置ク

税關長ノ職務ヲ補ケ庶務ヲ幹理ス長事故アリテ缺席スルトキハ之ガ代理タル事ヲ得

科長 每科壹員

主税屬「主税監吏主税鑑定役」(後八月十六日改正追加)ヲ以テ之ニ充ツ

税關長ノ指揮ヲ受ケテ主務ヲ幹理ス

主税屬

税關長「及科長」(同上)ノ指揮ヲ受ケテ庶務ニ從事ス

主税監吏

主税監吏補

税關長「及科長」(同上)ノ指揮ヲ受ケテ輸出入品ノ監視ニ從事ス

主税鑑定役

主税鑑定役見習

税關長「及科長」(同上)ノ指揮ヲ受ケテ輸出入貨物ノ鑑定ニ從事ス

税關長職權

一 税關事務章程及ヒ分掌規程ニ照ラシテ主管ノ事務ヲ執行スル事

一 主管ノ事務ニ要スル所ノ法律規則ヲ起草シテ具申スル事

一 判任以下ノ能否勤惰ヲ監視シ之カ進退褒貶ヲ具申スル事「但長代理ノ委囑及科長ノ命免ハ專行シテ後具申スヘシ」(同八月十六日改正追加)

但等外以下ハ之ヲ專行シテ後具申スルモノトス

一 成規定例アル事件ヲ處分スル事

一 成規定例アル事件ニ付税關長ノ名ヲ署シ各廳ニ照會應答スル事

一 判任官以下ノ勤務表ヲ每半年ニ調製シテ差出ス事

税關

第六篇 職制 主税局主管

第六篇 職制 主稅局主管

七十

海關稅務ヲ管理スル所ナリ稅關中分テ八科ト爲ス其分掌事務左ノ如シ

檢査科

船長又ハ貨主ノ願書ヲ受ケ之ヲ翻譯シテ其願書ト積荷目錄ヲ對照シ且貨物ノ尺度斤量ヲ調査シテ姦詐ヲ發摘スル等ノ事ヲ掌ル

鑑定科

貨物ノ性質價值ヲ査定シ及ヒ有稅無稅ノ區畫ヲ鑑別シ且ツ損傷ノ有無ヲ調査シテ課稅ノ正鵠ヲ得ル等ノ事ヲ掌ル

收稅科

貨物船舶倉庫等ニ係ル諸稅金ヲ收領シ及ヒ各種ノ免狀證書類ヲ授與シ又ハ増價買上品ノ代金ヲ賣主ニ附與スル等ノ事ヲ掌ル

倉庫科

倉庫上屋ヲ開閉シ及ヒ貨物ヲ出納シ又ハ入庫貨物ノ火災損傷ヲ請負其他手數既濟ノ貨物ニ檢印スル等ノ事ヲ掌ル

文書科

内外文章ニ屬スル事項及ヒ免狀證書ノ檢印等ノ事ヲ掌ル

製表科

貿易ニ關スル諸表ヲ編製スル事ヲ掌ル

監視科

海陸ヲ巡回シテ密商脫稅ヲ監視禁遏スル等ノ事ヲ掌ル

會計科

經費及財產ニ屬スル事項給仕水夫火夫小使ノ進退等ノ事ヲ掌ル

其他同時に稅關事務章程を發布せるも曩きに七月四日規定せられたるものと同一なるを以て今は省略に従ふ後十九年一月十三日に至り稅關監視課職制章程を廢止し更らに主稅官長より達示する處あり即ち左の如し

一 舊監視課職制章程中掲載セル緊要ナル條項ハ之ヲ心得書中ニ編入シ稅關長限リ制定ノ上届出ツヘシ

一 監吏補ニ給スル月俸旅費ノ給與法ハ總テ一般ノ規則ニ據ル可シ

一 監吏補召募規則ハ主稅局官吏採用規程ニ準シ制定ノ上届出ツヘシ

十五、庶政一括三 主稅局主管の時代に於ける當稅關の庶政を一括すれば左の如し

一、事務分掌規程の變更 明治十七年五月二十日主稅局の新設と共に稅關事務は總て同局の主管に屬し同七月四日稅關事務章程分及掌規程を改正頒布し後同月十八日主稅局分掌規程の更定と共に稅關規程の上に多少の變更を見後十九年一月十三日に至り稅關監視課職制章程を廢止す

二、給仕以下の給與方法 十八年二月十三日給仕以下に對する給與の方法を示し之を達す

乙第廿九號

大 阪 稅 關

其關給仕小使下使并水火夫ニ限リ滿一ケ年十一月ヨリ皆勤セシ者一ケ年間三日以内病氣引不參或ハ一以後轉免等ハ皆勤ハ爲手當去十七年分ヨリ其月給者ハ月俸三分一日給者ハ十日分ヲ超エナル額ヲ支給ス且給與取計方共委任候條處分ノ上其人名給額ヲ具シ可届出此旨相達候事 但手當金ハ其關經費ヲ以テ支辨スル義ト心得ヘシ

第六篇 職制 主稅局主管

七十一

第六篇 職制 主稅局主管

七十二

明治十八年二月十三日

主稅官長 郷 純 造

三、附屬官舎の購入 此月中之嶋玉江町二丁目十番地の家屋を當關附屬官舎として購入し營繕を加へり是れ現在官舎の所在地なりとす

舎第十四號

當關附屬官舎トシテ御買上相成候建物修繕之儀上請

大 阪 税 關

今般當關附屬官舎トシテ御買上相成候建物ハ元貸家之義ニ付疊建具不崩過半不足且住ミ荒シ有之候得ハ惣体修繕ヲ要シ殊ニ雪隠井戸周圍之板塀等新築不致テハ貸渡シ難相成ニ付右修繕及雪隠井戸等新築之見込ヲ以テ御費用爲積候處別紙仕様積書ノ如ク金三百九拾三圓貳拾三錢ニテ皆出來相成候間右金額ヲ目途トシ別途御出方ヲ以修繕之儀御許可相成候様致度依テ仕様積書并ニ圖面相添此段及上請候也

明治十八年二月 日

大 阪 税 關 長

三等主稅官 穎川君平

主稅官長 郷 純 造 殿

關第三十一號

上申之趣開届候條金三百九拾三圓貳拾三錢ヲ超過セサル様起工シ落成之上精算帳相添工費

請求可致事

明治十八年三月六日

主稅官長 郷 純 造

四、官舎貸下料を一定す 五月七日曩に購入せる官舎修繕落成を告ぐると共に官舎貸下料の率を定め之を上司に具申裁可を仰けり

舎第四拾八號

大阪稅關官舎宿代上納額之義ニ付伺

大 阪 税 關

當關付屬官舎修繕方落成候ニ付建物御買入代并ニ礎以上之修繕費精細取調候處別紙仕譯書之通相成候間宿代ノ義ハ右費額八分之割ヲ以テ上納候様御許可相成候様致度依テ仕譯書相添ニ此段相伺候也

十八年五月七日

大 阪 税 關 長

三等主稅官 穎川君平

主稅官長 郷 純 造 殿

尙々御許可之上ハ來ル六月ヨリ宿代上納候様仕度此段及追申置候也

(別 紙)

大阪稅關附屬官舎八住居宿代上納方仕譯書

一元金千四百五拾四圓六拾貳錢五厘

一金百八拾六圓九拾三錢

合計金千六百四拾壹圓五拾五錢五厘

此八分金百參拾壹圓參拾貳錢四厘

此十二ヶ月割壹ヶ月分

金拾圓九拾四錢六厘

内

金七圓六拾六錢貳厘

七分方上納ノ分

第六篇 職制 主稅局主管

七十三

官舎八住居此建坪 七合五夕
御買上代壹坪ニ付拾三圓五拾錢
右官舎礎以上修繕費及雪隠三坪
五合新築費共
全ク宿代ヲ課スベキ金高
壹ヶ年宿代

第六篇 職制 大藏省直轄(一)

七十四

金參圓貳拾八錢四厘

三分方修繕費積立ノ分

此小譯

金貳圓參拾參錢六厘

壹番官舎建坪二十三坪七合五夕 宿代壹月分

内 金壹圓六拾參錢五厘

七分方上納ノ分

内 金七拾錢壹厘

金壹圓貳拾參錢

三分方修繕費積立ノ分

内 金八拾六錢壹厘

貳番官舎建坪拾貳坪五合宿代壹ヶ月分

内 金參拾六錢九厘

七分方上納ノ分

以下三番ヨリ七番迄總テ貳番官舎ニ同シ
是に對して主稅局ヨリ左の如く指令セリ

三分方修繕費積立ノ分

伺之趣宿代之儀ハ本年四月ヨリ起算シ來ル二十一年三月マテ滿三ヶ年間申出ノ割合ヲ以テ

貸與ノ月ヨリ徵收候儀ト可心得事
明治十八年六月十二日 主稅官長 郷 純 造

第四章 大藏省直轄(一)

十六、稅關官制の制定 明治十九年三月二十五日敕令第七號を以て新たに稅關官制を制定し爾來稅關は大藏大臣の直轄に屬せしむ

稅關官制

第一條 各稅關ハ大藏大臣ノ管轄ニ屬シ職員ヲ置クコト左ノ如シ

稅關長

稅關副長

屬

監 吏

鑑定吏

第二條 稅關長ハ奏任トス大藏大臣ノ指揮監督ヲ承ケ海關稅及諸收入ノ事ヲ掌理ス

稅關長ハ其主務ニ就キ關稅局長ト協辦スルコトアルヘシ

第三條 稅關副長ハ奏任トス横濱神戸ノ兩稅關ニ限リ之ヲ置ク

稅關副長ハ稅關長ノ事務ヲ佐ク稅關長事故アルトキハ其事務ヲ代理ス

第四條 屬ハ判任トス各上官ノ指揮ヲ承ケ書記計算簿記ノ事ニ從フ

第五條 監吏ハ判任トス各上官ノ指揮ヲ承ケ密商脫稅監視ノ事ニ從フ

監吏ハ便宜雇員ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第六條 鑑定吏ハ判任トス各上官ノ指揮ヲ承ケ貨物鑑定ノ事ニ從フ

鑑定吏ハ便宜雇員ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第七條 各稅關ニ検査課鑑定課收稅課倉庫課監視課文書課製表課及會計課ヲ置キ其事務ヲ分掌セシム

第八條 検査課ハ輸出入貨物ノ検査ニ關スル一切ノ事ヲ掌ル

第九條 鑑定課ハ輸出入貨物ノ性質價值其他鑑定ニ關スル一切ノ事ヲ掌ル

第十條 收稅課ハ輸出入貨物ノ稅金及船舶倉庫等ノ諸收入金收納ニ關スル一切ノ事ヲ掌ル

第六篇 職制 大藏省直轄(一)

七十五

第十一條 倉庫課ハ倉庫上屋ヲ管守シ其開閉及貨物ノ出納ニ關スル一切ノ事ヲ掌ル

第十二條 監視課ハ密商脱稅監視ノ事ヲ掌ル

第十三條 文書課ハ内外諸文書及職員ノ取扱免狀證書等捺印ノ事ヲ掌ル

第十四條 製表課ハ貿易ニ關スル諸表編製ノ事ヲ掌ル

第十五條 會計課ハ關稅諸收入及經費ノ豫算決算並經費ノ出納買上品官沒品ノ取扱財産ノ管守其

他傭人ノ身分ニ關スルコトヲ掌ル

新官制の發布と共に監吏以下判任官等の俸給は之を從來の如くならしむ即ち

大 阪 稅 關

今般各稅關官制公布相成候ニ就テハ監吏以下判任官其他俸給ノ義ハ當分ノ間從前ノ通渡方取計フ

ヘシ

明治十九年三月廿六日

大藏大臣 伯爵 松 方 正義

後二十年十二月敕令第六十九號を以て左の如く改正追加せしむ

朕稅關官制中改正追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治二十年十二月二十五日

内閣總理大臣 伯爵 伊 藤 博文
大藏大臣 伯爵 松 方 正義

敕令第六十九號

明治十九年三月敕令第七號稅關官制中左之通改正追加ス

第一條中稅關副長ノ次ニ「鑑定官」ノ三字ヲ加フ

第三條中左ノ一項ヲ追加ス

鑑定官ハ奏任二等以下トス稅關長ノ指揮監督ヲ承ケ貨物鑑定ノ事ヲ掌ル

又同時に鑑定官以下官等俸給を定めしむ

朕茲ニ稅關鑑定官鑑定吏官等俸給ノ件ヲ裁可ス

御名御璽

明治二十年十二月二十五日

内閣總理大臣 伯爵 伊 藤 博文
大藏大臣 伯爵 松 方 正義

敕令第七十號 (官報十二月二十七日)

稅關鑑定官鑑定吏ノ官等俸給ハ明治十九年敕令第三十八號技術官官等俸給令ニ依ル

十七、特別輸出港規則の發布と出張所の設置 二十二年七月三十一日法律第二十號を以て特別輸

出港規則を發せらる

特別輸出港規則

第一條 帝國臣民米、麥、麥粉、石炭、硫黃ノ五品ヲ海外ニ輸出スル爲メ左ノ諸港ヲ特別輸出港トス

一 伊勢國四日市 一 長門國下ノ關 一 筑前國博多

一 豐前國門司 一 肥前國口ノ津 一 肥前國唐津

一 肥後國三角 一 越中國伏木 一 後志國小樽

第二條 前條輸出事業ニ使用スル爲メ外國船ヲ雇入レントスルトキハ大藏大臣へ出願シ外國船雇

入免狀ヲ受クヘシ

第三條 特別輸出港ニ於テ船舶ノ出入及輸出品ノ船積ニ關スル事項ハ總テ外國貿易ノ手續ニ依ル

ヘシ

第四條 第一條ノ輸出事業ニ使用スル船舶ハ其使用中沿海貿易ヲ爲スコトヲ得ス犯ス者ハ五百圓

以上千圓以下ノ罰金ニ處シ雇入外國船ニ在テハ尙ホ第二條ノ免狀ヲ取上クヘシ

第五條 本規則ヲ廢止シ又ハ改正スルトキハ六箇月前ニ公布スヘシ

第六條 本規則施行ニ關スル細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

第七條 特別輸出諸港ニ於テ本規則施行ノ期日ハ敕令ヲ以テ之ヲ定ム

越へて八月一日大藏省令第十號を以て特別輸出港規則施行細則を定む即ち

本年七月法律第二十號特別輸出港規則施行細則左ノ通相定ム

明治廿二年八月一日

大藏大臣 伯爵 松方正義

特別輸出港規則施行細則

第一條 特別輸出港規則第二條ノ外國船雇入願書ニハ左ノ事項ヲ詳記スヘシ

一 國名 一 船形 一 船名

一 噸數 一 輸出品名 一 輸出地名

一 仕向先^{外國地名} 一 船長ノ姓名 一 雇入期限

第二條 外國船雇入免狀ノ期限ハ六ヶ月以内トス

第三條 外國船雇入免狀ノ期限經過シタル後之ヲ繼續セント欲スル者ハ特別輸出港規則第二條ニ

據リ更ニ免狀ヲ受クヘシ

第四條 船舶ノ出入及輸出品ノ船積ニ關スル事項ハ總テ特別輸出港所在ノ稅關出張所ニ於テ之ヲ

管理ス

後十月三十日本規則施行の時日を發布し又該港在勤官吏の事務章程を頒布す

敕令第百十四號 (官報十月三十日)

本年七月法律第二十號特別輸出港規則第七條ニ據リ左ノ諸港ニ於テハ本年十一月十五日ヨリ該

規則ヲ施行ス

一 伊勢國四日市

一 肥前國門司

一 肥後國唐津

一 肥後國三角

一 赴中國伏木

今般敕令第百十四號ヲ以テ四日市港ニ於テ本年十一月十五日ヨリ特別輸出港規則施行ノ義發布ニ付テハ右規則輸出港在勤稅關官吏事務章程ニ據リ事務ヲ取扱ハシムヘシ

明治廿二年十一月一日

大藏大臣 伯爵 松方正義

特別輸出港在勤稅關官吏事務

第一條 在勤官吏ハ特別輸出港規則及ヒ各國ト貿易章程其他諸例規ニ照シ其事務ヲ取扱フヘシ

第二條 諸收入金徵收納付等ノ手續ハ一般ノ例規ニ據リ取扱フヘシ

第三條 船長若クハ其代理人ヨリ休日或ハ平日閉廳後臨時開廳ヲ願出若クハ相當ノ手数料ヲ經タル

貨物ノ船積ヲ願出事實已ムヲ得サルモノト認ムルトキ左記ノ手数料ヲ徵集シ之ヲ許スヘシ

臨時開廳手数料

日出ヨリ日没マテ 每一時間 金 壹圓

日没ヨリ日出マテ 同 金壹圓五拾錢

休日ニ於テ船積手数料 每一時間 金 五拾錢

日出ヨリ日没マテ 同 金七拾五錢

日没ヨリ日出マテ 同 同

第六篇 職制 大藏省直轄(一)

八十

平日ニ於テ日没ヨリ日出マテ船積手数料

每一時間

金七拾五錢

第四條 特別輸出港規則ニ據リ輸出事業ニ使用スル船舶ハ同規則第一條ノ輸出品ヲ船積スルノ外

他ノ貨物ヲ船積シ若シクハ陸揚スルコトヲ許サハルヘシ

第五條 港内ニ碇泊スル内國船輸出港規則ニ依リ輸出事業ニ使用センコトヲ出願スルトキハ船内

ヲ検査シ貨物積載ナキモノハ許スヘシ

第六條 特別輸出港規則第四條ニ違背スル者アルトキハ治罪法第九十六條ニ據リ告發シ其旨ヲ所

管税關長ニ具狀スヘシ

第七條 貿易章程ニ違背スル者アルトキハ處分ノ上其旨ヲ所管税關長ヘ具狀スヘシ

第八條 特別輸出港規則及ヒ貿易章程其他諸例規中執行上疑義ニ涉リ決シ難キ事件并ニ金錢出納

ニ關スル事項等ハ總テ之ヲ所管税關長ヘ具申シ其指令ニ從フヘシ

是より先特別輸出港規則の發布せらるゝや四日市港を以て大阪税關の所管に屬せしめ大藏大臣より

出張所設置の事を指令して曰

大阪 税 關

特別輸出港中四日市港ハ其關ノ所管トシテ該港ニ税關出張所設置ノ儀ニ付不日關稅局員派出爲

致候條諸事派出員ト協議ノ上處辨スヘシ

但出張所設置ノ上ハ四日市大阪税關出張所ト稱スヘシ

明治廿二年九月十七日

大藏大臣

伯爵 松 方 正義

茲に於て翌十月十八日を以て左の任命を爲し始めて四日市大阪税關出張所の開設の準備を了し後十

一月十五日敕令第百十四號により該出張所事務を開始せり

栗原和三郎

四日市港在勤ヲ命ス

同 人

四日市港出張所長ヲ命ス

明治二十二年十月十八日

大阪 税 關

角 儀 三 郎

四日市港出張所所在勤ヲ命ス

大 阪 税 關

明治二十二年十月十八日

十八、四日市税關支署沿革 明治二十二年七月特別輸出港規則の發布と共に伊勢國四日市港を大

阪税關所管の特別輸出港に指定し本關より所長壹名(屬)所員二名(雇監吏)を任命派出せしめ十一月

十日始めて同港高砂町三千四百九十三番屋敷を下し出張所を設置す之を四日市大阪税關出張所と稱

せしむ同十五日事務を開始す後二十四年三月九日所長を交迭し同時に署員一名を減す是より先同港

の市民熱心に特別輸出港の實を擧げんと欲し盛んに米穀の輸出を計畫せるも常に資力と經驗に乏し

きが爲め空しく之を横濱神戸の外人の手に委するの己むなきを以て此間の輸出皆無に屬し但た僅か

に二十三年三月十一日大藏省より同港米塵の監督を命せられたる外絶へて出張所に於て見るべき事

務なきを以て遂に二十六年八月一日全所員を召還し該出張所を三重縣直稅分署に移轉し稅務屬をし

て仮りに事務を兼攝せしむ後二十七年九月十九日大藏省より雇外國船内地諸港間内國貨物回漕の特

許を達せられ該船舶の出入取締に任せるも遂に二十九年三月九日を以て該達を廢止す

後三十年六月十七日勅令第二二六號に據り四日市港は博多外五港開港外貿易港に追加指定せられた

第六篇 職制 大藏省直轄(一)

るを以て新たに署長税關屬壹名署員監吏補壹名を任命して曩きに一旦三重縣直税分署内に移されたる出張所を復舊せしめ同港高砂町四十八番屋敷を下し八月一日事務を開始す即ち四日市大阪税關支署と呼はしむ三十二年四月二十五日更らに四日市税關支署と改稱し同年七月十二日勅令第三四二號を以て開港を治定し同八月四日以降開港地として諸般の事務を取扱へり今試みに出張所設置以來輸入貨物及入出港船舶の數を掲げて特別輸出港治定以降三十三年に至るの狀態を知るの一端に供せん

入出港船舶 (月別)

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
三十一年													
三十二年					一								一
三十三年			三		一	三	五		二				一三
計					四	八	五	二					一六

備考 三十年以前入出港船舶ナシ

當港ニテハ資格變更出港船舶ナシ故ニ入港數ハ即チ出港數ト同一ナリ

船舶ノ數 (月別)

三十年六月ヨリ三十二年八月迄

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
三十一年													
三十二年													
計													五

三十二年						五							六
------	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	---

備考 (一)三十年ハ出入船舶ナシ

(二)當港ニテハ資格變更出港船舶ナシ故ニ入港數ハ即チ出港數ト同一ナリ

貨物數量及種別 (月別)

三十一年中輸入但輸出ナシ

種別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
大豆					一三、〇〇六								一三、〇〇六
大豆粕					二、〇〇〇								二、〇〇〇
小豆													
小豆類													
コブ													
貝類													
干海參													
計					一五、〇〇六								一五、〇〇六

三十二年自一月至八月輸入但輸出ナシ

備考 四月入船ノ分ハ五月ニ手數ヲ爲シタルガ故ニ船舶表ト齟齬スル所ナリ

船舶ノ數

第六篇 職制 大藏省直轄(一)

種別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	計
無味香蠟	一五、二八						一五、二八		一五、二八
石油	六〇、八三〇			三〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇			七〇、〇〇〇	二〇〇、八三〇
諸油及蠟	八三、五七						六六、三三		一五〇、九〇
大豆				三、三三	三、三三	三、三三	三、三三		一三、三三
豆類							一八、八五		一八、八五
生卵					四、五〇〇		八三、三〇		八七、八〇
土管				三、三三〇					三、三三〇
輸出									
計									

十九、庶政一括四 十九年三月一日官制改革の結果大藏省中主税局を分つて更らに關稅局を設け同廿五日新たに稅關官制を制定し爾來稅關は大藏大臣の直轄となりし以降二十三年七月稅關官制の改正に至る五年間に於ける庶政を一括して示せば

一、執務規律 十九年四月廿二日執務中に於ける紀律を定めて曰

第八號

以來關中ノ吏員一同左ノ三條ヲ堅ク相守リ可申此段相違候事

第一條

執務時間ニ新聞紙ノ閱讀ヲ禁シ候事

各課掛

第二條

執務ノ几上ニ於テ喫烟ヲ許サス之ヲ要スル者ハ食堂ニ至ルヘク尤モ吸烟具等ヲ執務ノ几上ニ散亂セシメサル様銘々注意可致候事

第三條

執務ノ室内ニ於テ湯茶ヲ飲ムコトヲ許サス之ヲ要スル者ハ必ス食堂ニ至リ飲用可致事以上

明治十九年四月廿二日

大阪稅關長心得

穎川君平印

二、雇員の退職及死亡賜金 此年九月十四日雇員の退職及死亡賜金に關する成規を定む今大藏

省に於ける原議及指令を示せば左の如し

明治十九年九月十四日

大臣

秘書官

次官

從來雇員退職死亡之際共別ニ賜金ノ成規ハ無之等外吏ニ至リテハ滿五年勤績之者エハ賜金相成候處右ハ雇吏ハ一時ノ使用ニ止ル者ニ付斯ク等外吏ト待遇ヲ異ニスル儀ニ可有之然ルニ官制改定以來等外吏ハ被廢總テ雇ニ被改候ニ付即チ從前等外吏ノ勤務ニ服スル儀ニ有之就テハ自今死亡者ニシテ多年就職精勤之者エハ俸給ニケ月分以内ノ金額給與相成候ハ本人勤務ノ廉モ相顯レ且衆員獎勵之一端ニモ相成候儀ニ付右様相定度此段相伺候也

稅關雇監吏モ包含ス滿五年則十九年九月十四日ヨリ同廿四年九月十四日迄トス

三、被服料下賜 二十年十二月九日稅關鑑定課備に對し爾後被服料を下賜す

第六篇 職制 大藏省直轄(一)

第六篇 職制 大藏省直轄(一)

税關備鑑定課附屬之者へ是迄ハ被服ノ下渡無之候處別紙之通伺出許可相成候間當冬以後年々夏冬兩季ニ被服可下渡都合ニ付則伺書寫及御送付候尤モ現品渡リ之調ヘテ以テ給仕服代同様ノ金額ヲ被渡下等ニ有之候右様御了承有之度此段及御牒候也

明治二十年十二月九日

神戸税關會計係

大阪税關會計係御中

四、文具料支給規則を定む 二十二年四月二十二日文具料支給規則を定めて之を公布せしむ

大藏省指令第一七〇〇號

神戸 税關

明治廿二年四月十五日會四〇號伺神戸大阪兩税關文具支給規程伺ノ通聞届

明治廿二年四月廿二日

大藏大臣 伯爵 松方正義

(別紙)

大阪税關文具料支給規程

第一條 文具料ハ左ノ區別ニ依リ事務ニ應ジテ之ヲ支給ス

一 等 年 額 金 貳 圓

二 等 年 額 金 壹 圓 五 拾 錢

第二條 判任官以下ヲ區別シ検査改品掛鑑定課收税課倉庫課上屋掛監視課雇監吏文書課捺印掛製表課會計課ノ吏員ハ一等文具料ヲ給シ高等官及改品掛上屋掛捺印掛員ハ二等文具料ヲ支給ス

第三條 文具料ハ年額ヲ二分シ九月十日三月十日(休暇ニ跨ルトキハ繰上ケトス)ニ於テ支給ス

給ス

第四條 新任轉任非職廢官退官死亡ノ者ハ月割額ヲ以テ支給ス其他掛換等ニ因リ文具料支給ノ等級ニ異動ヲ生シタルトキハ其翌月ヨリ支給額ヲ更正ス

第五條 前條轉免等又ハ掛換ニ依リ文具料支給額ニ異動ヲ生スル場合ニ於テハ主任課(文書課)ヨリ之ヲ會計課ニ通知スヘシ

第六條 病氣又ハ願濟休暇旅行ノ者及私事ノ故障ニ由リ上應セサルモノハ俸給減額ニナリシ翌月ヨリ文具料ノ支給ヲ停ム但シ上應シタルトキハ其月ヨリ支給ス

第七條 給仕ノ内簿記寫字ノ手傳ヲ命シタルトキハ一等文具料ヲ支給ス

第八條 應接所又ハ臨時會議等ニ文具ヲ要スルトキハ各自ノ用品ヲ以テ辨スヘシ

第九條 雇監吏及雇監吏派出所水夫小使詰所ニハ相當ノ品目員數ヲ定メ現品ヲ以テ支給ス

五、税關長職權中の追加 二十三年三月廿二日税關長職權中に左の項を加ふ即ち左の如し

第一〇六三號

各 税 關

物件ノ賣却及貸與ニ係ル諸契約ハ税關長ニ於テ締結スルコトヲ得

右 相 達 ス

明治二十三年三月廿六日

大藏大臣 伯爵 松方正義

第五章 經 費

二十、經費の豫定計畫 五年七月大阪運上所の租税寮所轄に歸するや長官中山租税權頭より大阪運上所經費の豫定計畫を爲し之が支出を租税寮へ申請せり當時(五年以降十一年に至る)經費の豫算は定額常費、額外常費の二大科目より成り而して經費は毎月々額を配賦し又臨時所要の金額は明細

第六篇 職制 經 費

書を調製し主務省の認許指命を得て初めて之を支出せしむ今大阪運上所經費の豫定計畫に據れば大阪港運上所請取濟ニ相成候ニ付定額金取調可相伺之處取締向ヲ始事務變革之道未充分之際着手不致候ニ付權ト定額取極難ク殊ニ阪地ハ取締向場廣ニテ存外之入費ニ在之候付先別紙之通月々金千三百圓假定期額トシテ御渡相成候様致度候尤事務校正之上ハ猶増減モ可有之候得共大略三ヶ月モ相立候ハ、定則取調猶可相伺候ニ付此旨至急御回議有之度御回議濟之上ハ請取方神速御取計御回シ方御取計有之度此段申進候也

壬申七月五日

厚 東 樹 臣
中山 租 稅 權 頭

陸 奧 租 稅 頭 殿

古 谷 簡 一 殿

尙以差迫リ居候事故阪府出納寮ニ差向繰替之義駈合候處本寮ヨリ御通シ之趣モ有之候ニ付惣而繰替渡方不相成旨返答有之候ニ付本文之義最至急御取計有之度候萬一差支候節ハ爲替方ヨリ借入可申積ニ有之候間此段御承知置有之度候也

大阪港運上所官員月給諸雜費假定期額概略取調

一金八百貳拾壹圓

運上所諸七等出仕以下巡警卒監船吏等外之者迄目利人トモ凡五拾人之積リ

一同七拾五圓

筆墨紙炭油釘麻糸等惣而定式小買モノ飛脚賃

一同七拾壹圓九拾錢

定抱小使入足水主賃

一同百 圓

臨時ノ買モノ雇船同雇人足賃其外御用船ヲ始諸道具取繕料等

一同貳百圓

官員免職或ハ諸方出張等之旅費

一同五拾圓

定式小繕等

〆金千參百拾七圓九拾錢

右之 處 エ

金千參百圓也

右當分假定期額トシテ被御渡候

二十一、阪神兩關經費の合併 大阪稅關一ヶ月の經費は爾後千三百圓と豫定せられ毎月々額の配賦を受け來れるも後明治六年三月十五日大阪稅關の地位をして神戸稅關出張所と見做さしむると共に兩關の經費を合併し出納記簿等の一切之を神戸稅關に於て處辨せしめたるを以て兩關經費の區分は今俄かに之を調査するを得ざるも當時神戸稅關經費の月額は二千五百圓なりしを以て兩關經費は之を通して月額三千八百圓年額四萬五千六百圓に値れり然れども此間貿易の消長に伴れて吏員の増減設備の多少等自然豫定計畫の變更を來せるも八年度以降十八年度に至る間常に四萬圓を降らざりし後十三年度に於て一たひ兩關經費を分離獨立せしめたるも會計事務の上に不便尠ならずとなし遂に再び兩關經費合併の稟議を爲して之を許さる

利第三百三十號

十四年度ヨリ大阪稅關經費ヲ神戸稅關ニ合併致度儀ニ付伺

第六篇 關稅 經費

神戸税關

大阪税關經費ノ儀ハ從來神戸税關ト一途ニシテ分畫無之處去ル十二年申上請ノ末本年度ヨリ始メテ神阪兩途ニ相分チ實際仕拂相立居候然ルニ先般定額減省相成加フルニ十四年度ニ於テモ右減額ノ御達有之旁劇ニ費途ノ變動ヲ生シ從前ノ通兩關ヲ相通シテ費途ヲ一ニスルニ非ラサレハ經濟上ノ不都合不尠加フルニ其實出納事務ハ總テ當關ニ於テ取扱居候義ニ付到底細カニ之ヲ分割候譯ニ難立至旁以十四年度ヨリハ猶舊ニ復シ兩關ノ經費合併候様致度此段至急相伺候也

神戸大阪税關長 高橋新吉

指 令

伺 之 通

明治十四年三月三十日

關稅局長蜂須賀茂昭代理

大藏少書記官 有 嶋 武

爰に再び神阪兩關の經費は合併せられし今去三十三年二月大藏省より神阪兩關經費の照會に對する神戸税關の回答に據れば八年度以降十八年度に至る十一ヶ年間神阪兩關の經費額を知るに足る即ち客月廿一日付ヲ以テ明治八年ヨリ同十八年度ニ至ル十一ヶ年間神阪兩關經費額取調方御照會ノ趣了承別紙之通ニ有之候條此段及御回答候也

三十三年三月十三日

神戸税關長 櫻井鐵太郎

品川大藏書記官殿

追而當時大阪税關ハ當關ト豫算合併ニ付仕拂及帳簿等一切區別セサルニヨリ區分取調難ニ付御了知相成度候

(別紙)

神戸大阪兩税關經費調

八年度	金五万二千貳百七拾六圓拾七錢五厘
九年度	金四萬六千九百拾五圓參拾九錢七厘
十年度	金四萬四拾九圓貳厘
十一年度	金四萬貳百參圓七錢七厘
十二年度	金四萬九千七拾圓參拾九錢
十三年度	金參萬九千百拾七圓拾壹錢
十四年度	金四萬九千五百貳圓七拾六錢九厘
十五年度	金四萬七千百圓拾貳錢八厘
十六年度	金四萬四千參百九拾參圓六拾壹錢壹厘
十七年度	金四萬四千六百拾七圓
十八年度	金參萬八千壹圓參拾參錢五厘

備考 十八年度ハ會計年度改正ニヨリ十八年七月ヨリ十九年三月迄九ヶ月分又各年度歲出經常臨時ノ區別判然セス

二十二、經費配賦の手續 當時阪神兩税關が受領すへき假定額金月額は其月の初を以て大藏省より大阪出張出納寮へ宛て證券を送付し出納寮は之を租稅寮出張所に致し更らに之を各税關に配賦するなり今其一例を示せば左の如し

第十五號

左ノ廉々證券本日受取候間御廻申候御落掌有之度候也

壬申八月十日

古 谷 簡 一

第六篇 職制 經費

九十四

松方租稅權頭
陸奥租稅頭

厚東樹臣殿

一金貳千五百圓

八月分兵庫港假定額金

一金千參百圓

同 大阪港 同 斷

一金四十壹弗五十セント

神戸港稅關コピソソ御買上代

一金五拾圓四拾貳錢九厘貳毛

同輸出入物品稅百分の一監定課
ノモノハ被下候分 但五月六月分

後其月受領すへき假定額金は前月二十日後を以て送付することに改め同時に支出計算書は之を翌月二十日迄に徴することとせり後六年一月經費配賦の手續を變更し當地國立銀行より直接受領することとせり

大阪神戸兩港釐用請取方ノ儀是迄大阪出張納寮宛切符ヲ以當地ニ於テ請取來候處爾後其地國立銀行直宛ノ切符ヲ以相渡候間長官實印ヲ以可請取等ノ旨井上大藏大輔殿ヨリ被相達候ニ付テハ前以銀行へ長官ノ印影爲照會可被相渡置候此段御達申入候也

明治六年一月七日

陸奥租稅頭

瓜生殿

二十三、公金取扱の手續 未だ大阪運上所と稱する時代在つては運上所内に大藏省出納局員を出張せしめ公金出納を扱取はしめ俗に之を掛屋と稱す後明治六年十一月に至り大阪稅關の公金取扱は之を第一國立銀行大阪支店三井小野組に命じ兩者の間に關する契約を訂さしむ

第百二十五號

其稅關出納ノ事務ヲ其地枝店第一國立銀行ニ相命シ度就テハ別紙規則ノ通定約イタシ度候間右書

類銀行へ御渡有之度若銀行ニテ異存ノ廉有之候得ハ無覆職申出候様篤ト御説諭置有之度何レ近日
登阪ノ上支配人共へ面談取極可申候此段申進候也

十一月十八日

長岡義之花押

大阪稅關御中

(別紙寫)

大阪稅關金銀出納之事務ヲ大阪枝店三井小野組ニ命シ其取扱ヲナサシムルニ付右將來之手續出納規則トモ稅關長官ト同組主任ノ者ト協議決定スル條件如左

第一條

一 大阪稅關ニ各國商人共ヨリ請取ヘキ金銀或ハ租稅寮ニ納ムヘキ金銀ノ取扱ヲ大阪枝店三井小野組ニ命スルニ付同組ニ於テハ昨年第二百三十七號公布府縣設爲替手續并切符規則中府縣設爲替手續第三條ニ照準シ預リ金高三分ノ一ヲ目的トシ預リ金ノ質物トシテ公債證書或ハ確實ナル預ケ金貸出金ノ證文又ハ家作地面地券之類至正ノ實價ヲ計算シ其確實ヲ保證スル爲メ兼テ之ヲ稅關ニ差入置ヘシ右質物ハ預リ金高ノ多少ニ據リ時々増減交換スルコトアルヘキ事

第二條

一 大阪稅關ニ於テ取立ヘキ一ヶ月ノ收稅大凡五千圓之ヲ一度ニ租稅寮へ送納スル故ニ現三井組ニ於テ預ル收稅金高ニ應シ之ノ三分ノ一ヲ用途トシ爲替手續第四條ニ照準シ第一條ノ通質物差入置可申事

第三條

一 大阪稅關ニ於テハ同組枝店ノ三井小野組ヲシテ多數金銀ノ取扱ヒ危險ノ請合ヲナサシメ且上納金銀ハ改貨包貨等ニ對シテ其千分ノ一ヲ府縣設爲替手續第四條ニ照準シ月末毎ニ拂渡スヘシ又

第六篇 職制 經費

九十五

商人共ヨリ預リ税銀ノ分ハ其戻シ金高百分ノ一ヲ府縣爲替手續第四條ニ照準シ手数料トシテ月未毎ニ拂渡スヘシ右ニ付名代并手代人ニ別段手當ハ勿論其他心付等ヲ與フコトナカルヘシ尤東京橫濱神戸長崎等ニ爲替差立候時ハ右賃金トシテ府縣設爲替手續第四條五條ニ照準シ爲替一口之金高百圓未満ナレハ手数料ナク三井小野組ニテ交換スヘシト雖モ百圓以上ナレハ百圓ニ付大阪ヨリ東京ニ貳拾錢橫濱ニ貳拾錢神戸ニ五錢長崎ニ五拾錢ヲ以月未毎ニ拂渡スヘキ事但爲替賃本文之如ク取極メルト雖モ其時機ニ寄増減有之節ハ其時々税關ニ申立ヘシ若シ又現金ニテ運輸ノ節ハ相當ノ運賃ヲ拂スヘキ事

第四條

一 大阪税關ニテ同所枝店三井小野組爲替方ヲ申付ル上ハ同組ニ於テハ府縣設爲替手續第八條ニ照準シ出納事務主任之名代并ニ手代人ヲ命シ委任狀寫シ并名前印鑑共照會ノ爲メ前以税關ニ届出置日々手代人税關ニ出勤セシメ事務差支サル様注意スヘシ尤右名代并手代人不都合ノ事ヲナス時ハ總テ同組ノ引受タルヘキ事

第五條

一 大阪税關ニ出勤之三井小野組手代人ハ納人ヨリ税金ヲ請取其金額ノ過不足并金質之眞贋ヲ調査シテ領收シ毎日預リ證簿ニ記載證印ノ上出納掛エ差出スヘキ事

第六條

一 大阪税關ニ出勤之三井小野組手代人諸税領收セシ上ハ不足或ハ賈金等アルカ其他窃盜水火ノ難等ノ損失アルモ府縣設爲替手續第四條ニ基キ同組ニ於テ辨償スルハ勿論タルヘシ故ニ税關ニ於テ一切不致關係候事

第七條

一 三井小野組ハ長次官ノ命アルニ非レハ一切金銀ヲ出納スヘカラス故ニ出納ノ都度必ラス長次官ノ檢印ヲ請ケ置可申若誤テ檢印ヲ不請他日損失出湧候共同組ノ損亡ニシテ税關ニ關係セサル事

第八條

一 税關官員時々銀行ニ出張シ在金高及ヒ簿冊之記載方等ヲ検査スヘキ事

第九條

一 三井小野組ニテ萬一預リ金ヲ引負スルコトアレハ兼而差入置タル質物ハ勿論速ニ償却ノ手續ヲナシ其引負ニ於テ生スル損分ハ便宜ノ處置ヲナシ之ヲ取立且其引負之次第取糺ノ上國法ニ隨ヒ至當之罰ニ處スヘキ事
右ノ條々ヲ約定スルニ付此書面ニ通テ作リ保證ノ爲各其姓名ヲ自記シ且之ニ調印シ本紙一通ハ税關ニ納メ他ノ一通ハ三井小野組ニ交付スル者也
越へて七年三月該銀行支店三井小野組より右契約第二條の修正を請ひ税關之を容れて爾來公金出納の取扱に任せしむ當時提出せる修正案は左の如し

以書面奉願上候

一 先般御案書ヲ以蒙御沙汰候御預リ金條約書廉々逐一奉拜承候然ル處第二條中御預リ金抵當之廉一ヶ月收税大凡高五千圓之御目途ト被爲立將其後御都合モ被爲在候哉現額實地之抵當其都度納方可仕旨御示命モ有之事實至當ニ奉存候得共何分月々其金額ニ應抵當増減仕候而者却テ混事煩敷愚案仕候ニ付何卒當分之内平均一ヶ月金三千圓極度ト仕リ右金高之三分一抵當品納方仕度奉存候間此段御聞濟被爲成下儀様以書面奉願上候也

明治七年第三月

三井組名代 加藤喜代七
小野組名代 舟津小兵衛

第六篇 職制 經費

大阪 稅關 御中

而して右契約に基き提出せる委任狀及保證金供託の次第は左に一括して之を示すへし

(其一)

御届奉申上候

御關エ日々出頭御用金出納取扱別紙之通手代寺村與助ニ委任仕候條此段御届奉申上候也

明治七年第五月

大阪

三井組
小野組

名代人

西村 虎四郎
加藤 喜代七
武岡 久七
船津 小兵衛

稅關 御役所

(其二)

委任狀

寺村 與助

稅關御役所日々出頭御用金銀出納取扱之件限代理爲致候仍テ委任狀如件

大阪高麗橋三丁目

明治七年第五月

小三野井組 印

(其三)

記

一新公債證券千四百七拾五圓

內譯

參百圓券 貳枚
百圓券 壹枚
五拾圓券 壹枚

百圓券 三枚
百圓券 三枚
百圓券 壹枚
貳拾五圓券 壹枚

右三井元之助名前
右三井元之助名前
右三井元之助名前
右三井元之助名前
右三井元之助名前
右三井元之助名前
右三井元之助名前
右三井元之助名前
右三井元之助名前
右三井元之助名前

一舊公債證券八百貳拾五圓

內譯

第六篇 職制 經費

第六篇 職制 經費

三百圓券壹枚 り 三七貳八

貳拾五圓券壹枚 い 八五八

右三井元之助名前

五百圓券壹枚 わ 三八一六

右小野善助出店名代
津田文三郎名前

總計 枚數拾五枚

右者御預金爲抵當奉上納候也

明治七年七月

大阪

小三野井組

大阪港

税關御中

右保證金供托に對し大阪税關は左の領收書を與へり

記

一新公債證券 千四百七拾五圓

此枚數 拾貳枚

一舊公債證券 八百貳拾五圓

此枚數 三枚

總計 拾五枚

右預り金爲抵當差出候前書之證券正ニ受取候也

明治七年七月廿日

大阪税關長 長岡義之
租稅權助

小三野兩組

然るに後十一月小野組の瓦解と共に一旦小野三井兩組をして公金取扱の任務を解除し更らに三井組をして之れに當らしめ八年十月曩きに小野三井兩組へ交附せる命令書中の二ヶ條を改正す

大阪税關金銀出納事務爲取扱候命令書中貳ヶ條今般左之通改正候事

第貳條 大阪税關ヨリ三井組ニ預ケ金高一ヶ月四千圓ト被相定候ニ付同組ニ於テハ第一條ニ基キ

本年七月第百三拾壹號太政官御達官金取扱抵當品歩割ニ隨ヒ抵當品差入置ヘシ尤右比例ヨリ預ケ高過不及有之節ハ抵當品増減差入可申候事

第五條 大阪税關ニ出勤ノ三井組手代人ハ納人ヨリ税金ヲ請取其金額ノ過不足並金質ノ眞贋ヲ調

査シ之ヲ領收シ毎日預リ證簿ニ記載證印ノ上出納掛ニ差出ス可シ若預リ金上納中三井組ノ改濟

金銀ニ贋金或ハ不足等アリテ全ク三井組取扱疎略錯誤ニ出ル事明瞭ナルトキハ本年十月第百七

十七號太政官御達ニ基キ古金銀贋金ハ其同額ヲ爲償通貨贋金並ニ不足金ハ其價額一倍ヲ合シテ

償ハシムヘキ事

但本文贋金又ハ不足ノ償舊金銀ヲ以テ可相納節正金銀ニ差支エ候節ハ其金額ニ應シ通貨代金

ヲ以償ハシムヘキ事

右之條々命令候條條堅ク遵守可致候也

明治八年十月

大阪税關長 長岡義之
租稅權助

九年七月一日三井組を解きて三井銀行を創立し引續き公金取扱の事務を取扱はしめたり

第六篇 職制 經費

二十四、官有財産 開港以降大阪税關が管理せる地積及各營造物等は年月の推移と共に其異動甚たしく到底精細なる調査を遂ぐるに由なしと雖も十一年九月神戸税關の照會に對する當關の報告及以後の文書に徴すれば畧々之か梗概を盡すを得ん

第九十八號

今般第一一六號本局達ニヨリ當關所屬之官有財産價格之義至急取調來ル二十五日中其地到着候様御申越ノ趣承知候即別紙之通り取調指進候間御落手有之度候也

十一年九月二十四日

大阪税關諸務課

神戸税關諸務課御中

(別紙)

官有財産價格調書

大阪税關

一官 有地

此價格千五百參拾壹圓貳拾四錢八厘

一諸 建物

此價格八千六百九拾五圓

一船

此價格九拾圓

右之通有之候也

明治十一年九月

又十二年十一月七日調査の書類に據れば營造物の地積を知るに足るものあり即ち

大阪税關建物調書

北區富島町八十番地

一平屋造家屋

壹棟

此建坪百拾七坪八分三厘

但瓦葺

一二階造倉庫

五棟

此建坪貳百八拾八坪七分八厘

但瓦葺

一平屋造倉庫

壹棟

此建坪四拾七坪二分五厘

但瓦葺

一平屋造納屋

此建坪四坪八分四厘

但瓦葺

其他又十九年七月の調査に據り本關及監視課出張所官舎並に火藥庫等の地積を示せば左の如し

大阪税關地坪

千五百拾七坪〇七夕

天保町監視課出張所地坪

百四十六坪五合九夕六才

玉江町税關官舎地坪

第六篇 職制 經費

六百八拾坪

田中新田火藥庫地坪

反別壹反三畝拾五步

庶庫坪數

總計 三百七拾二坪半

火藥庫坪數

六拾坪

上屋坪數

八拾坪半

大阪稅關沿革史

第二期

第七篇 關稅警察

第一章 組織及配置

一、巡警卒及監船吏の新設 大阪開港の當初運上所時代に在つては關稅警察機關として船改役荷改役若くは本船番士關門番卒等を波止場(川口)天保山及安治、木津、尻無傳法の四川番所(五年正月關所と改む)に配置し専ら出入船舶の監視密商通稅の取締をなさしめ後明治五年三四月の交新に巡警監船の兩課を設け同時に荷改役船改役の稱を廢して巡警卒及び監船吏を置き海陸諸般の監視事務を取扱はしめき當時監船課規則を配布するに至り左の諭告を下せり

抑監吏ノ儀ハ

大日本政府ヨリ其港入津ノ船々軍艦ヲ除ク稅關官吏ヲ乘艦セシムル事當然タルニ因リ在艦の者共右官吏へ對シ不敬無之様叮嚀ニ取扱船中可成丈相等ノ用辨ヲ爲スヘシ云々條約書表ニ掲載有之ニ付爲乘組候事ニテ其旨趣ハ専ラ密商漏稅ヲ監スル爲メナルカ故ニ其職掌素ヨリ輕任ニ非ス殊ニ注意ヲ加ヘサルヲ得ス此本課ノ職務ハ専ラ外國人へ關涉爲スカ故ニ瑣少誤謬ヨリ若干ノ厄害ヲ醸成スル事不尠是レ只一稅關ノ爲メノミナラス御國體ニモ關涉スル事ナル故ニ常ニ禮節ヲ重シ信義ヲ厚シ輕粗ノ舉動ヲ爲サス縱令彼ヨリ無禮ノ言行アルト雖モ我ニ於テハ決テ禮節ヲ失ハス前途ノ勝算ヲ圖ルヲ要ス監吏乘艦ノ際若シ彼ノ輕蔑ヲ受ル事有ルニ於テハ是レ管己レ一人ノ辱ノミナラス畢竟御國辱ニモ關涉スル儀ニ付必ス己ヲ慎ミ賤陋野卑ノ所業無之様注意爲スコトヲ要ス監吏巡警其

課ヲ異ニスト雖トモ同シク稅務ノ必要ニ供スルモノニシテ其原因ヲ溫ルニ均シク内外商賈ノ輸出入セル物品ノ函入包裝ノ免狀ナキ賦或ハ免狀檢印及ヒ貨物ニ於テ疑ヲ容ル、コトアルニ於テハ之ヲ聞札爲スニ在リ是レ二課其名ヲ異ニスト雖モ其實ハ一勤務タル所以ナリ然レモ其專司スル處監吏ハ停泊ノ商船中ニ在テ之ヲ監守スルニ在リ此ヲ以テ互ニ緩急相救ヒ各課協心合力シ勉メテ稅關ノ必要ニ供スルヲ以テ大眼ト爲シ決テ彼我ノ別ヲ爲シ私意ヲ逞フシテ稅務ノ本職ヲ失フコト勿レ

監船課規則

課長

第一條 稅關中一課ノ長ニシテ内外人民ノ密商漏稅ヲ監査シ或ハ搜索爲ス等ノ事務一切ヲ幹理スルコトヲ掌ル

第二條 分課長以下課中一般ノ進退黜陟ヲ審判シ決テ長官ニ議スヘシ

第三條 課中ニ生スル一般ノ過失ハ都テ自ラ長官ニ向テ其責ニ任スヘシ故ニ平常課中ノ當否ヲ察視シ長官ノ指令ト雖トモ若シ或ハ事情適當セサルコトヲ察スルニ於テハ分課長ト商議參量シ議案ヲ作り以テ決テ長官ニ議スヘシ

第四條 常ニ分課長ト參議シ賞罰及指令其ノ當ヲ失ハサルコトニ注意スヘシ若シ不當ノ事アルニ於テハ自ラ其責ニ任スヘシ

第五條 分課長ノ爲メニ記載爲シタル各條令ハ盡ク課長ノ爲メニ用ユルコトヲ得ヘシ

第一條 常ニ課長ト協議參量シテ監吏ヲ統馭シ課中ヨリ申牒セル事故ハ宜シク之ヲ審判シ決テ課長ニ乞ヒ都テ課中ノ規則ヲシテ監吏ニ遵行爲サシメ其怠惰ヲ鞭撻シテ勉強力ヲ鼓舞シ課中ノ風習ヲシテ淳厚ナラシムルコトヲ要ス

第二條 晝夜關内ニ在テ課中事務ノ緩急ヲ斟酌シ適宜ノ處置ヲ爲スヲ要ス

第三條 監吏ノ賞罰ハ其ノ當ヲ失ハス且ツ迅速ニ處置スヘシ若シ賞罰其ノ當ヲ失フニ於テハ自ラ其責ニ任スヘシ

第四條 都テ課長ヨリノ指令ハ速ニ奉行スヘシ然レトモ若シ其ノ指令ノ趣旨適當セサルコトアルニ於テハ宜シク討論參議ヲ盡シ決テ長官ニ取ルヘシ

第五條 凡課長ニ生シタル一切ノ過失誤謬ハ都テ其ノ責ヲ免レサルカ故ニ平常任責ノ當否ヲ察視シ課長ニ向ツテ進退黜陟ヲ論スヘシ

第六條 本課ノ外別ニ巡警ノ一課ヲ設ケ陸地及ヒ港内ノ密商漏稅ヲ監セシムルカ故ニ事務上ニ於テ互ニ協議ヲ盡シ奸僞ノ徒無カラシムルヲ要ス

第七條 凡ソ本課ノ事務ハ專ラ外國人關涉爲スカ故ニ言語ノ不通ヨリ屢不都合ヲ生スルコト不尠故ニ公務ノ閑親自ノ勉學ハ勿論監吏ヲシテ西洋語學ヲ學ハシムルコトニ注意スヘシ

第八條 定メラレタル規則及職制ヲ固守爲スヘキハ勿論ナルト雖トモ猶時勢ノ變革ニ從ヒ廢立更正ノ意見アルニ於テハ其趣旨ヲ具狀シテ課長ト參議シ以テ決テ長官ニ取ルヘシ

斯の如くにして監船課は専ら海上に於ける關稅警察の事務を執行せしめたりしか巡警課に關する規定に付ては一も記録の徵すべきものなしと雖も蓋し監船巡警兩課は讀んで字の如く海陸相待つて諸般の取締に任したりしや論なし

二、監吏課の新設 上來記述したるか如く海陸監視事務を分擔せしむるの目的を以て曩きに巡警監船の兩課を置きたりしも關稅警察事務の敏活を期せんか爲めに海陸の區別によりて特に其課を異にするか如きは却つて兩者の間に疏通を欠き徒らに冗員を見る等實際の目的を達するの途に於て往々遺憾なき能はざるを以て遂に五年十一月大藏省より巡警、監船兩課を廢し更らに監吏課を置くの

按を具して正院に提出し翌六年一月八日認可を得て之を各港税關に施行せしむ今其提出案及監吏課章程を掲げん

各港税關ニ於テ内外商人トモ密商脱稅豫防ノ爲メ從前巡警監船ノ兩課設置十三等出仕以下等外出仕ヲ以テ使役罷在候處出仕等ノ名義有之候テハ自然尊大ニ涉リ却テ事務不舉或ハ着後日當免職歸國旅費等ノ入費不尠候間傭役士官ノ名義ニ改稱致シ度且又海陸兩課ニ相別レ居候テハ應援助力之道ニ於テ不便之儀モ有之加フルニ人員多數相成候間今般適任ノ人物精選多數ヲ減員シ監吏總長已下位置章程別冊之通明治六年第一日ヨリ改正履行踐守爲致度奉窺候差迫候ニ付至急御許決有御座度此段奉申上候也

壬申十一月廿七日

澁澤榮一
井上大藏大輔

正院御中

伺之通



明治六年一月八日

(別冊)

監吏課章程

第一章

監吏ノ主務タルヤ密商脱稅ヲ監視防遏スル爲メニ設ケシ者ナレハ居常總長ハ章程ト成規トニ照準シテ吏長監吏ヲ卒督シ吏長ハ總長ノ示令ニ從順シテ僚中懇和シ各自其職ヲ盡シ揚陸積船及移荷ノ際ニ至テハ殊ニ注意ヲ加ヘ其點詐ヲ看破發摘スルヲ要ス總長以下職務ノ標的タルヤ左條ノ如シ

監吏總長 八等

同副總長 九等

第一條

課中ノ首長ニシテ内外人民ノ密商脱稅ヲ發摘スルノ事務ヲ管ス

第二條

章程ト成規ト從テ吏長及ヒ監吏ノ所務ヲ便宜指令ス

第三條

課中ニ生シタル過失ト事務ノ舉ラサルハ自ラ長官ニ向テ其責ニ任ス故ニ居常課中ノ當否ヲ監視シ之ヲ長官ニ對シ陳說スルヲ得ル

第四條

吏長以下監吏ノ能否勤惰ハ平常之ヲ監視シ賞罰ノ法案ヲ具狀シ長官ニ呈シ處分ヲ請フヘシ

第五條

監吏勤務日課ノ興廢心得書ノ更正及辭賞徹勤等吏長ノ申達ヲ參取シ之ヲ長官ニ具狀シ處分ヲ乞フヘシ

監吏長 十一等

同副長 十二等

第一條

總長ノ指令ニ從テ其事務ヲ擔當調理シ亦其緩急ヲ察シ總長ニ告白ス

第二條

監吏ニ發出過失ト事務ノ舉ラサルハ總長ニ對シ其責ニ任ス故ニ大監吏以下ノ勤怠ヲ監視シ其當否

ヲ總長ニ向ヒ陳說スルヲ得ル

第三條

監吏ヲ卒督シ監船巡迴見張立番ノ人員ヲ配布スルヲ掌ル以上判任官トス

大監吏

第一條

吏長ノ令ニ從テ中少監吏ノ勤惰ヲ監察スルノ職ニシテ居常監船巡迴見張立番等吏長ノ配布シタル其處ニ到テ日夜之ヲ監視シ其景況ヲ吏長ニ報ス

第二條

吏長若シ不適當ノ令ヲ傳フルカ或ハ勤務ヲ怠ルノ事アラハ之ヲ審案シ總長ニ直報スルヲ得

第三條

監吏ニ屬スル事務ハ吏長ニ對シ討論スルノ權ナシト雖トモ若シ吏長ノ商議ヲ得ルニ於テハ處見ヲ陳說スルヲ得ル

第四條

入港スル船舶ノ來由ヲ尋問シ之ヲ吏長ニ報ス

中監吏

吏長ノ配布シタル船ニ到リ且ツ巡回シ海上ニ於テ密商脫稅ノ點詐ヲ看破防遏ス

小監吏

吏長ノ配布シタル見張番所及立番ノ位地ニ到リ陸上ニ於テ密商脫稅ノ點詐ヲ看破防遏ス右備勤士官トス

第二章

監吏ハ一介ノ士官タルヲ以テ外人ニ接ス故ニ禮節ヲ守リ服飾ヲ潔シ言語動作ヲ正フス可シ最トモ内外人民賤卑ノ者ト猥ニ交語ス可カラス然リト雖トモ必蔑視スルコト勿レ船中ハ殊更ニ注意ヲ加ヘ辱シメヲ受サル可シ

第三章

當港不案内ナル外國ノ旅客ハ假令下賤ノ者タリト雖トモ稅關ノ規則ヲ懇切ニ口授シ決シテ曼慢ノ所爲アル可カラス

第四章

監吏若シ點詐ヲ發覺スルトキハ必ス暴慢ノ所業ヲ慎ミ唯處トナス可キ證左ヲ取り直ニ之ヲ吏長ニ報スヘシ吏長ハ其緩急ヲ計リ總長ニ報スヘシ假令彼暴言ヲ吐クト雖トモ必ス一巳ノ怒リニ迷ヒ粗暴ノ言語動作ヲ爲シテ彼ノ口實ヲ生スルコトナク注意忍耐シテ全ク前途ノ勝算ヲ圖ルヘシ

第五章

中少監吏ハ居常舌ノ交リヲ結ヒ緩急相助ケ若シ陸上ニ百事ノ發リタルヲ海吏ノ耳目ニ見聞セハ直ニ上陸シテ助力ス可シ其功ニヨツテ相當ノ賞ヲ與フヘシ若シ傍觀スルモノアラハ必ス其事故ヲ嚴糺シ以テ相當ノ罰ヲ加フヘシ海上ノ陸吏ニ於テモ亦同シ

第六章

勤務ノ時間ハ人毎ニ晝夜中六時間ヲ派監シ晝夜ヲ分務スルカ如キハ總テ總長ニ任ス

第七章

監吏心得書及瑣末ノ規則ニ至テハ總長ニ示令シテ之ヲ布カシム其規則ニ從順シテ必ス違背スルコト勿レ

第七篇 關稅警察 組織及配置

第八章

監吏課ノ服制ハ總テ服制圖表ノ如ク其規範及製造ノ如キハ都テ總長ニ委ス

第九章

非常ノ賞罰ハ非常ノ所置アルヘシト雖トモ尋常ノ賞罰ハ賞罰表ニ照準シ之ヲ所置ス

第十章

稅關長官諸委任官及監吏總長吏長ヘノ禮節ハ總テ禮節表ノ如ク爲ルヘシ如シ傲慢無狀太甚シキ者ハ相當ニ罰ヲ加フヘシ

第十一章

稅關中ニ狂法ノ者竊盜爭鬪等アリ之ヲ捕虜鎮靜スルハ遲卒ノ職掌タリト雖トモ監吏ノ耳目ニ觸タル時ハ速ニ之ヲ應援助力スヘシ遲卒ノ監吏職務上ニ發ル事ニ於ケルモ亦同シ

第十二章

稅關ノ免許ナキ貨物ハ一切陸揚及船積トモ許ス可カラス雖然商物ノ外食用等左件ノ品類ニ至リテハ其實ヲ監視シ許ス可シ最堅牢ノ筐櫃ニ入ルモノ歟或ハ最大ナル者ニ至テハ左件ノ品ト雖トモ之ヲ吏長ニ報シ吏長審案シテ總長ニ告白シ検査課ヘ報スヘシ

船ヘ往ク者

寡少ノ食物類

當月ノ船具類

着換ノ衣服類

船ヨリ來ルモノ

着換ノ衣服類

常用ノ船具類

第十三章

無稅品及許了ノ品タリトモ其運搬ニ怪ムヘキ景況ヲ察スル時ハ之ヲ糺シ事實明了ナレハ之ヲ免シ

明了ナラサレハ吏長ニ報スヘシ言語ニ疑シキアルモ亦第十二章ノ如クスヘシ若シ閉關ノ後ニ在テハ稅關ノ宿直ニ報シ其顛末ヲ翌日總長ニ報スヘシ大事件ニ於テハ此限ニ非ス

第十四章

監吏ハ罪人ヲ捕縛スルト筐中ノ品ヲ發關スルノ權ナシ捕縛ハ遲卒ニ傳ヘ品ノ検査ハ検査課ヘ讓ル可シ

第十五章

監吏以下公事ニテ旅行スル時大監吏ハ九等旅費中少監吏ハ十等ノ旅費ヲ賜ル然リト雖トモ招募退役着後ノ日常等ハ賜ラサル可シ

第十六章

監吏ノ月給ハ命スル其日ヨリ免ル前日迄日割ヲ以テ之ヲ與フ亦轉職スル時ハ半月ヲ境ヒ重複セサル日迄ヲ渡スヘシ

(別紙賞罰表寫)

賞罰表	賞	罰
一 等	壹圓五拾錢	壹圓五拾錢
二 等	壹圓	壹圓
三 等	五拾錢	五拾錢
四 等	一 等賞辭	一 等賞辭
五 等	二 等賞辭	二 等賞辭
	徹勤三日	徹勤三日

(別紙禮節表寫)

第七篇 關稅警察

組織及配置

勤 懲 表	賞 譽	謝 意
一 等	壹圓五十錢	壹圓五十錢
二 等	壹 圓	壹 圓
三 等	五 十 錢	五 十 錢
四 等	一 等 賞 辭	徹 勤 三 日
五 等	二 等 賞 辭	徹 勤 三 日

三、監吏課の改稱(職制及章程の改正)

明治十年一月大藏省官制の改正と同時に監吏總長以下の官名を廢し同年五月更に監吏、監吏補を置き其官等月俸限制を定む

第四十三號

大藏省監吏監吏補ヲ置キ官等月俸并限制左ノ通被定候條此旨相達候事

明治十年五月二十六日

右大臣 岩倉具視

一等監吏 八 等

二等監吏 九 等

三等監吏 十 等

四等監吏 十一等

五等監吏 十二等

六等監吏 十三等

七等監吏 十四等

八等監吏 十五等

九等監吏 十六等

以上列任官

一等監吏補

月俸十三圓

二等監吏補

同 十二圓

三等監吏補

同 十一圓

四等監吏補

同 十圓

以上等外吏ヲ準ス

(服制ノ事ハ後ニアリ)

越へて同年六月從前の監吏課を監視課と改稱せしめ同時に其職制及章程の改正を行はしむ當時關稅局より神戸稅關に達せる布達左の如し

神 戶 稅 關

本年一月第五十二號ヲ以テ監吏總長以下諸官名モ都テ被廢候旨云々相達置候處今般太政官第四十三號ヲ以テ大藏省中監吏監吏補被置候旨被相達候ニ付テハ右公達ニ憑據シ從前監吏總長以下列任官ハ監吏大中小監吏ハ監吏補ト改稱シ且ツ監視課職制章程其他諸規則別冊之通制定相成候ニ付送付候條左之件々之通可被心得此旨相達候事

第一 從前々監吏課ハ監視課ト改稱相成候ニ付別冊職制章程ニ憑據致スヘキ事

第二 監吏ノ制服ハ悉皆自辨タルヘキ事

第三 監吏補ノ制服ハ被服保存期限ニ照シ官費ヲ以テ支給可致候事

第四 監吏補有功ノ者ヲ優待勸奨スル爲メ賞譽スルトキハ賞譽規則ニ照シ其關長限リ處分シ若シ非常ノ功勞アル者ニ五圓以上ノ賞譽ヲ與ヘント欲スルトキハ事實詳悉其時々具狀可致事

第五 監吏補心得書ハ各港從來ノ慣行モ有之一定難致ニ付其關長限リ制定ノ上可届出事

第六 監吏補職務上ノ過失ハ懲罰例ニ照シ其關長限リ處分可致事

第七 監吏補懲罰金ハ常ニ稅關へ積立置功勞アル監吏補へ五圓被下ノ賞金ヲ與フルトキハ右懲罰金積立ノ内ヲ以テ支給シ尙全額不足アルトキハ其關常費内ニテ仕拂可致事

第八 監吏補ヲ召募スルトキハ召募規則ニ憑據可致事

明治十年六月一日

關稅局長 遠藤 謹 助

(別冊)

稅關監視課職制

一等 監 吏 二等 監 吏

事務ノ繁簡ニ依リ一等二等ノ内壹員ヲ置ク

本課ノ長ニシテ章程心得書及慣例ニ遵依シ稅關長ノ指令ヲ承テ課中ノ事務ヲ管理スルヲ掌ル故ニ課中ニ生シタル過失及ヒ事ノ舉ラサル等ニ於テ稅關長ニ對シ其擔保ノ責任ヲ有ス

密商脫稅其他之ニ關スル規則ニ違犯スル者ヲ監視スルヲ首トシ其違犯ノ件ハ之ヲ稅關長ニ稟告スヘシ且姦詐ヲ看破スルニハ適宜處分スルヲ得ヘシ

密商脫稅違犯ノ者猥リニ強暴ヲ行ヒ若クハ固ク非理ヲ執ルトキハ臨機ノ處置ヲ施シ得ヘシ然レトモ其身体ニ係リ其名譽ニ關スル等ノ事ハ直ニ之ヲ行フヲ得ス必ス稅關長ノ指令ヲ請フヘシ

章程心得書及ヒ懲罰則ノ條件并慣例ノ事務等實際施行ノ上ニ就キ稅關長ニ對シ其當否ヲ論シ及ヒ所見ヲ陳說スルヲ得ヘシ

三等 監 吏 四等 監 吏 五等 監 吏 六等 監 吏

事務ノ繁簡ニ因リ之ヲ増減ス

章程心得書及ヒ慣例ニ遵依シ課長ノ指令ヲ承ケテ事務ヲ執行シ監吏補ヲ監所ニ分配シ又諸船舶入着セハ之ヲ尋問報告シ其他雜事ヲ掌ル事監所ニ起ル時ハ自ラ其地ニ至リ成規慣例上既ニ准許セル事件カ或ハ准許ナキモ規則ニ抵觸セサル瑣末ノ事ハ便宜處分スルヲ得ヘシ若シ成規慣例ニ

准許ナク且規則ニ關スルモノハ必ス課長ニ報告シ其決ヲ請フヘシ實際施行スル所ノ本課ノ事務ニ就キ現ニ弊害ヲ著シ若シクハ處置方法宜キヲ得スト察スルトキハ之ヲ課長ニ陳述スルヲ得又

課長ノ商議ニ參議シ兼テ所見ヲ開說スルヲ得ヘシ

常ニ監吏補ノ能否ヲ觀察シ勉怠ヲ勸戒シ功勞過失アラハ詳查シテ之ヲ課長ニ具狀スヘシ

監吏補ノ質問ニ應答辯解シ及ヒ其陳述スル所ハ之ヲ取捨スヘシ然リト雖トモ其陳述スル所ハ是非ヲ問ハス必ス課長ニ申告スヘシ

一等監吏二等監吏ヲ置カス若クハ公事又ハ歸省等ニ依テ其人不在ノトキハ三等以下ノ監吏之ヲ代理スルヲ得ヘシ

以上之ヲ判任官トス

一等監吏補 二等監吏補 三等監吏補 四等監吏補

配付セラレタル船舶若クハ監所ニ至リ及ヒ海上陸上ヲ巡回シ密商脫稅其他奸詐違犯ヲ監視禁遏シ又船口ヲ封鎖開放スルノ事ヲ掌ル等却テ監吏ノ指令ニ從フヘシ

本務上ニ就キ所見アラハ之ヲ三等以下ノ監吏ニ陳述スルヲ得ヘシ

以上之ヲ等外吏ニ準ス

附 記

明治十六年二月關稅局長達ヲ以テ三等監吏ヲ一等二等監吏ト同列ニ配セシメ一二字句ノ訂正ヲナシタリ

稅關監視課章程

第一 條

密商脫稅ヲ謀ル者或ハ謀ラントスル者或ハ之レニ關スル條約ノ明條ヲ違犯スル者并稅關ノ成規及ヒ慣法ニ抵觸スル者ヲ監視禁遏スルコト

第二 條

監視課ノ權限及ヒ職務ハ各港一定ヲ要シ此章程ヲ設クト雖トモ慣行自ラ異ナルヲ以テ監吏以下實

第七篇 關稅警察 組織及配置

際ノ勤方及ヒ心得ニ至テハ各港稅關長ニ之カ心得書ノ制定ヲ委ヌ故ニ右心得書ハ此章程ト同一ニ遵守スヘキコト

第三條

監吏ハ筐中ノ品ヲ檢閱スルノ權ヲ有セス然レトモ奸詐ヲ發覺スルニ當リ若シ其品性ヲ知ラスシテ不都合ノ件アルトキハ其時機ニ應シ之ヲ檢閱スルコトヲ得ヘキコト

第四條

監吏補ハ日課本務ノ定員ハ欠クヘカラサルヲ以テ若シ疾病或ハ事故アリテ出勤ヲ欠ク者アラハ休憩ノ同僚ヲシテ代務セシメ其欠ヲ補ハシム故ニ欠勤者ヨリ別表ノ金額ヲ徴シ以テ代務ノ謝トシ之ヲ給セシムヘキコト

但事故アリテ俸給全額ヲ給セサル場合ニ於テハ此限ニアラス

附記明治十六年六月本局達ヲ以テ第四條中「故」ニ以下ヲ刪除シタリ

(別表)

三日以下二日毎	二等 監吏補	拾 錢	四等 監吏補	拾 錢
四日以上一日毎	拾 錢	五 錢	拾 錢	六 錢
十一日以上一日毎	拾 錢	八 錢	拾 錢	貳 錢

翌明治十一年十二月監吏補官等の改定を見る即ち

第四十九號

明治十年^五月第四十三號達大藏省中一等監吏補以下官等左ノ通改定候條此旨相達候事

但月俸服制等ノ儀ハ従前ノ通

明治十一年十二月四日

右大臣 岩倉具視

一等監吏補 等外一等

二等監吏補 等外二等

三等監吏補 等外三等

四等監吏補 等外四等

次て明治十七年五月二十日大藏省中租稅關稅の二局を廢して更に主稅局を置き稅關は同局の主管する處となりしを以て前の監吏、監吏補を主稅監吏主稅監吏補(官等如元)と改稱せしめ同年七月稅關事務章程并に分掌規定を發布し監視課を監視科と改む後十九年一月十三日稅關監視課職制并に章程を廢し時の主稅官長より各港稅關へ左の如く達せり

- 一 舊監視課章程中掲載セル緊要ナル條項ハ之ヲ心得書中ニ編入シ稅關長限リ制定ノ上届出ツヘシ
 - 一 監吏補ニ給スル月俸旅費ノ給與法ハ總テ一般ノ規則ニ據ルヘシ
 - 一 監吏補召集規則ハ主稅届官吏採用規定ニ準シ制定ノ上届出ツヘシ
 - 一 監吏ハ判任トス各上官ノ指揮ヲ承ケ密商稅關監視ノ事ニ從フ
 - 一 監吏ハ便宜雇員ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得
- 其他事務分掌の爲めに監視課を設けて

監視課ハ密商稅關監視ノ事ヲ掌ル
 規定せられ従前の監吏補は此官制に於て廢せられ悉く雇監吏の名目の下に監吏の指揮を受けて關稅警察の任務に服せしむ

四、任用 從來運上所吏員(荷改、船改)の任用方法に就ては特に何等の規定なく單に他の吹舉に

待つて適宜任用せるに過ぎざりし然るに明治四年横濱連上所は監視官吏の任用に關し監船吏、巡警卒任用の標準を定め之を登選新式といふ即ち左の如し

一 身体 強壯ニシテ無病、正直、而不頑之者

二 身丈 五尺四寸以上五尺八寸ニ至ル者

三 年齢 二十歳以上三十歳ニ至ル者

右推舉アリテ登庸ヲ求ムル者ハ一日其課長ニ向接シ其座傍ニ就テ監船吏ハ連上所章程免狀船送り各國條約ヲ讀ミ其意ヲ解スルモノ巡警卒ハ生國地タル父母兄弟有無及ヒ五ヶ年以前ヨリ生活ノ事蹟等ノ演舌ニ代ハリシ書面ヲ自書セシメ之ニ依リテ以テ採用ノ許可ヲ得總テ自書シ能ハサル者ハ本課ノ登庸ヲ許サス

次で明治六年一月更らに監吏志願検査試験規則を規定せり當時各稅關事務の取扱振は常に横濱の例に慣ひたるを以て大阪稅關に於ける監視官吏の登用も亦此任用法に據りしや明かなりと雖も時に或は例外もありしや勿論なり要するに當時に於ける監視官吏の任用は頗る簡易なるものにてありし右任用に關し長官に提出せる伺案二三を掲げ其一般を知るに便せん

(例一)

攝洲西成郡九條村

武 籍 竹 内 清 秀

右者可成筆算モ出來候ニ付等外一級ニ御採用相成度候様仕度此段相伺候也

明治六年七月

(例二)

昨日御沙汰相成候監吏奉職志願之輩逸々検査仕候處何分一面會ヲ以才不才之義豫メ取極難申上候

ヘトモ試ニ條約書と文并英リードル并簡易之歴史相讀セ候處則下紙之通有之何レ一得一失アリテ格別秀テタル人物モ無之様愚考仕候併シ先長澤白木眞田三名之内御採用可然奉存候此段検査書相添申上候也

明治七年四月廿二日

長 岡 權 助 殿

植 村 大 屬

(例三)

今般當關少監吏壹名欠員ニ付志願之者共本日致試験候處堺縣士族宮内猪三郎年齢二十年六月ニテ是迄府下學校教師ニ被相雇候由漢籍ハ充分英語ハ未タ實用ニハ不相成候得共聊心得有之外志願之者ニ勝レ候間先ッ此者御採用相成度此段相伺候也

明治八年十月二十日

長 岡 租 稅 權 助 殿

七等出仕

植 村 昌 茂

(例四)

石川縣士族

枋 谷 敬 男

二十三年二ヶ月

今般少監吏欠員ニ付監吏志願ノ者三四名本日内試験仕候處洋學心得居候者壹名モ無御座石枋谷敬男ト申者ハ本日内驗ノ内ニテハ讀書算數筆跡應對振等良長シ居候間尙又御賢慮ノ上可然御處置有之候様仕度此段上申仕候也

大 阪 稅 關

監吏長事務取扱

田 島 蕃 樹

明治十年一月廿三日

稅 關 長 長 岡 義 之 殿

第七篇 關稅警察 組織及配置

降而明治十年五月二十六日官制の改正に依りて監吏監吏補と改稱せらるゝに及び同年六月一日關稅局長達を以て監吏、監吏補召集規則を定め茲に漸く監視官吏任用法の体を具するに至れり

監吏補召集規則

第一條

召集合格ノ者

- 一 普通讀書差支ナキ者但可成外國ノ語學ニ通セシモノ
- 二 二ヶ年以上勤續差支ナキ者
- 三 職務上ニ害アル疾病ナキ者
- 四 性質耐忍ニシテ酒癖ナキ者
- 五 保證人アル者

第二條

監吏補志願書式

私儀當港監吏補職奉務仕度御検査奉願候也

年 月 日

何府縣何郡何町或ハ何番地
何大區何小區

士華族 某
平民 厄次長男

(寄留人)何府縣何郡何町或ハ何番地寄留
何大區何小區

志願人 姓名 印 年齢

肩書式同前
保證人 姓名 印

前書願之趣相違無之候條與書如此候也

年 月 日

肩書式同前

戶長 姓名 印

何港稅關長

官 姓 名 殿

第三條

監吏補奉職受書并保證書式

奉職受書式

今般御試檢相濟何等監吏補拜命仕候然ル上ハ御規則ヲ遵奉シ專ラ職務精勤可仕候仍テ御受書如此候也

年 月 日

監吏 姓名 印

宛名前ニ同シ

第四條 華士族平民ヲ論セス檢査ノ上合格ノ者ハ四等監吏補ニ充ツヘシ

爾來此規則によりて監吏補を募集し欠員を生したるときに於て募集登用せり次て明治十九年一月十三日稅關監視課職制及章程の廢止に伴ひ時の主稅長官より監吏補召集規則は主稅局官吏採用規定に準して制定届出のべき旨を達せり

五、賞罰 運上所時代に於ける監視官吏の賞罰に關しては特に明文を以て規定したるものなきか如し然るに明治五年始めて巡警監船の兩課を置き監船課規則を配布すると同時に監船吏規則書を規定し茲に初めて其賞罰に關する明文の規定を見るに至りき

監船吏規則書

第七篇 關稅警察

組織及配置

第七篇 關稅警察 組織及配置

百二十六

- 第一條 常ニ分課長ノ指令ニ從ヒ唯淳厚ニシテ能其ノ職ヲ盡スヘシ職務ヲ怠リ命令ヲ違背シ規則ヲ犯スノ輩ハ必嚴科ニ處ス
- 第二條 每朝日出ヨリ一字間前ニ出關スヘシ若シ出船後三十分ヲ過ル者ハ一日ノ宿直ヲ以テ之ヲ罰ス又出船後ニ至テ出關爲スト雖トモ未タ三十分ニ及サルモノハ其罰ヲ免ル若シ之ヲ再ヒスルニ於テハ三十分過ル者ト其ノ罰ヲ同ス
但遲延三十分毎ニ一日ヲ加フ
- 第三條 病痾等ニ因テ出關爲シ難キ者ハ前夜其事情ヲ悉記シ以テ分課長ヘ出スヘシ又當日出關時限ニ差掛リ俄カニ病氣ノ者ハ日出迄ニ其狀ヲ申牒スヘシ若シ遲延ニ及フコト一字ニ至レハ快氣後一日ノ宿直ヲ以贖フヘシ都テ一字毎ニ一日ヲ加フ
但一字五十九分ニ至ルモノ一日ノ贖罪六十分ニ至ルモノハ二日ノ贖罪トスヘシ
- 第四條 定メラレタル船ヲ私ニ交換スルコトヲ禁ス
- 第五條 汚服汚履ハ最モ不体裁ナルカ故ニ常ニ清潔ニ爲シ服裝ハ正シク靚裝スルコトヲ要ス
但公務ノ外官服ヲ靚裝スルコトヲ禁ス
- 第六條 官物ヲ勤務上ニ於テ損傷爲スニ於テハ官費ヲ以テ之ヲ補理ス己レノ過失ヨリ生シタル損傷ハ自費ヲ以テ補理スベシ勤務上ニ於テ生シタル損傷ト雖トモ其ノ報知ヲ怠ルニ於テハ自費ヲ以テ之ヲ補理スヘシ
但官物ヲ紛失シ或ハ遺落スル者ハ自費ヲ以テ之ヲ償ハシム
- 第七條 内外ノ人民ヨリ私贈ノ苞苴ヲ受ケ密商ノ媒ヲ爲シタル者ハ嚴科ニ處ス若シ之ヲ看破爲ス者ヲ速ニ告愬スヘシ必ス其賞アリ縱令一旦同意シタルモノト雖トモ自白爲スニ於テハ其罰ヲ免シ時宜ニ依リ賞ヲ與フヘシ

- 第八條 在艦ノ際彼ヨリ瑣少ノ物品ヲ賜リ其所因賄賂ニ關涉セサルニ於テハ之ヲ納ムヘシ歸關ノ後直ニ分課長ニ報スヘシ若シ之ヲ隱蓋爲スニ於テハ賄賂ヲ得ルモノト其罰ヲ同フスヘシ
- 第九條 在艦ノ者常ニ水夫兵卒都テ輕輩ノ者ト猥ニ接語爲スヘカラス
- 第十條 在艦ノ際睡眠爲スニ於テハ是非ヲ問ハス七日ノ徹勤ヲ以テ之ヲ罰ス
- 第十一條 公務ノ餘勉メテ外國語學ヲ切磋研究スルヲ要ス
- 第十二條 出火其他非常ノ報ヲ聞知セハ速ニ出關スヘシ
- 第十三條 監船吏タル者ハ此ノ條余ヲ豫知熟戒スルヲ要ス若シ再犯爲ス者アルニ於テハ其罰常ノ定律ニ倍シテ以テ將來ヲ懲戒ス
- 次で同年十月監吏課を新設し翌春(六年一月一日)監吏課程(既出)を實施し
非常ノ賞罰ハ非常ノ所置アルヘシト雖モ尋常ノ賞罰ハ賞罰表ニ照準シ之ヲ所置ス
と規定し普通賞罰ノ等級を左の如く告示せり

賞 罰 表		賞		罰	
一	等	壹圓五拾錢	壹圓五拾錢		
二	等	壹圓	壹圓		
三	等	五拾錢	五拾錢		
四	等	一拾錢	一拾錢	徹勤三日	
五	等	二拾錢	二拾錢	徹勤二日	

(備考) 同年六月監吏課程ノ改正ト共ニ賞罰表ヲ勸懲表ト改メ其第五等罰ヲ徹勤二日トセリ詳シキハ前掲ノ章程改正案ヲ參照スヘシ)

第七篇 關稅警察 組織及配置

百二十七

第七篇 關稅警察 組織及配置

爾來此勸懲表によりて賞罰を行ひ來りしか明治十年五月官制の改正に伴ひ翌六月一日關稅局長の達を以て更らに監吏補賞罰規則を改定す

監吏補賞譽規則

監吏補其職務上ニ於テ勤勞アルモノハ事ノ大小難易ヲ量リ五圓以下ノ賞譽ヲ與フヘシ

監吏補懲罰例

第一條

職制章程及ヒ心得書ニ違背シ及ヒ怠慢失誤アルモノハ其情狀ヲ審按シ月給百分ノ一ヨリ少カラス一ヶ月分ヨリ多カラサル懲罰金ヲ科シ輕キ者ハ呵責ニ止ム

第二條

凡犯狀ノ職務ヲ辱シムルニ足ル者ハ免職ス

第三條

凡懲罰金未タ完納セサル中免職死去等ニ係ル者ハ追繳スルコトヲ免ス

第四條

凡懲罰金ハ毎月ノ俸金ヲ控除シ完納セシム但月俸三分ノ一ヲ過クルコトヲ得ス

後十二年十一月神戸大阪兩稅關に於て此賞罰規則に照準して賞罰例擴充と題する頗る嚴密なる規定を設け之に據て以て監吏補に對する賞罰を行ひさ

監吏補賞罰例擴充

賞	罰	表	賞	金	罰	金
---	---	---	---	---	---	---

十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
等	等	等	等	等	等	等	等	等	等
貳	三	五	七	壹	壹圓五十錢	貳	二圓五十錢	參圓五十錢	五圓
錢	錢	錢	錢	圓	錢	圓	錢	錢	圓
輕重 百分ノ一 百分ノ二 百分ノ三 百分ノ四 百分ノ五 百分ノ六 百分ノ七 百分ノ八 百分ノ九 百分ノ十 百分ノ十一 百分ノ十二 百分ノ十三 百分ノ十四 百分ノ十五 百分ノ十六 百分ノ十七 百分ノ十八 百分ノ十九 百分ノ二十 百分ノ二十一 百分ノ二十二 百分ノ二十三 百分ノ二十四 百分ノ二十五 百分ノ二十六 百分ノ二十七 百分ノ二十八 百分ノ二十九 百分ノ三十 百分ノ三十一 百分ノ三十二 百分ノ三十三 百分ノ三十四 百分ノ三十五 百分ノ三十六 百分ノ三十七 百分ノ三十八 百分ノ三十九 百分ノ四十 百分ノ四十一 百分ノ四十二 百分ノ四十三 百分ノ四十四 百分ノ四十五 百分ノ四十六 百分ノ四十七 百分ノ四十八 百分ノ四十九 百分ノ五十	輕重 百分ノ一 百分ノ二 百分ノ三 百分ノ四 百分ノ五 百分ノ六 百分ノ七 百分ノ八 百分ノ九 百分ノ十 百分ノ十一 百分ノ十二 百分ノ十三 百分ノ十四 百分ノ十五 百分ノ十六 百分ノ十七 百分ノ十八 百分ノ十九 百分ノ二十 百分ノ二十一 百分ノ二十二 百分ノ二十三 百分ノ二十四 百分ノ二十五 百分ノ二十六 百分ノ二十七 百分ノ二十八 百分ノ二十九 百分ノ三十 百分ノ三十一 百分ノ三十二 百分ノ三十三 百分ノ三十四 百分ノ三十五 百分ノ三十六 百分ノ三十七 百分ノ三十八 百分ノ三十九 百分ノ四十 百分ノ四十一 百分ノ四十二 百分ノ四十三 百分ノ四十四 百分ノ四十五 百分ノ四十六 百分ノ四十七 百分ノ四十八 百分ノ四十九 百分ノ五十	輕重 百分ノ一 百分ノ二 百分ノ三 百分ノ四 百分ノ五 百分ノ六 百分ノ七 百分ノ八 百分ノ九 百分ノ十 百分ノ十一 百分ノ十二 百分ノ十三 百分ノ十四 百分ノ十五 百分ノ十六 百分ノ十七 百分ノ十八 百分ノ十九 百分ノ二十 百分ノ二十一 百分ノ二十二 百分ノ二十三 百分ノ二十四 百分ノ二十五 百分ノ二十六 百分ノ二十七 百分ノ二十八 百分ノ二十九 百分ノ三十 百分ノ三十一 百分ノ三十二 百分ノ三十三 百分ノ三十四 百分ノ三十五 百分ノ三十六 百分ノ三十七 百分ノ三十八 百分ノ三十九 百分ノ四十 百分ノ四十一 百分ノ四十二 百分ノ四十三 百分ノ四十四 百分ノ四十五 百分ノ四十六 百分ノ四十七 百分ノ四十八 百分ノ四十九 百分ノ五十	輕重 百分ノ一 百分ノ二 百分ノ三 百分ノ四 百分ノ五 百分ノ六 百分ノ七 百分ノ八 百分ノ九 百分ノ十 百分ノ十一 百分ノ十二 百分ノ十三 百分ノ十四 百分ノ十五 百分ノ十六 百分ノ十七 百分ノ十八 百分ノ十九 百分ノ二十 百分ノ二十一 百分ノ二十二 百分ノ二十三 百分ノ二十四 百分ノ二十五 百分ノ二十六 百分ノ二十七 百分ノ二十八 百分ノ二十九 百分ノ三十 百分ノ三十一 百分ノ三十二 百分ノ三十三 百分ノ三十四 百分ノ三十五 百分ノ三十六 百分ノ三十七 百分ノ三十八 百分ノ三十九 百分ノ四十 百分ノ四十一 百分ノ四十二 百分ノ四十三 百分ノ四十四 百分ノ四十五 百分ノ四十六 百分ノ四十七 百分ノ四十八 百分ノ四十九 百分ノ五十	輕重 百分ノ一 百分ノ二 百分ノ三 百分ノ四 百分ノ五 百分ノ六 百分ノ七 百分ノ八 百分ノ九 百分ノ十 百分ノ十一 百分ノ十二 百分ノ十三 百分ノ十四 百分ノ十五 百分ノ十六 百分ノ十七 百分ノ十八 百分ノ十九 百分ノ二十 百分ノ二十一 百分ノ二十二 百分ノ二十三 百分ノ二十四 百分ノ二十五 百分ノ二十六 百分ノ二十七 百分ノ二十八 百分ノ二十九 百分ノ三十 百分ノ三十一 百分ノ三十二 百分ノ三十三 百分ノ三十四 百分ノ三十五 百分ノ三十六 百分ノ三十七 百分ノ三十八 百分ノ三十九 百分ノ四十 百分ノ四十一 百分ノ四十二 百分ノ四十三 百分ノ四十四 百分ノ四十五 百分ノ四十六 百分ノ四十七 百分ノ四十八 百分ノ四十九 百分ノ五十	輕重 百分ノ一 百分ノ二 百分ノ三 百分ノ四 百分ノ五 百分ノ六 百分ノ七 百分ノ八 百分ノ九 百分ノ十 百分ノ十一 百分ノ十二 百分ノ十三 百分ノ十四 百分ノ十五 百分ノ十六 百分ノ十七 百分ノ十八 百分ノ十九 百分ノ二十 百分ノ二十一 百分ノ二十二 百分ノ二十三 百分ノ二十四 百分ノ二十五 百分ノ二十六 百分ノ二十七 百分ノ二十八 百分ノ二十九 百分ノ三十 百分ノ三十一 百分ノ三十二 百分ノ三十三 百分ノ三十四 百分ノ三十五 百分ノ三十六 百分ノ三十七 百分ノ三十八 百分ノ三十九 百分ノ四十 百分ノ四十一 百分ノ四十二 百分ノ四十三 百分ノ四十四 百分ノ四十五 百分ノ四十六 百分ノ四十七 百分ノ四十八 百分ノ四十九 百分ノ五十				

監吏補賞罰例擴充

目次

賞

第七篇 關稅警察 組織及配置

看破密商脫稅條 摘發國禁物條 覺舉違例條
 偵認竊盜條 警戒非常條 救援同僚條
 勤務勉勵條 (此分十五年二月取消ノ由神戸稅關小林一等屬ノ來意アリ)

罰

不覺密商脫稅條 不覺國禁物條 不覺違例條
 違戾指命條 開鎖失時條 當務不就條
 不告交番條 失時出課條 怠慢本務條
 私替本務條 不告退關他行條 病中他行條
 遺損公品條 汚辱体裁條 自首減等條

監吏補賞罰例擴充

凡ノ密商脫稅ノ物品ヲ發摘押獲シ其他一般勤務上ニ功勞アルモノハ例ニ照シテ之ヲ賞シ其非常ノ功績アルモノハ特別ノ賞ヲ行フ職制章程心得書全擴充其他諸規則ヲ犯シ又ハ怠慢失誤アルモノハ之ヲ罰シ其賞罰ヲ受クル一ヶ月間二回以上ニ及フモノハ各本等ニ一等ヲ加フ其例ニ記載シ盡サ、ル功績怠慢失誤等ハ渾テ諸條ニ比附シテ賞罰スルコト尙ホ既定ノ賞罰例ニ於ルカ如シ又茲ニ本例擴充シテ細目ヲ定ムルト雖トモ最輕最微ノ功勞過失等ハ止タ賞辭呵責ニ附スヘシ

賞

第一章

看破密商脫稅條 密商脫稅ト稱スルハ内外人民ノ海關稅ヲ害スルノ構意ヲ以テ應稅物則チ元價五圓以上ノ輸入品ト内國船ト諸種ノ物ヲ貿易スル等ヲ云フ
 第一則 内外人民密商脫稅ノ構意 (貨物ヲ着衣中ニ隱匿スルカ或ハ波止場内外ヨリ揚卸スルカ又ハ無免狀ニテ密)ヲ

以テ密運セル應稅物ヲ看破押獲セルハ輸出入ニ論ナク賞六等

第二則 其構意特ニ密 (僅僅ヲ重トシテ嚴密ニ貨物ヲ隱匿スルカ又ハ適當ノ機噐ヲ以テ貨物ヲ水中ニ沈メテ密運スルカ)ナルハ賞第五等

第三則 其密脫セント謀リシ輸入品ノ元價五圓以上輸出品ノ元價百圓以上ハ五十圓毎ニ一等ヲ加ヘテ第一等ニ至ル

第四則 密運セル有稅物ヲ看破摘發押止スルニ當リ貨主ノ強拒ニ遇ヒ特別盡力ノ廉アルハ各本賞ニ一等ヲ加フ又爲メニ暴壓ノ受クルモ屈セス能ク押留シ得タルハ各本賞ニ二等ヲ加ヘテ賞第一等ニ至ル

第五則 其密運セルモノ若シ不應稅物ナルトキハ本條ノ諸則ニ擬テ賞ヲ論ス

第二章

摘發國禁物條 國禁物ト稱スルハ輸出入禁制ノ品即チ阿片其他國法ニ依テ輸入若クハ輸出ヲ禁ゼラレタル品物ヲ云フ

第六則 内外人民ノ密運セル國禁物ヲ覺舉押留セルハ賞第六等

第七則 輸入阿片ハ一斤以上一斤毎ニ一等ヲ加ヘ輸出金銀地金ハ元價百圓以上百圓毎ニ一等ヲ加ヘテ賞第一等ニ至ル其他ノ物品ハ渾テ第三則ニ照シテ加等ヲ論ス

第八則 其構意ノ特ニ密ナル及ヒ看破押止ノ際貨主ノ強拒ニ遇ヒ特別盡力ノ廉アルモノハ第二第四ノ二則ニ照シテ加等ヲ論ス

第三章

覺舉違例條 違例ト稱スルハ手續ヲ經サラシムルニ止ルモノニテ即チ元價五拾圓以下ノ輸出品同五圓未滿ノ輸入品其他外國船ヨリ外國船ヘ船移セル貨物等例規ノ手續ヲ避クル構意ニテ内外人民ノ密運セルモノニシテ海關稅ニ害ナキモノヲ云フ然レトモ貨主ノ行為ニ依リテハ特ニ本品ヲ沒收スルコトアルヘシ且無稅品ノ如キモ元價百圓以下ハ輸出入ノ別ナク本條ニ依リテ賞ヲ論ス

第九則 内外人民ノ手數ヲ避クルカ爲メノ構意ヲ以テ密運セル貨物ヲ看破シ例規ノ手數ヲ經セシ

ムルハ輸出入及ヒ船移ニ論ナク渾テ賞第十等又其構意ニアラスシテ全ク貨主運漕人ノ過誤ニ出ルモ手數既済ノ貨物中未済ノ貨物ヲ混入運搬セルヲ覺舉シ其手數ヲ踐マシムルハ尙ホ本條ニ擬シテ賞ヲ論ス

第十則 其看破セル物品構意ノ密(着衣中若クハ解ノ船底等ニ隱匿セルカ又ハ捺印既済ノ)ナルハ賞第九等

第十一則 密運物ヲ看破覺舉シ例規ノ手數ヲ指論スルニ貨主從ハス強暴ニ運搬シ若シクハ船積船卸セントスルニ當リ特別盡力ノ廉アルハ各本賞ニ一等ヲ加フ又爲メニ暴壓ヲ受ケルモ屈セス能ク手數ヲ經サシメタルハ各本賞ニ二等ヲ加フ

第四章

偵認窃盜條(窃盜ト稱スルハ單ニ税關所屬ノ場内ニアル諸貨物及ヒ税關所屬ノ物品ヲ物ニ盜ミ去リ若クハ盜マントスル賊徒ヲ云フ)

第十二則 税關ニ關シタル物品ヲ盜ミ或ハ盜マントスル賊徒ヲ偵認押捕セルハ其難易ニヨリ有税無税ヲ別テ第一則以下第四則迄及ヒ第九、十、十一、ノ三則ニ比附シテ賞ヲ論ス

第十三則 賊徒ヲ偵認シ追捕シテ及ハス若クハ敵シ得スシテ逃遁セシムルモ其贓品ヲ押止シ得タルハ賞尙ホ上ノ諸則ニ同シ

第五章

警戒非常條(非常ト稱スルハ税關所屬ノ家屋及場内ニアル貨物ニ火ヲ失シ或ハ失セントシタル其他禁セラレタル家屋内等ニ點燈燃火アルヲ目撃制止シテ危險ニ至ラシメサルヲ云フ)

第十四則 禁制ノ場所又ハ無監守ノ倉庫内等ニ點燈燃火アルヲ目撃制止シテ危險ニ至ラシメサルハ賞第十等

第十五則 家屋又ハ貨物ニ火ヲ失シ若クハ失セントスルヲ覺知シ直ニ撲滅シ若クハ急報シテ大事ニ至ラシメサルハ賞第九等撲滅ノ際特別盡力ノ廉アルハ等ヲ加ヘテ賞第一等ニ至ル

第十六則 失火アルヲ見聞シテ速ニ馳付其撲滅ニ助力セルハ本賞ニ一等ヲ減ス尙ホ其盡力ノ著シキモノハ本賞ニ同シ

第十七則 例ニ掲ケサル諸般非常ノ災害ヲ覺舉鎮靜防禦スルハ本條諸則ニ比附シテ賞ヲ論ス

第六章

救援同僚條(同僚ト稱スルハ監吏監吏補ノミナラス税關ノ諸吏員ヲ總稱ス)

第十八則 同僚ヲ助ケテ密商脱税國禁違例及ヒ窃盜等ヲ看破摘發制止捕獲セルハ賞渾テ本賞ニ二等ヲ減ス

第十九則 密商脱税及ヒ違例セルモノ等強暴ニシテ當該者ノ指論ニ從ハス且暴動ヲナシテ當該者制止又ハ所分シ能ハサルヲ救援助力シ其際特別盡力ノ廉アルハ本賞ニ同シ

第七章

此條十五年二月取消之事

第二十則 四ヶ月間勤務ヲ欠カス懲罰ヲ蒙ラス精勵拔群ノ者ハ賞第五等欠勤一度ハ一等ヲ減シ二度ハ二等ヲ減シ三度ハ三等ヲ減シ賞ヲ與フ

第一章

不覺密商脱税條(密商脱税ノ意義ハ看破密商脱税條ニ説明アリ故ニ再説セス)

第一則 監守中應稅貨物ノ脱漏セルヲ覺ラサルモノ又ハ實跡ナキ人言ヲ信シ若クハ人ノ詐僞恐嚇ニ因リ免狀及捺印ノ有無ヲ問ハスシテ許放セルモノ或ハ免狀面ノ品種ニ異ル貨物及ヒ記號箇數ノ符合セサル貨物ヲ積卸セシムルモノ若クハ其貨物ノ數免狀面ノ高ニ超過スルヲ覺知セスシテ積卸セシムルモノ又ハ勘査ヲ誤リテ許放セルモノ等其海關稅ニ害アルモノハ罰第六等尙害ノ大小情ノ輕重ヲ酌量シテ本罰ノ輕又ハ重ヲ課ス

第七篇 關稅警察 組織及配置

第七篇 關稅警察

組織及置配

第二則 其脫漏放許セル貨物輸出品ニシテ元價五拾圓以上輸入品ニシテ元價五圓以上ハ五拾圓毎
ニ一等ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル

第三則 其密運セル構意緻密ニシテ當時其詐偽奸謀タルヲ辨シ能ハサル及ヒ貨主ノ威迫避クヘカ
ラサル若クハ衆寡敵セサルノ跡明瞭ナルモノハ情ヲ酌ミ減等又ハ本罰ヲ全免スルコトアルヘシ

第四則 一旦脫漏放許セルモ自身覺舉シ能ク追回シ得タルハ人ノ助勢ニ因ルト因ラサルトヲ問ハ
ス罰ヲ論セス又他人ノ告知ニ因テ追回シ得タルモ本罰ニ二等ヲ減ス單ニ他人ノ手ニテ恢復セル
モ尙ホ本罰ニ一等ヲ減ス

第五則 其脫漏セル貨物不應稅物ナレハ本條ノ諸則ニ擬テ罰ヲ論ス

第二章

第六則 不覺國禁物條ニ註明セルヲ以テ茲ニ再說セズ
監守中國禁物ノ脫漏セルヲ覺ラサルモノ又ハ實跡ナキ人言ヲ信シ若クハ人ノ詐偽恐嚇ニ
因リ輒ク放許セルモノ等ハ罰第六等

第七則 其物品輸入品ニシテ元價五圓輸出品ニシテ元價五拾圓以上ハ第三則ニ照シテ加等ヲ論ス
尙ホ害ノ大小情之輕重ヲ酌量シ本罰ノ輕又ハ重ヲ課ス

第八則 其密運ノ構意緻密ナル若シクハ衆寡敵セサル及ヒ一旦放許セシモ遂ニ追回シ得タルハ第
四、五兩則ニ照シテ等ヲ減ス

第三章

第九則 不覺違例條違例ノ意義ハ覺舉違例條ニ說
明セルヲ以テ茲ニ再說セズ
監守中未タ手數ヲ經サル貨物ノ脫漏セルヲ覺ラス又ハ實跡ナキ人言ヲ信シ若クハ人ノ詐
偽恐嚇ニ因テ免狀捺印ノ有無ヲ問ハス商價ヲ放許セルハ罰第九等

第十則 其密運ノ構意緻密ナル若クハ衆寡敵セサル及ヒ一旦許放セルモ遂ニ追回シ得タルハ第四第
五兩則ニ照ラシテ等ヲ減ス

第四章

第十一則 違反指令條違例指令ト稱スルハ百般順時ニ發
遣セラレ司令長ノ指令ニ違フヲ云フ
司長ノ指令ニ違フ情輕キハ罰第十等情重キハ罰第九等尙ホ害ノ大小情ノ輕重ヲ酌量シ
テ等ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル其事ニ害ナキハ情ヲ酌ミ罰ヲ減ス

第十二則 因テ以テ密商脫稅又ハ違例セシムル等ハ各本條ニ照ラシ重キニ從テ罰ヲ論ス

第五章

第十三則 開鎖失時條開鎖失時ト稱スルハ船口ヲ封鎖シ若クハ開披スル
定期ヲ遲延セル及封鎖ニ漏疎遺脱アル等ヲ云フ
船口開披ノ定期ヲ後ル、モノ及ヒ鎖封ニ疎漏アルモノハ罰第六等

第十四則 船口開披ノ遲期又ハ鎖封ノ疎漏ニ因テ脫稅其他犯則ノ害ヲ生セシメタルハ其害ノ大小
情ノ輕重ニヨリ罰ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル

第十五則 開披ノ遲期及ヒ封緘ノ疎漏再度ニ及フ者ハ各本罰ニ一等ヲ加フ

第六章

第十六則 當務不就條當務不就ト稱スルハ交代時限ニ至リ當ニ本務ニ
就クヘキヲ睡眠シ又ハ故ナク就務セサルヲ云フ
就務定期ヲ後ル、ハ罰第十等其遲期故意ニ出ルモノ情輕キハ罰第九等情重キハ罰第八
等加ヘテ第六等ニ止ル

第十七則 睡眠セルニ當リ當番ノ喚起者報告セス因テ以テ時期ヲ失シタルノ情明白ナルハ問ハス

第七章

出課失時條出課失時ト稱スルハ出勤又ハ病告
書ヲ呈致スル定期ヲ失スルヲ云フ

第七篇 關稅警察

組織及置配

第七篇 關稅警察 組織及配置

百三十四

第二則 其脫漏放許セル貨物輸出品ニシテ元價五拾圓以上輸入品ニシテ元價五圓以上ハ五拾圓毎ニ一等ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル

第三則 其密運セル構意緻密ニシテ當時其詐偽奸謀タルヲ辨シ能ハサル及ヒ貨主ノ威迫避クヘカラサル若クハ衆寡敵セサルノ跡明瞭ナルモノハ情ヲ酌ミ減等又ハ本罰ヲ全免スルコトアルヘシ

第四則 一旦脫漏放許セルモ自身覺學シ能ク追回シ得タルハ人ノ助勢ニ因ルト因ラサルトヲ問ハス罰ヲ論セス又他人ノ告知ニ因テ追回シ得タルモ本罰ニ二等ヲ減ス單ニ他人ノ手ニテ恢復セルモ尙ホ本罰ニ一等ヲ減ス

第五則 其脫漏セル貨物不應稅物ナレハ本條ノ諸則ニ擬テ罰ヲ論ス

第二章

不覺國禁物條 國禁物ノ意義ハ摘發國禁物條ニ說明セルヲ以テ茲ニ再說セス

第六則 監守中國禁物ノ脫漏セルヲ覺ラサルモノ又ハ實跡ナキ人言ヲ信シ若クハ人ノ詐偽恐嚇ニ因リ輒ク放許セルモノ等ハ罰第六等

第七則 其物品輸入品ニシテ元價五圓輸出品ニシテ元價五拾圓以上ハ第三則ニ照シテ加等ヲ論ス尙ホ害ノ大小情之輕重ヲ酌量シ本罰ノ輕又ハ重ヲ課ス

第八則 其密運ノ構意緻密ナル若シクハ衆寡敵セサル及ヒ一旦放許セシモ遂ニ追回シ得タルハ第四、五兩則ニ照シテ等ヲ減ス

第三章

不覺違例條 違例ノ意義ハ覺學違例條ニ說明セルヲ以テ茲ニ再說セス

第九則 監守中未タ手數ヲ經サル貨物ノ脫漏セルヲ覺ラス又ハ實跡ナキ人言ヲ信シ若クハ人ノ詐偽恐嚇ニ因テ免狀捺印ノ有無ヲ問ハス商價ヲ放許セルハ罰第九等

第十則 其密運ノ構意緻密ナル若クハ衆寡敵セサル及ヒ一旦許放セルモ遂ニ追回シ得タルハ第四四五兩則ニ照ラシテ等ヲ減ス

第四章

違反指令條 違例指令ト稱スルハ百般順時ニ發遣セラレ司令長ノ指令ニ違フヲ云フ

第十一則 司令ノ指令ニ違フ情輕キハ罰第十等情重キハ罰第九等尙ホ害ノ大小情ノ輕重ヲ酌量シテ等ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル其事ニ害ナキハ情ヲ酌ミ罰ヲ減ス

第十二則 因テ以テ密商脫稅又ハ違例セシムル等ハ各本條ニ照ラシ重キニ從テ罰ヲ論ス

第五章

開鎖失時條 開鎖失時ト稱スルハ船口ヲ封鎖シ若クハ開披スル定期ヲ遲延セル及封鎖ニ漏疎遺脱アル等ヲ云フ

第十三則 船口開披ノ定期ヲ後ル、モノ及ヒ鎖封ニ疎漏アルモノハ罰第六等

第十四則 船口開披ノ遲期又ハ鎖封ノ疎漏ニ因テ脫稅其他犯則ノ害ヲ生セシメタルハ其害ノ大小情ノ輕重ニヨリ罰ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル

第六章

當務不就條 當務不就ト稱スルハ交代時限ニ至リ當ニ本務ニ就クヘキヲ睡眠シ又ハ放ナク就務セサルヲ云フ

第十六則 就務定期ヲ後ル、ハ罰第十等其遲期故意ニ出ルモノ情輕キハ罰第九等情重キハ罰第八等加ヘテ第六等ニ止ル

第七章

出課失時條 出課失時ト稱スルハ出勤又ハ病告遺テ呈致スル定期ヲ失スルヲ云フ

第十七則 睡眠セルニ當リ當番ノ喚起者報告セス因テ以テ時期ヲ失シタルノ情明白ナルハ問ハス

第七篇 關稅警察 組織及配置

百三十五

第十八則 出課定時限四十分以下ヲ遅刻スルコト三ヶ月間即九十日三回ニ及フモノハ罰第十等
第十九則 四十分以上一時以内ノ遅刻ハ其都度罰第十等一時以上二時毎ニ一等ヲ加ヘテ罰第六等ニ止ル九時以上更ニ罰ヲ論ス

第二十則 病告書呈致定期ニ後ル、コト一時以内罰第十等一時以上更ニ罰ヲ論ス又同僚ノ依托ヲ受ケ病告書呈致ノ際定期ニ後レタルハ尙ホ本犯ニ同シ

第二十一則 父母妻子ノ危急或ハ出勤ノ途上非常ノ災害ニ會シ又ハ急病ニ罹リ遅延スル等避ケ能ハサルノ跡明瞭ナルモノハ問ハス

第八章

怠慢本務條 怠慢本務ト稱スルハ海陸各監所又ハ港外ニ出張シテ正課ノ本務ヲ怠サシムルヲ云フ

第二十二則 監守中立ナカラ睡眠シ他人ノ至ルヲ自覺セサル罰第十等

第二十三則 監守中故ナク其位置ヲ離去スルハ監守ニ堪ルモ罰第十等

第二十四則 監守中椅子貨物等ニ倚リ睡眠スルハ罰第九等横臥スルハ睡眠スルト否トヲ問ハス一等ヲ加フ

第二十五則 監守中遮目之場所 他人ノ家屋又ハ船室内及ニ入リ居タルモ他人ノ寔音ヲ覺知シ自ラ監守ニ復シタルハ罰第九等

第二十六則 遮目ノ場所ニ入り人ノ寔音アルモ自ラ監守ニ復セサルハ罰一等ヲ加フ然レ共監視ニ堪ユルハ各一等ヲ減ス

第二十七則 其家屋又ハ船室内ニ入り横臥睡眠セルハ罰第七等制服若クハ靴等ヲ脱シ居タルハ壹等ヲ加フ

第二十八則 監守中私ニ監區ヲ離レ歸課スレハ罰第六等其他所ヲ徘徊スルハ事ノ輕重ヲ酌量シ罰ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル

第二十九則 他所ニ出張シテ事故ナキニ監所ヲ離ル、ハ罰第六等

第三十則 本條ノ諸則ヲ犯シテ怠勤二時ヲ過ルハ各一等ヲ加ヘ以上二時毎ニ一等ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル

第三十一則 渾テ怠勤ニ依テ密商脱稅違例セシメタル等ハ各本條ニ照較シ重ニ從テ罰ヲ論ス

第九章

私替本務條 私替本務ト稱スルハ課セラレタル正課時限内司長ノ許可ヲ得ズシテ擅ニ同僚ト交替スルモノ等ヲ云フ

第三十二則 正課ノ本務ヲ私ニ交替スルハ罰第十等因テ以テ密商脱稅違例セシメタル等ハ各本條ニ照較シ罰ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル

第十章

不告退關他行條 不告退關ト稱スルハ當直時了レハトテ司長ニ告ケス恣ニ歸家スルヲ云フ不告他ト稱スルハ休憩時間中司長ニ告ケス他行スルヲ云フ

第三十三則 司長ニ告ケスシテ退關スルモノ及ヒ他行スルモノハ罰第十等因テ以テ事ノ害ヲ生セシムルハ各本條ニ照較シ罰ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル

第十一章

病中他行條 病中他行ト稱スルハ病氣ニテ引籠中其許可ヲ得ズシテ恣ニ當直市街外レ他所ニ遊行スル等ヲ云フ

第三十四則 病氣引籠中其許可ヲ得ズシテ慢ニ市中ヲ徘徊スルハ罰第八等其當港區外ニ往返スルハ一等ヲ加フ其區外ニ往返中日數二日以上ニ及フハ罰ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル

第十二章

遺損公品條 遺損公品ト稱スルハ官品又ハ公文ヲ遺失シ或ハ毀損スルモノ等ヲ云フ

第三十五則 公文又ハ官品ヲ遺失シ或ハ毀損セルハ罰第十等以上情ノ輕重害ノ大小ヲ酌量シテ等

第七篇 關稅警察 組織及配置

第七篇 關稅警察 組織及配置

第八條 出科定時限ヲ遅延スルモノ又ハ病告書呈致ノ定期ヲ後ル、モノ

第九條 監守中睡眠シ又ハ位置ヲ離去シ遮目場所ニ潛入スルモノ

右罰第十等以上第一等ニ止ル

第十條 司長ノ命ニ違フモノ

第十一條 正課ノ本務ヲ私ニ交代スルモノ

第十二條 司長ニ告ケスシテ退關及ヒ他行スルモノ

第十三條 公文若クハ官品ヲ遺失シ又ハ毀損スルモノ

第十四條 公務時間中不体裁ノ所爲アルモノ

右各罰第十等以上第一等ニ至ル

賞罰表	賞金	罰俸
一等	五圓	重 百分ノ五五ヨリ一ヶ月ニ至ル 輕 百分ノ五十五
二等	參圓五拾錢	重 百分ノ三十五 輕 百分ノ三十五
三等	貳圓五拾錢	重 百分ノ二十五 輕 百分ノ二十五
四等	貳圓	重 百分ノ二十 輕 百分ノ二十
五等	壹圓五拾錢	重 百分ノ十五 輕 百分ノ十五

賞加罰の實例	賞金	罰俸
六等	壹圓	重 百分ノ十一 輕 百分ノ十一
七等	七拾錢	重 百分ノ八 輕 百分ノ八
八等	五拾錢	重 百分ノ五 輕 百分ノ五
九等	參拾錢	重 百分ノ三 輕 百分ノ三
十等	貳拾錢	重 百分ノ二 輕 百分ノ二

六、行賞加罰の實例 監視官吏の賞罰に關する規定の一般は前述する處の如し今當時に於ける行賞加罰の實例二三を擧げんに明治八年七月漁船金星丸天保山沖に於て難破沈没の際に當り當關天保山出張所詰監吏及水夫が急に赴き乗客九名を救助したり之か行賞の事に關し植村出仕より關長に稟議して曰く

一昨二十一日蒸氣金星丸天保山沖ニテ沈没之際御雇水夫共盡力船客九名救助致候趣ヲ以テ賞與之儀吏長ヨリ伺出候處兼テ御布告之難破船取扱御規則第十六條ニ基候ヘハ管轄廳ヨリ相當ノ賞可有之筈ニ付別紙之通り坂府へ掛合候方ニ可有之哉乍併全ク監吏ノ差圖ヲ受官舟ヲ以テ救助致候義ニ付私ニ相救候而ハ別段之廉ニテ關限リ之御賞與ニ可相成哉此段相伺候也

七月廿三日

長岡 租稅權助 殿

再伸救助セシハ水夫ハ全ク監吏ノ差圖ニ出候然ラハ水夫ニ賞與有之候ハ、其差圖致セシ監吏ヘモ

第七篇 關稅警察 組織及配置

第七篇 關稅警察 組織及配置

百三十八

ヲ加ヘテ罰第一等ニ至ル其事ニ害ナキモノ及ヒ避クヘカラサルノ理由アルハ情ヲ酌ミ罰ヲ減ス

第十三章

汚辱体裁條 汚辱ト稱スルハ公務中及ヒ出勤退課ノ途上爲ス

第三十六則 公務時間中不体裁ノ所爲アル若クハ出勤退課ノ途上木履ヲ穿其他制外ノ服帽ヲ着スルハ罰第一等ニ至ル

第十四章

過誤失錯條 過誤失錯ト稱スルハ當務者事ヲ後務者ニ授囑スルニ誤

第三十七則 過誤失錯ニ因テ以テ生シタル事害ハ諸條ニ比附シテ懲罰ヲ論スト雖モ其事情ヲ酌量シ本罰ヲ減シ又ハ全免スルコトアルヘシ

第十五章

自首減等條 自首減等ト稱スルハ密商脱稅違例セシメ又ハ急勸セシ後他人ノ發覺ヲ待タズ

第三十八則 非ヲ悔ヒテ自首スルハ情ヲ酌ミ罰ヲ減ス

第三十九則 自首ニ因テ其事害ヲ追回改正シ得タルハ本罰ヲ全免スト雖トモ他人ニ知覺セラレタルヲ以テ自首スルハ此限ニ非ス

備考

明治十四年四月一日監吏補賞罰擴充賞與之部第四章第十二則中有稅無稅ヲ別チ(第一則以下第四則迄及ヒ第九、十、十一、ノ三則ニ)ノ二十字ヲ刪リ(諸則ニ)ノ三字ヲ換フ(高橋稅關長達)同十四年六月廿二日前同上緒言中(其實罰ヲ受ル一ヶ月間二回以上ニ及フモノ云々)ノ一ヶ月ハ三十日以内ト改メ(高橋大阪稅關長達)同十六年七月六日監吏補賞罰例第七章出課失時條第十八則ヲ當課定

時限四十分以下ヲ遅刻スルコト三ヶ月間(即九十日)三回ニ及フモノハ罰第十等トシ及ヒ同第十九則ヲ四十分以上一時以内ノ遅刻ハ其都度罰第十等ト改メ(穎川稅關長達)降て明治十九年一月稅關監視課職制及章程の廢止に伴ヒ監吏補心得書(第三章參照)の改正と同時に更に罰例及賞罰表を規定す時に三月一日なりき

罰例

凡ソ監吏補心得書ニ違犯シ又ハ怠慢誤失アルモノハ例ニ照シテ懲罰スヘシ

懲罰ハ情ノ輕重ト害ノ大小トヲ酌量シ以テ加減スヘシ

一ヶ月間懲罰セラル、コト貳回以上ニ及フモノハ本罰ニ一等ヲ加フヘシ

違犯及ヒ怠慢誤失シテ其非ヲ悔ヒ自首スルモノハ減等又ハ本罰ヲ全免スルコトモアルヘシ

本例ニ記載シ盡サ、ル犯狀アルトキハ諸例ニ比附シテ懲罰スヘシ

第一條 監守中密商脱稅セルヲ覺ラサルモノ

第二條 監守中國禁物ノ脱漏セルヲ覺ラサルモノ

第三條 故ナク監區ヲ離ルモノ及ヒ港外ニ派出シテ監守ヲ怠ルモノ

第四條 船口開披ノ定期ヲ後ル、モノ及鎖封ニ疎漏アルモノ

右各罰第六等以上第一等ニ至ル

第五條 病氣引籠中許可ヲ得スシテ他行スルモノ

右罰第八等以上第一等ニ至ル

第六條 監守中如例ノ手數ヲ經ルノミニテ收稅ニ害ナキ貨物ノ脱漏スルヲ覺ラサルモノ

右罰第九等以上第七等ニ止ル

第七條 就務定期ヲ過ルモノ

百三十九

第七篇 關稅警察 組織及配置

第七篇 關稅警察 組織及配置

第八條 出科定時限ヲ遅延スルモノ又ハ病告書呈致ノ定期ヲ後ル、モノ
第九條 監守中睡眠シ又ハ位置ヲ離去シ遮目場所ニ潛入スルモノ

右罰第十等以上第一等ニ止ル

第十條 司長ノ命ニ違フモノ

第十一條 正課ノ本務ヲ私ニ交代スルモノ

第十二條 司長ニ告ケスシテ退關及ヒ他行スルモノ

第十三條 公文若クハ官品ヲ遺失シ又ハ毀損スルモノ

第十四條 公務時間中不体裁ノ所爲アルモノ

右各罰第十等以上第一等ニ至ル

賞罰表	賞金	罰俸
一等	五圓	重 百分ノ五 輕 百分ノ五
二等	參圓五拾錢	重 百分ノ三 輕 百分ノ三
三等	貳圓五拾錢	重 百分ノ二 輕 百分ノ二
四等	貳圓	重 百分ノ二 輕 百分ノ二
五等	壹圓五拾錢	重 百分ノ一 輕 百分ノ一

賞加罰の實例	賞金	罰俸
六等	壹圓	重 百分ノ一 輕 百分ノ一
七等	七拾錢	重 百分ノ七 輕 百分ノ七
八等	五拾錢	重 百分ノ五 輕 百分ノ五
九等	參拾錢	重 百分ノ三 輕 百分ノ三
十等	貳拾錢	重 百分ノ二 輕 百分ノ二

六、行賞加罰の實例 監視官吏の賞罰に關する規定の一般は前述する處の如し今當時に於ける行賞加罰の實例二三を擧げんに明治八年七月汽船金星丸天保山沖に於て難破沈没の際に當り常關天保山出張所詰監視吏及水夫が急に赴き乗客九名を救助したり之か行賞の事に關し植村出仕より關長に稟議して曰く

一昨二十一日蒸氣金星丸天保山沖ニテ沈没之際御雇水夫共盡力船客九名救助致候趣ヲ以テ賞與之儀吏長ヨリ伺出候處兼テ御布告之難破船取扱御規則第十六條ニ基候ヘハ管轄廳ヨリ相當ノ賞可有之筈ニ付別紙之通り坂府へ掛合候方ニ可有之哉併全ク監視ノ差圖ヲ受官舟ヲ以テ救助致候義ニ付私ニ相救候而ハ別段之廉ニテ關限リ之御賞與ニ可相成哉此段相伺候也

七月廿三日

長岡 租稅權助 殿

七等出仕

植村 昌茂

再伸救助セシハ水夫ハ全ク監視ノ差圖ニ出候然ラハ水夫ニ賞與有之候ハ、其差圖致セシ監視ヘモ

第七篇 關稅警察 組織及配置

第七篇 關稅警察 組織及配置

同様賞可有之筋ト愚考仕候此段モ相伺候也

(別紙畧ス)

茲に於て税關は此旨を大阪府に照合し大阪府より左の褒詞及賞金を交附せり

大阪税關中監吏 杉山長迪

其方儀税關大監吏大阪港在勤中本年七月廿一日正午十二時頃天保山沖合ニ於テ神戸花隈町松尾元助持蒸氣金星丸風浪之爲メ覆没之節税關附屬水夫四名ニ指揮シ同關附屬之端舟ヲ以テ漂流之船客九名救助可致非常ニ盡力致候段殊勝之事ニ候依之褒詞候事

明治八年十一月十二日

大阪府知事

渡邊昇

大阪税關附屬

水夫小頭 鹿島鏡造

水夫 水野惣七

同 甲斐米吉

同 福井常吉

其方共儀本年七月廿一日正午十二時頃天保山沖合ニ於テ神戸花隈町松尾元助持蒸氣金星丸風浪之爲メ覆没之節當港税關大監吏杉山長迪之指圖ニ應シ端舟一艘ニ打乘一同戮力勉勵高浪ヲ凌キ漂流之船客九名救助候段殊勝之事ニ候依之爲褒美金拾八圓一同へ下賜候事

明治八年十一月十二日

大阪府權知事

渡邊昇

此他職務上に於ける賞罰に對しては

(賞例一)

大藏省四等監吏補

前野鍊治郎

四月二日正午十二時ヨリ安治川三丁目巡廻之際同所定繫場ニ碇泊スル帆船立新丸ニ積載致シ居積荷許可未濟之寒天井ニ砂糖等四十七個ヲ取押へ本關へ差廻セシモノ覺擧違例條第九則ニ據リ賞第十等別紙目錄ノ通賞與候事

明治十七年四月十八日

(賞例二)

金 壹 圓

三等主税監吏補

笹田淺太郎

本月廿七日安治川巡廻ノ際第二號加悅丸水夫服永安治郎ナルモノ朝鮮國ヨリ輸出セシ豹皮貳枚ヲ密揚セントスルヲ看破押獲セシモノ看破密商脱税條第一則ニ據リ賞第六等別紙目錄ノ通賞與候事

明治十八年三月三十一日

(罰例一)

金 六 拾 錢

大藏省四等監吏補

三井原仙之輔

十五年七月十六日第二監區巡回中梅元町波止場へ臨監セス其際清商裕貞祥ニ屬スル赤砂糖陸揚セシヲ知ラス怠慢ニ付七等懲罰金申付候事

明治十五年九月六日

又其定期慰勞に對しては

(例二)

金 四 圓

大藏省二等監吏補

中村清房

十四年中皆勤勉勵ニ付月給三分ノ一慰勞トシテ下賜候事

明治十五年三月十四日

第七篇 關稅警察 組織及配置

第七篇 關稅警察 組織及配置

百四十四

(例二)

金拾圓

大藏省四等監吏補

神崎拙夫

十二年以來滿三年無懈怠勉勵ニ付爲手當目錄之通下賜候事

明治十五年四月十七日

(例三)

金四圓參拾參錢

大藏省一等監吏補

横川向

昨十五年中事務勉勵ニ付爲慰勞月給三分ノ一下賜候事

明治十六年二月

七、哨船 大阪税關に於ける船舶の尋問其他港内巡邏の爲めに用ゐたりし監視船の設備は其明治五年以前に關するものは記録に徴すべきものなきを以て其詳細を知るに由なしと雖とも故老の言に徴すれば運上所開局の當時に於ける巡邏船は其數都て六隻ありき全体皆朱の屋形船にして六挺の櫓を備へり就中一隻は船体稍大にして擔頭繞らすに菊花紋章を附せる幔幕を以てし垂簾深く籠めて内を窺はざらしむる等艤裝甚だ揚れり常に本關の前岸に碇繋し軍艦若しくは官船の入口に際し應答訪問の爲め上役の乗用に宛てしめ他は悉く天保山番所に繋留して交る交る四川の流域上下して偵邏巡察の任に膺れり當時赤船といへは藻鹽酌ひ茅海の浦邊の蟹婦兒童に至まで其運上所御用船たるを知らざるものなかりしと然るに明治五六年の交此屋形船を廢し同時に三艘の押送船(饅頭形)を新造せられたりとは是れによりて見れば即ち運上所時代に於ける監視船は彼の不便なる屋形船を廢して尋問巡邏の用に供したりしを知るへし後明治五年八月に至り此屋形船の操縦甚だ不便にして且つ已に朽敗使用に堪へざるを以て更に押送船の新造を請求したり

大阪港運上所ニ於テ尋問其外ニ相用來候通上船屋形付手重ノ製作ニテ聊ノ風波ニモ右屋形造リノ

爲メ運轉不自在且積年相用破損ニ及ヒ既ニ所用相成兼神戸港運上所ニテ製造ニ相成候通輕便ノ船丈ケ五尋三尺之小船監船巡警兩課へ壹艘ツ、運上所へ壹艘都合三艘更ニ製作イタン度尤壹艘代上略九拾圓位ニテ船具等一切調達可相成候右代之義打建成就ノ上可申進候得共先以此段相伺置候也
壬申八月 厚 東 樹 臣

陸 奥 租 稅 頭 殿

松 方 租 稅 權 頭 殿

古 谷 簡 一 殿

租稅寮は更らに大省藏の認可を得て之か指令を回附せり茲に於て税關は直に之か新造に着手し翌六年二月工を竣へ之か仕用書を添付して本省に報告せり即ち

三十六號

兼テ御許可相成居候大阪港税關備付押送船三艘別紙仕用書ノ通取建方申付置候處此節落成ニオヨヒ候間右御入費合金參百貳圓參拾八錢貳厘貳毛早々御出方相成候様御取計有之度則別紙仕用書相添此段申進候也

六年二月七日

陸 奥 租 稅 頭 殿

別 紙 仕 用 書

一金八拾五圓九拾四錢四厘七毛

一金九拾四圓參拾七錢五厘

一金百拾貳圓貳拾五錢

一金九圓八拾壹錢貳厘五毛

押 送 船 壹 艘 代

同 壹 艘 代

同 壹 艘 代

同 附 屬 品 代

第七篇 關稅警察 組織及配置

百四十五

金三百貳圓參拾八錢貳厘貳毛

從是先き運上所は海上に於ける諸般の取締は單に押送船の新造を以てのみ満足するに足らずとなし之と同時に小蒸氣船の購入に就て請求する處ありき

大阪港之儀ハ入港船艦天保山ヨリ一里餘モ沖合ニ停泊イタシ天保山ヨリ運上所迄一里餘モ有之距離遠隔之地形殊ニ川口ハ聊之風立ニモ逆浪甚敷押送り船而已ニテハ右等ノ節急場ニ間ニ合不申不都合ニ付小蒸氣船壹艘買入之義先以御許可相成度候左候ハ、臨時小蒸氣賣却船在之節其機ニ應シ廉價ニ御買入取計度候間此段先以相伺置候也

壬申八月

厚 東 樹 臣

陸 奧 租 稅 頭 殿

松 方 租 稅 權 頭 殿

古 谷 簡 一 殿

然るに租稅寮に於ては小蒸氣船の購入は時機尙早しとして之か認許を與へざりし

第十六號

本月五日十二號附ヲ以大阪港之儀ハ遠淺ニテ入港之船艦天保山ヨリ凡一里餘モ沖中ニ碇泊致シ稅關トハ彼是二里餘モ距離懸隔之地形殊ニ川口ハ聊之風ニテモ逆浪烈敷時宜ニ寄り押送船耳ニテハ急速ノ間ニ合兼不都合ニ付小蒸氣船壹艘御買入之義先以御許可相成度段々御申越之趣致承知候右同港之義ハ即今御修繕中ニモ有之今後落成之上ハ定而港内運搬之便利ヲ起シ或ハ小蒸氣船相用候テモ不及哉モ難計左候テハ即御今買入相成候而モ元費ニ屬シ可申旁當分相見合候方可然存候此段御報申入候也

壬申八月十二日

古 谷 簡 一

松 方 租 稅 權 頭
陸 奧 租 稅 頭

厚 東 樹 臣 殿

遂に小蒸氣船購入の議は之か成立を見ずして止めり爾來大阪稅關に於ける監視用船は三隻の押送船を以て之れに充てられ常に之れを天保山出張所に繋留せしむ其後明治十三年四月に至りて先きの押送船の内破損使用に適せざるものあるを以て府下西成郡南傳法村浦田善太郎なるものに命じて新船壹隻を造らしめたり試みに見積書を掲げて當時の形狀價格等の參照に供へんとす

明治十三年四月

大阪天保山御役所御用船壹艘

日本形

- 長 四間五尺六寸 深 二 尺 二 寸 巾 五 尺 七 寸
- 一 杉 敷板三枚 長四間^{中壹尺} 壹枚ニ付金壹圓拾六錢六厘此金參圓四拾九錢八厘
- 一 杉 上下側四枚長五間^{中壹尺八寸} 壹枚ニ付金貳圓參拾七錢五厘此金九圓五拾錢
- 一 檜木友ノトリテ長三尺^{中貳尺貳寸} 此金六拾錢
- 一 杉ヘキリ板 長貳間二枚^{中壹尺} 壹枚ニ付四拾錢此金八拾錢
- 一 クヌ木見ヨシ壹本 長八尺巾八寸^{中壹尺} 二寸五分此金壹圓貳拾錢
- 一 松トコ 壹本^{長四尺五寸} 角此金七拾錢
- 一 帆檣 壹本 長三間四寸角此金五拾錢
- 一 舵 壹丁 此金壹圓五拾錢
- 一 惣板子 長貳間拾貳枚^{中八寸} 壹枚ニ付貳拾錢八厘此金貳圓五拾錢

- 一 檣木船ハリ 胴長六尺 巾六寸ア三寸五分 トモ 長五尺五寸巾四寸角 ヲモテ同四尺五寸巾
- 同上 胴ノツキ同五尺七寸ア三寸巾四寸 壹本ニ付四拾錢此金壹圓六拾錢
- 一 檣木コベリ貳本 長五間^{巾三寸} 壹本ニ付五拾錢此金壹圓
- 一 五寸釘 九貫目百目ニ付八錢貳厘此金七圓參拾八錢
- 一 アカノ板 百六十目此金參拾六錢八厘
- 一 同ベオ 數貳百本 百本ニ付六錢此金拾貳錢
- 一 大工手間 四十人壹人ニ付貳拾五錢此金拾圓
- 惣ノ四拾壹圓貳拾六錢六厘

(圖ハ略ス)

爾來稅關所屬の御用船はすべて此當時の船形を襲用し從て朽つれば從て新造し特に船名を付せず舊稱を逐ふて單に御用船と呼へり

八、水夫 運上所開局の當初天保山番所に水主頭(第二編第一章參照)を置て部下水夫の取締をなさしめたりしも當時に於ける水夫の員數に就ては又記録に徵すべきものなし只故老の言によれば開局以來明治五年の末に至る迄は諸藩の傭入外國船等の出入口頗る頻繁なるものありしを以て尋問巡邏の事に忙はしく一隻の御用船を遣るに猶六人を要するが如き隨ふて水夫の員數も多きを要し常に十四五名を下らざりし降つて明治四五年の頃に至りては外國船の出入も年を逐ふて漸く減少せるを以て水夫も減員せられ六年の初屋形船の廢せられたるに於ては僅かに四名を剩するに至れりと云ふ而して當時水夫の取締に就て特に何等の規定なく單に番所長の命唯是れ奉するのみなりし後六年一月監吏課章程の發布に伴ひ同二月始めて横濱に於て稅關水夫規則を定めて之を各稅關に配布して慣ふ處わらしむ

稅關水夫規則

第一條

稅關中ニ雇ヒアル水夫ハ稅關所在ノ小蒸氣船及ヒ小艇ノ用ニ供スルモノニシテ密商稅ヲ監視防遏スル監吏課ニ附屬スル者ナレハ常ニ其長官ハ勿論監吏ノ示令ニ順從シ部中能ク懇和シ各自勉勵其職ヲ盡スヘシ

第二條

水夫若シ密商稅ヲ視認ムトキハ速ニ當直吏長ニ報知スヘシ其功ニ寄テハ相當ノ賞ヲ與フヘシ最トモ傍觀スルカ或ハ默シテ見免スモノアラハ至當ノ罰ヲ加フヘシ

第三條

稅關所在ノ蒸氣船并ニ哨船小艇日々琢磨洒掃ヲ爲サレハ機關ノ運轉ヲ害シ且ツ其船ノ進力ヲ妨ケ隨テ船舳ニ腐敗ヲ醸シ亦体裁ヲ失ヒ外客ノ蔑視ヲ被ムルニ至ラン故ニ船舳ハ清潔ヲ要シ機關船具ハ丁寧ニ取扱ヒ破損セサル様注意スヘシ

第四條

内外國ノ船舶入港スルトキハ大監吏尋問トシテ出張スル爲メ速ニ出船ノ支度ヲ爲シ其示令ヲ待ツヘシ

第五條

外國船出入港ノ節ハ番號札ヲ揚卸スヘシ且ツ其番號船名月日衛符ニ認メ屯所内ノ塗札ニ張付置クヘシ御國船ノ衛符モ同様タルヘシ

第六條

監吏夜中海上巡廻ノ爲メ小艇ニテ二時間毎ニ出張ス其時々水主貳名或ハ三名乘組示令ニ順テ其進

第七篇 關稅警察 組織及配置

百五十

退ヲ爲スヘシ且ツ毎朝夕船庫ノ封印開鎖ノ節ハ其期前ニ出船ノ用意ヲ致シ置クヘシ

第七條

水夫ハ居常外國人ニ接近スル故ニ禮節ヲ守リ服飾ヲ潔シ言語動作ヲ正クスヘシ最モ各船ニ到リ舷下ニ居ルトキハ殊更ニ相愼ミ其船夫ト猥リニ交語スヘカラス然リト雖トモ彼ヨリ若シ事ヲ尋ル時ハ懇切ニ教示スヘシ

第八條

稅關長次官監吏課長ニ出逢フトキハ歩ヲ止メ正面ニ向ヒ右手ヲ舉ケ左手ヲ直垂シ行禮スヘシ監吏ニ逢フ亦右手ヲ舉テ禮ヲ爲スヘシ敢テ傲慢無狀アルヘカラス

第九條

水夫十七名ハ毎日總員在營シ日沒船庫鎖封ノ後ハ半數則チ七名器械方ヲ除ク無欠員奇偶宿直スヘシ若シ病氣等ニテ欠員スルモノハ至當ノ罰アルヘシ

第十條

毎朝第八時總員屯所柵外ヘ整列シテ吏長或ハ大監吏ノ檢査ヲ受クヘシ若シ此人員改メニ漏ル、者ハ其日ノ給料ヲ引去ルヘシ亦其事情ヲ糺時ニ依テハ罰責ヲ加フヘシ

第十一條

屯所中ハ常ニ清潔ニ爲サ、レハ健康ヲ害シ且ツ体裁ヲ失フ故ニ朝夕掃除シ醜クカラサル様致スヘシ

第十二條

制服靴等都テ圖表ノ如ク期月ヲ立テ渡スヘシ平常能ク注意シ醜態ヲ顯ハスコト勿レ若シ毀損スルハ直ニ自費ヲ以テ修復ヲ加フヘシ

但シ公事ニ係ル非常ノ毀傷ヲ得タル時ハ課費ヲ以テ修整致スヘシ

第十三條

在營中ハ制服ヲ脱スルヲ禁ス亦制服ヲ着シテ草履下駄傘及ヒ跣足等ハ嚴禁タリ若シ此規則ヲ犯サハ罰金ヲ出サスヘシ

第十四條

荷船客船等解下會社ヲ立ル素ヨリ水主ノ關スル所ニ在ラサレトモ御雇水主ノ威焰ヲ以テ必ス社中ニ威權ケ間敷事申出ヘカラス

第十五條

休憩中屯所ニ於テ高聲雜談ヲ爲シ或ハ俚歌ヲ唱ヒ或ハ酒宴ヲ催スコト嚴禁タリ若シ法ヲ犯ス者ハ至當ノ罰ヲ加フヘシ

第十六條

市中商店等ニテ威權ケ間敷儀等申掛ケ或ハ買掛ケ押買都テ無理粗暴ノ舉動アルヘカラス若シ此令ニ背ク者ハ嚴重ノ罰ヲ加フヘシ

右規則ヲ確定ス各自能ク之ヲ遵守シ必違背スルコト勿レ

明治六年二月

租稅權頭

中島 信 行

(服制ノ事ハ後ニ出ツ)

九、配置 明治五年初めて監船巡警の兩課を設くるや監船課は特に其職制及び監船吏規則等を制定し天保山(舊船番所)に分課を置いて船舶の乗監貨物の積卸其他海上に於ける諸般の取締をなさしめ監視監吏を波止場(川口)天保山(舊船番所)及安治川(舊船番所)の三ヶ所に配置して關稅警察の事に従はしむ當時監船吏の配置に關しては左の如く規定せり

第七篇 關稅警察

組織及配置

百五十一

規則

- 第一、天保山遠見番所へ監船吏一員出張スヘシ
但日出ヨリ日没迄
 - 第二、監船吏總員本課ニ出張スヘシ
但宿直兩員ニシテ一員ツ、交換徹夜勤番スヘシ
 - 第三、安治川出張監船吏晝夜兩員トスヘシ
附夜中交番一員ハ不寝番スヘシ
 - 第四、分課長并檢官互ニ交換宿直シ日出ニ船ヲ見届ケ且ツ日没歸船ヲ待テ日中ノ事情ヲ聞キ日記ニ載ス可シ
 - 第五、外國船入港ノ節ハ分課長或ハ檢官直ニ尋問ヲ爲シ歸課翻譯ノ上各課へ廻達ス可シ
 - 第六、監船吏日出ヨリ日没マテ外國船へ乗組規則之通り事務取扱フヘシ日没歸課之節封印ヲ爲シ置ヘシ朝乗船ノ節前日封印ノ異同有無ヲ檢閲スヘシ
 - 第七、監船吏非番ノ向ハ朝第七時出勤直ニ受持ノ外國船へ前監吏ト交換可致事
 - 第八、各國軍艦入港ノ節ハ是迄尋問セストイヘトモ入出港及ヒ船名ハ日記ニ載書シ置クヘシ
(備考) 本規則中天保山遠見番所トアルハ船番所ニアラスシテ開港ノ當初出入船舶哨望ノ爲メ別ニ燈臺ノ近傍ニ設置セラレタルモノ翌六年二月之ヲ撤セリ)
- 次て同年十月監船吏巡警卒を海陸監吏と改稱し翌六年一月監吏課章程の發布と共に監吏心得書(次章に掲出す)を配布し初めて大監吏以下其管掌事務によりて各配置に就かしむ爾後再三監吏心得書を改正すると共に多少其配置を變更する處ありしを以て今左に項を分ちて其配置に關する概要を記せん

(一) 監吏課(川口波止場) 當時川口波止場は東西の二區に分たれ現在税關所屬の波止場を東波止場と稱し元安治川橋の下流に沿ふて新たに波止場を建設し之を西波止場と呼び大阪府の所屬たり而して監吏課は即ち西波止場の西端なる元大阪府に屬せし番小屋を以て之に充られ吏長(屬兼任)を置て之を主宰し大監吏(員數不詳)を宿直せしめて陸上勤務者の監督其他本課に關する一切の事務を處理せしむ小監吏(員數不明)は悉く本課に出務して見張立番巡廻等總て陸上の勤務に就けり

第一號監區 立傳信機局脇傳信局ヨリ税關前波止場中央マテ

第二號監區 立英國拾壹番館西角ヨリ税關前波止場中央マテ

第三號監區 見張巡廻 本課居留地川岸及ヒ梅本町

但各號監區を四名宛晝夜二時間又は一時間交代にて隔日宿直勤務せしむ

如斯監區を定め陸上の勤務に就かしめたりしか翌七年八月居留地集議所より第三號監區一部の巡視を中止せんことを交渉して曰

貴關監吏衆向後當居留地内巡行御差止被下候様御取計有之度旨同會議所取締中ヨリ依頼ニ付右及御掛合候也

千八百七十四年八月廿日

居留地集議所書記

フランク、メシヨル

大阪 税 關 御 中

本より肯くへきにあらざるを以て直ちに之を拒絶せり即ち

本月廿日附貴翰致落手候然ハ居留地會議掛リボリスコムミツテヨリ申立候趣ヲ以テ當關監吏居留地巡廻之儀差留吳候様御掛合之處右ハ全ク輸出入物品陸揚積出し方等不規則不相成様爲取締巡邏爲致候儀ニ付折角御申越ニ候得共差留難出來段御報申進候様長官申付候右御回答オヨヒ

候謹言

七年八月廿四日

居留地會議掛書記役

フランク、メシヨル貴下

大阪稅關長代理

租稅大屬 植村昌茂

後八年に至り監吏心得書を改正すると同時に其陸上勤務者の監區をも左の如く改正せり

立番住地

巡廻區部

第一號監區

立傳信局脇ヨリ本課西地境迄

第二號監區

立本課西地境ヨリ元長州濱西迄

第三號監區

巡梅本町副五番館前波止場ヲ初メ居留地
廻川岸古川筋ヨリ及ヒ梅本町竹林寺迄

但各號ヲ二名宛晝夜二時間交代ヲ以テ隔日宿直勤務セシム

然るに明治十年五月監吏總長以下の官名を廢し更に監吏監吏補を置き翌六月監吏課を監視課と改稱に及び監吏補の配置を本課諸海上勤務陸上勤務の三とし監視課長は監吏(一名屬兼勤を以て之に充て本課諸を本課及天保山出張所に配置し海上勤務は悉く天保山出張所に於てせしめたり當時陸上勤務の監區は左の如かりし

第一號監區

本署前波止場東詰ヨリ
元長州濱西迄

第二號監區

梅本町元副五番館前波止場ヲ始メ居留地
地川岸古川筋ヨリ及ヒ梅本町竹林寺迄

但各號ヲ四名宛晝夜二時間交代ニテ隔日宿直勤務セシム

降て明治十九年十一月監區を改正し新たに木津川巡回を加へしむ即ち左の如し

陸上勤務

第一等監區

晝夜

三名

第二號監區

木津川巡回

晝 午前
午後 一回

一名

右毎日四名ノ本務ニテ内一名晝間木津川巡回ノ上日没退課ノ事

但當分一名増員迄隔日巡廻ノ事

(二)天保山出張所

曩きに監吏課の新設となり翌六年監吏心得書を規定と共に中監吏已下若干を

天保山出張所に派出せしめ監船海上巡回入津哨望の三部署を定め各海上勤務に服し密商通稅の危

險に備へしむ

一海上巡廻

四名

但二名宛隔日交代セシム

一入津哨望

二名

但一名宛晝夜二時間又ハ三時間ノ交代ヲ以テ隔日宿直セシム

一監 船

若干名

但碇泊船ノ數ニ應シテ毎日配布シ隔日交代ニテ宿直セシム

後八年中監吏三名宛(時により四名)をして毎日交代宿直せしめ監船哨望巡回の勤務に服せしめ十年六月更らに本課諸(監吏補)なるものを本課及び天保山出張所に配置せしめ船舶の哨望、艙口、封鎖の立會及び海陸勤務者の監督に任せしめたり翌十一年一月海上勤務の部署配置に付て左の如く達せり

其港監吏補海上勤務方ハ以來晝兩員夜一員宛相詰可申尤病氣等ニテ欠員之節ハ見計ヲ以テ事務差問無之様減員候共不苦候事

第七篇 關稅警察 組織及配置

百五十六

入港船ノ爲在來ノ人員ニ而事務差問ニ可及節ハ當港(神戸)監吏補ヨリ臨時勤務申附候間直ニ其旨電信ヲ以報知可取計候事
十一年一月廿五日
長岡 稅關 長

大阪稅關田嶋八等監吏殿

(三)安治川監所(湊屋新田) 所謂運上所時代に於ける安治川船番所は當時安治川を上下せる船舶解艇の検査所として専ら拔荷乗拔け等の監視に任し特に番所設置の當初にありては鐵鎖を河流に引きて船舶航行の自由を許さず故に俗に之を呼て鎖番所と云へり明治五年七月運上所の租稅寮の主管に歸するや船番所は大阪府の所轄する處となりしも運上所は依然其廳舎を借受け監船吏二名(晝夜隔日交代)を派して監視事務を取らしむ翌六年一月港内取締規則の發布に伴ひ大阪府は再び之を船改所に充て沿海通航船に對する船稅の徵收積荷検査等に關する事務を開始し之を安治川國品改局と呼へり同年二月稅關は其監吏心得書の第八則に

一中監吏二名宛安治川國品改局へ出務し晝夜外品ノ輸出入ニ注意シ都テ稅關ノ許可ナキ貨物ハ留置キ速ニ本課へ報スヘシ

と規定し其廳舎の一隅を割ひて其事務を執らしめたり降て明治八年九月稅關長より左の如く達し以來中監吏の派出を中止せり

安治川船改所免狀改之儀當分之内等外吏ヲ以爲取扱候ニ付以來中監吏ハ同所へ出頭ニ不及等外吏ハ從前中監吏之取扱致居候通事務可取扱候事

明治八年九月十八日

關 長

是より先々神戸稅關より安治川船改所に於ける監吏詰所營繕の件に關して上請して曰く
第三百五十號

大阪安治川筋船改所へ監吏詰所繼足之儀伺

神戸 稅關

大阪港ニ輸入スル品ハ多分神戸港滯泊ノ各國商船ヨリ稅未納ニテ日本解船へ移シ運搬致候ニ付一應大阪川口ニ於テ相改可申テハ四流ノ川口殊ニ稅關迄ハ里程モ隔リ不取締ニ有之候爲メ當寮所轄以來ハ安治川筋大阪府船改所ノ内一間借受監吏ヲ爲詰候テ右荷物改メ方爲致居候處先般内國西洋形船舶ハ取締方各開港場共稅關所轄ニ相成候ニ付テハ大阪府ニ於テ是迄ニ於テ取締居候事務安治川而已ニ一ヶ所相纏メ就テハ人員モ相増隨テ稅關ニ借受候席モ手狹相成錯雜相生差問不勘乍去右事務ハ其荷物彼等ヲ區別スル而已ニテ船ハ齊シク日本形ニ付船改所ト一所ニ無之テハ取締モ其効ヲ得ス故ニ稅關ニ於テ別ニ一局ヲ相設ケ候儀ハ實際不都合ニ付從前ノ通大阪府船改所へ別紙圖面ノ如ク繼足シ監吏詰合取扱候得共事務差扣無之見込ニ付右繼足ノ儀同府へ及打合候處何等差問無之趣回答申越依テ繼足ノ目論見ヲ以テ御入費爲積候處別紙仕様帖ノ通金百七拾七圓六拾壹錢參厘ニテ出來候様申出候間何卒右金額別途御出方ヲ以營繕御許可相成候様致度此段積帖差添相伺候也
八年九月九日
租稅權頭 長岡 義之

租稅頭松方正義代理

吉原 重俊 殿

茲に於て本省は同年十二月に至り

第六十九號

伺之趣許可可相成候條費額金百七拾七圓六拾壹錢參厘ヲ目途トシテ繼足方着手可致尤モ右金額ノ儀ハ歲費豫算内ヨリ相渡スヘク候條受取方申出追テ皆出來候上ハ精算帖相添其旨可届出候事

第七篇 關稅警察 組織及配置

百五十七

第七篇 關稅警察 警察事務

百五十八

八年十二月四日

租稅權頭 吉原重俊

と指令認許し了り茲に該工事に着手し監視事務の擴張を見るへかりしに後其何の理由によれるや否やを詳にせずと雖も該工事の着手を見るに及ばず翌九年一月税關は大阪府に通知して曰く辰第拾六號

貴府御所轄安治川船改所へ是迄海外輸出入之荷物爲検査當關吏員出張爲致置候處事務之都合モ有之當分之内右同斷出張之儀ハ停止致候間爲御心得此段申進候也

九年二月二十五日

大阪税關長

租稅權助 長岡義之

船番所の當初より依然監視官吏を配置せられたる安治川監所は茲に於て遂に長く廢撤せられ後三十二年再び監所の配置を見るに至れり

(四)四日市大阪税關出張所 明治二十二年七月特別輸出港規則の發布と共に伊勢國四日市港を大阪税關所管の特別輸出港と指定せられ同年十一月始めて同港高砂町に出張所を設置するに及ひ所長(屬)の任命と同時に雇監吏二名の在勤を命じて専ら監視事務を執らしめり

第二章 警察事務

十、監吏心得書及改正 五年の當初新たに巡警卒監船吏の設置と共に關稅警察事務の一般は依然船番所時代の例規慣行を逐ふに過ぎざりしも五年の末造監吏課の新設となり更らに海陸監吏の分稱となり監船其他海上事務は一切海監吏をして之に衝らしめ唯神戸大阪を往復せる小蒸氣船にして川口波止場より旅客貨物の積卸をなすものに對しては陸監吏を乗監せしめたりしも取締上遺憾尠からざるものあるを以て翌六年一月外國人所有之小蒸氣船は一切海監吏を乗監せしむる事となし税關より左の如く各國領事に照會せり

第三號

神戸港往復小蒸氣船入出之度々荷物卸等は迄監吏ヲ以テ取締爲致來候處追々船數モ相増不取締之廉モ有之候間以來他船同様碇泊中海監吏爲乗込候間其段貴國商人共へ御布達有之候様致度此段御掛合申進候謹言

明治六年一月 日

瓜生租稅助

各國領事宛

六年一月監吏課章程の發布によりて茲に關稅警察機關の變革を見るに及び大阪税關は監吏執務に關する規定及雜則を規定し在職中遵守すへき事項を網羅せり之を監吏心得書と命す

監吏心得書

大監吏

第一則

外國ノ船舶(軍艦ヲ除クノ外)更ニ入港スル時ハ大監吏直ニ尋問簿ヲ携ヘ其船舶ニ到リ禮讓ヲ正クシテ船司ニ應接シ右ノ簿冊ヲ出シ國名船號及ヒ船司ノ名船夫ノ數船客ノ員積込ノ貨物出帆ノ地名日月時刻等詳細ニ自記セシメ且堅固狀ノ有無ヲ糺シ以テ其簿冊ニ記シタル原文ヲ譯シ之ヲ(某)吏長ニ報シタル上税關諸課ニ廻達シ又之ヲ塗札ニ掲記スヘシ

第二則

入港スル船舶ノ來由ヲ尋問シ若シ其船漂流或ハ困難ニ遇フト聞ク時ハ詳ニ其情實ヲ糺シ速ニ其顛末ヲ(某)吏長ニ報スヘシ

第三則

第七篇 關稅警察 警察事務

百五十九

入港ノ船舶尋問ノ上條約未濟國ノ船ナレハ貨物ハ勿論船司ヲ始メ船夫其他船客ノ者ニ至ルマテ斷然上陸ヲ禁シ速ニ之ヲ(某)吏長ニ報スヘシ

監船

海上巡廻

中監吏

入津哨望

安治川國品改局出張

第四則

大藏省輸出米積入ノ外國船ヲ除クノ外諸碇泊ノ外國船ヘ中監吏一名宛日出前三十分ヨリ日沒迄乘込居リ密商脱稅ハ勿論總テ稅關ノ免許狀ニ照準シ諸荷物ノ揚卸ニ專ラ注意スヘシ最モ大藏省輸出米積入ノ船ハ同省官員乘込居ルカ故ニ中監吏ハ乘込致サスト雖トモ若シ他ノ貨物等揚卸スヘキ時ハ乘込居ルヘシ其行作タルヤ宜シク甲板上ニ在テ體裁ヲ正フシ耳目ヲ配リ彼ノ障得ニ成ラサル様ニシ且ツ猥リニ談話等致シ彼ノ蔑視ヲ受ケサルヲ要スヘシ

第五則

監吏二名宛晝夜交替シ諸碇泊船ノ近傍ヲ巡廻シ監吏乘込無キ船舶ハ殊更ニ注意ヲ加ヘ其動靜ヲ監察シ都テ怪ムヘキ景況ヲ見認メタル時ハ直ニ其船ニ到リ詳細ニ尋問シ時宜ニ依テハ一名其船ニ留リ一名ハ其顛末ヲ本課ニ報スヘシ

第六則

諸停泊船ノ艙口ヲ開鎖スルハ監船監吏ノ課タリ然レトモ監吏乘込ノ無キ船ハ巡廻監吏ノ課トス總テ之ヲ鎖封スルハ夕日沒ノ時ニ於テシ開封スルハ日出前三十分ヲ以テ期トス其開封ノ時前日ノ固封異同有無ヲ檢閱スヘシ

第七則

入津哨望ハ中監吏一名宛晝夜二時間或ハ三時間ノ交換ヲ以テ能ク外國船ノ出入ニ注目シ都テ船舶入出スル時ハ直ニ大監吏ニ報スヘシ

第八則

中監吏二名宛安治川國品改局ヘ出務シ晝夜外國品ノ輸出入ニ注意シ都テ稅關ノ許可ナキ貨物ハ留メ置キ速ニ本課ヘ報スヘシ

立番

少監吏

巡廻

第九則

監吏ハ稅關前ヨリ居留地川岸梅本町迄見張所立番位地及巡廻等左ノ如シ

第一號 立傳信機局脇

傳信局脇ヨリ稅關前波止場中央マテ

第二號 立英國拾壹番館西角

稅關前波止場中央ヨリ西波止場中央マテ

第三號 見張本課 居留地川岸

巡廻及ヒ梅本町

第十則

各號ヲ四名宛ニテ隔日ニ宿直警衛シ毎朝第九時ニ總テ交換シ配布所ノ交替ハ晝夜共二時間或ハ一時間ヲ以テスヘシ

第十一則

第一號ヨリ第三號マテ見張立番巡邏等各自ノ區部ヲ目擊注意シ假令隣號タリトモ事件差起リタルトキハ速ニ腦力スヘシ若シ故ナクシテ私ニ位地ヲ轉スルモノハ之ヲ總長ニ報シ相當ノ罰ヲ加フ但巡邏中町家ヘ立寄り私用ヲ便スルヲ禁ス若シ之ヲ犯ス者ハ罰本文ニ同シ

雜則

第十二則

監吏ヲ拜命スルトキハ必ス第一ニ監吏課章程監吏心得書及有稅無稅品ノ辨別ヲ暗誦スヘシ

第十三則

監船當直海上巡廻及各號位地へ出務中ハ殊ニ禮節ヲ重スヘキハ勿論吸烟讀書及ヒ猥リニ人ト談話スルヲ禁ス

第十四則

休憩中ハ吸烟讀書談話スルヲ許シタリト雖トモ高聲ニテ讀書シ或ハ無益ノ雜談ニ時間ヲ費シ或ハ戶外ニ出テ恣ニ吸烟スル等ヲ禁ス唯言行ヲ慎ミ他局ノ誹謗ヲ受ケサル様各廉耻ヲ以テ維持奉職スヘシ

第十五則

出務中ハ必ス他人ト談話ヲ禁スルト雖トモ職務上ノ事故カ或ハ他ヨリ事ヲ尋ヌルトキハ懇切ニ説諭教示スヘシ

第十六則

屯營中ハ常ニ清潔ニ爲サ、レハ健康ヲ害シ且体裁ヲ失フ故ニ監吏休憩中ハ專ラ之ニ注意シ室中ノ醜態ヲ露サ、ルコトヲ要ス

第十七則

毎朝定メラレタル時限迄ニ總員交換スヘシ若シ遅刻スル者ハ至當ノ罰ヲ充ツヘシ

第十八則

監船巡廻立番共交代ノ都度々々吏長机上ノ桁箱ニテ巳ノ姓名札ヲ揚卸スヘシ

第十九則

監船巡回及立番等勤務中ノ事故ハ大小巨細ヲ論セス歸局ノ時都テ日誌へ記載スヘシ

第二十則

失火其外非常ノ節ハ總員出關スヘシ

第二十一則

當直中病氣或ハ不得止事故アツテ同伍ノ者へ一時頼合ヲ爲スハ不苦ト雖トモ前以テ課長へ届置クヘシ

但急病等ハ此例ニアラス

第二十二則

病災等ニテ出務ナシ難キ時ハ前夜其事故ヲ本課ニ報スヘシ又當日ニ至リ俄ニ病發スルモノ都テ出務時限迄ニ申牒スヘシ若シ其報遲延ニ及フ時ハ快癒ノ上至當ノ罰ニ處スヘシ當病三日ヲ過キ猶出局爲シ難キ時ハ醫師容體書相添へ届出ヘシ

但長病ノ者ハ七日間毎ニ醫師容體書提出スヘシ

第二十三則

病氣ニテ勤務ヲ欠クトキハ左目ノ如ク償金ヲ出スヘシ此金ハ課中ニ貯備シ精勤勉務ノ輩へ賞與スヘシ

三日以内 一日金貳拾錢

十日以内 一日金拾錢

十一日以内 一日金五錢

第二十四則

課中貯備トシテ左ノ金額ヲ日給ノ内ヨリ積置クヘシ

大監吏 一ヶ月 貳圓

中監吏 一ヶ月 壹圓五拾錢

少監吏 一ヶ月 壹圓

第二十五則

右貯備金ハ手簿ヲ整シ之ニ掲載シテ各自ニ判然ナラシムヘシ

第二十六則

監吏ヲ轉職スル時カ或ハ事故アリテ免役スルトキハ右積置ノ金ニ相當ノ利足ヲ加ヘ渡スヘシ

第二十七則

罪アリテ職ヲ脱スルトキハ其非ニ因リ積置ノ金額或ハ半數ヲ沒收スヘシ

右監吏心得規則長官ノ許可ヲ經テ確定スル所ナリ各自能ク之ヲ遵守シ必ス違背スルコト勿レ

明治六年二月

監吏課長

かくの如く外國船舶に對する尋問は大監吏をして之をなさしめ、中監吏は天保山及安治川(舊船所)に配置せられて乘監船口の開鎖及海上巡邏に關する事務を執り、小監吏は陸上に於ける見張立番巡回等の職務に就かしむ。當時安治川監所は専ら出入の船舶解艇を監視すると同時に特に外國貿易品を積載せるものは其輸出免狀に對照して貨物の検査を行ひ、異狀あらは之を押へて本課へ通報し、異狀なきものは其免狀に裏書をなして其通航を許せり。然るに後三月(六年)之を廢せしむ。從來安治川國品改局出張監吏輸出入品免狀へ裏書致來候處以來輸出入共裏書致スニ及ハス此段及通達候也

但輸出入共無免狀品ト免狀ニ相違アル品ハ取押候儀從前ノ通可被心得事

明治六年三月廿日

監吏課長

之れと同時に輸出品に關する免狀取扱方に對して

是迄碇泊ノ外國船へ積込品免狀取扱ノ儀區々ニ相成不都合ニ付以來本免狀ハ荷主ニ渡シ置キ貨物積卸ノ上ハ渡シ置キタル監吏宛ノ免狀ハ取揚ケ右預ノ本免狀ハ下渡シ可申候且監船ノ監吏ハ監吏

宛ノ免狀視檢致候迄ニテ取揚ルニ不及尤古免狀見認ノ捺印ハ是迄ノ通可取計事

但貨物船積半途ノ節ハ監船監吏ニ於ル監吏宛ノ免狀裏へ裏書致シ右貨物積切候迄ハ荷主へ渡置可申事

と訓示し同年五月に至り安治川監所に於て直に物件の留置等をなすは物議醸生の憂あるを以て之を改正せしむ

安治川出張監吏ニ於テ外國輸出入免狀表ノ違ヒ又ハ無免狀ノ事故ヨリシテ其品留置却テ彼ヨリ訴出ルト雖トモ其品遠隔ニ滞在スルヲ以テ稅關緩速ノ御處置ニ遅々ノ不都合ヲ醸生ス以來表ノ違無免狀品也共一切安治川出張所ニ留置コト難相成晝間ハ勿論警夜中ト雖一名其船ニ上乘シ本課へ可届出事

但本文輸出入品共都テ時宜ニ應シ安治川關所へ留置キ詳細書翰ヲ以テ本課へ報知シ或ハ荷物ニ添翰ヲ爲シ差廻スコトモアルヘシ

明治六年五月十四日

監吏課

後同年十一月稅關長より更に左の如く達せり

安治川監吏見張所ニ於テ其稅關陸揚可致品ハ其免狀へ裏書鈐印致候様昨日達示置候得共各港ニテ積稅等ノ免狀ニテハ裏書ニ相成不都合ト存候間其儀ハ相廢シ監吏改ノ品ヲ證シタル往復帳ヲ必ス無怠御撮扱有之度此段更ニ申進候也

六年十一月十四日

而して翌七年七月に至り再び其免狀に對する裏書をなさしむることゝなせり
安治川自見張ニテ荷船着船届出候節荷主持參ノ免狀表ト現物ト相違之有無ヲ較正シ左ノ書式ニ準ラヒ相違ノ有無ニ對テ裏書ノ上免狀ハ荷主へ差戻スヘキコト

書式

一表書ノ通積荷見届候也

月 日

一表書何百數之内何拾何數積荷見届候也

月 日

右之通伺之上取極候事

明治七年七月十六日

越えて八年(月日不詳)監吏心得書を改正して其詳細を極む

監吏心得書

中 監 吏 印

中 監 吏 印

副 吏 長

大 監 吏

第一 則

商船(外國航海ノ船ヲ云)入港セハ直ニ當直ノ大監吏入港待ノ中監吏一名(郵船ハ二名)ヲ引卒ソ尋問簿ヲ携ヘ其船ニ至リ禮讓ヲ正クシテ船司ニ面接シ其國名船號噸數及ヒ船司ノ姓名乘組人員并船客ノ個數積入ノ貨物出帆ノ地名其月日船中諸般ノ事故等詳細ニ尋問シ且堅固狀ノ有無ヲ糺シ之ヲ右ノ簿冊ニ記載シ其簿冊ノ旨ヲ第一號ノ書式ニ挿記シ課長及各課ニ回報シ又之ヲ木牌ニ揭示ス

第二 則

入港商船ヲ尋問ノ上若シ其船漂流或ハ困難ニ遇フト閉クトキハ詳ニ情實ヲ糺シ速ニ其顛末ヲ課長ニ報スヘシ

第三 則

入港商船ヲ尋問ノ上條約未濟國ノ船ナレハ貨物ハ勿論船司ヲ始メ乘組人其他船客ノ者ト雖トモ斷

然上陸ヲ禁シ速ニ之ヲ課長ニ報スヘシ

第四 則

入港商船ヲ尋問ノ上船中人畜傳染病アラハ檢官來船迄一切人畜ノ出入ヲ嚴禁シ速ニ其旨ヲ課長ニ報スヘシ

第五 則

入港商船ヲ尋問ノ上多量ノ火藥爆發品等ヲ積入ラセルモノハ其繫場ノ位地ヲ併セ速ニ之ヲ課長ニ報スヘシ

第六 則

入港商船ニハ捺印科ヨリ其手數濟ノ報知ニ從ヒ直ニ水夫頭取ヲシテ其船番數ノ標札(番數ハ一週期毎ニ之ヲ改ム)ヲ掲ケシメ又同科ヨリ出港手數濟ノ報知アラハ同人ヲシテ右標札ヲ取除カシム

第七 則

積荷ハ檢査課ヨリ回報ノ總數ト其船乘勤監吏ノ手簿トヲ照應シテ毎日卸荷ノ高ヲ較計シ凡九分方卸濟ニ至ラハ其殘數ニ本船實荷ノ違同ヲ以テ其旨ヲ檢査課ニ報告スヘシ尤モ當港ニ陸揚スヘキ荷物若荷主ノ都合ニ因リ直ニ其船ニテ他港ヘ廻漕スル時ハ其荷主更ニ其手數ヲナセハ船中「其ビル、ヲフ、レーヂンク」アルヘシ之ヲ船司ニ乞ヒ一見實否ヲ證スヘク若シ又本船出港手數ノ際迄モ事故アリテカ或ハ怠慢ニテ荷主ノ船卸シノ手續ヲモ篤ト心付置クヘシ

第八 則

中監吏内卸シ免狀ヲ以テ卸荷取扱セシハ其監吏ノ手簿ト本免狀トヲ照應差較シテ殘數ヲ記シ翌日之ヲ其船乘勤ノ監吏ニ附授スヘク又船積品内積ヲ取扱ヒシモ同上ノ如クスヘシ

第九 則

船移荷物ハ卸セシ甲船監吏ノ手簿ト積シ乙船監吏ノ手簿トヲ照應シテ移荷ノ濟否及ヒ違同ヲ校スヘシ

第十則

哨船及ヒ通船等常ニ注意シテ小破ノ内修理ヲ加ヘ且船具ノ散セサル様水夫ヲ指揮督責スヘシ

中 監 吏

第十一則

天保山支局ニハ毎日晝夜三員宛(時ニ依リ四員トナス)在テ商船ノ入港ヲ哨望シ密商脱稅ヲ看破防遏ス其内一名ハ間斷ナク時間ヲ尅ミ海上ヲ視察シ諸碇泊船ノ近傍ヲ巡回シ其動靜等遺漏ナク注意スヘク最モ船積免許ノ場處外ヨリ積來ル諸品ハ勿論漕來ル船或ハ夜中或ハ入港手數前及ヒ出港手數後ニ船卸ノ荷物等總テ怪ムヘキ景況ヲ見認アレハ詳細ニ之ヲ尋問シ其荷物ハ船ト共ニ之ヲ天保山支局ニ留置キ速ニ其旨ヲ課長ニ報スヘシ

第十二則

郵船ニハ晝夜兩員宛同會社ノ倉船ニハ晝夜一員宛其他港内ノ碇泊諸船ニモ日出三十分前ヨリ日没ノ時迄一員宛必ス乗船シ荷物積在ノ場所及ヒ其箇數并商船船用品ノ區別等ヲ概視豫算シ密商脱稅ハ勿論諸荷物揚卸ニ專ラ注意監視スヘク其行作タルヤ身ハ常ニ甲板上ニ在テ体裁ヲ正シクシ耳目ヲ配リ彼ノ障碍ヲナサス又猥リニ談話等ヲナシ彼カ蔑視ヲ招サル様心ヲ用ユヘシ

第十三則

乗勤中卸荷ハ陸揚免狀ニ照シ之ヲ卸サシノ且其旨ト解ノ號數ヲ手簿ニ筆記シ皆卸ノ上免狀ニ見届ノ證印ヲナスヘク若シ右品多數或ハ船積ノ都合ニテ其日内ニ卸シカタキハ内卸免狀ヲ附與シテ本免狀ハ手簿ト共ニ之ヲ天保山支局ニ差出スヘク又船積品モ同上ノ如シト雖トモ内積品ハ其内積免狀ヲ荷主ニ附與セサルナリ

第十四則

監吏乗船中現ニ無免狀ニテ荷物船卸ヲ爲ントスル者アラハ一應懇切ニ規則ノ次第ヲ示諭スヘシ若示諭ヲモ聽カス擅ニ船卸シ之ヲ支留スル能ハサルトキハ巡廻監吏或ハ解船ノ水夫ヲ以テカ又ハ自ラ其旨ヲ速ニ天保山支局或ハ直ニ本課ニ報知スヘシ

第十五則

荷物船卸ニ付テハ運賃積ノ物カ或ハ船客ノ提携品カラ詳ニ辨知シ免狀ノ有無ヲモ區別スヘシ假令提携品ハ其實商物タリトモ保護ハ船客ノ自任ナレハ上陸シテ免狀ヲ受ケ來ルコト能ハス是ニ反シ運賃積ノ品ハ其實僅ノ見本タリトモ積荷目錄ニ掲載アレハ免狀ヲ受ケ得テ後船卸スルハ當然タリ

第十六則

各船ノ艙口ヲ開鎖スルハ監船監吏ノ課タリ之ヲ鎖封スルハ夕日没ノ時ニ於テ開封スルハ必ス日出前ニ於テスヘシ尤空艙ハ鎖封スルニ及ハス

第十七則

船中異狀或ハ天保山支局ヘ報知スヘキ急事アラハ呼子笛ヲ以テ巡廻監吏ニ暗號シ其船ヲ呼フヘシ巡廻監吏モ右暗號ヲ聞カハ速ニ本船ニ至リ其事ヲ辨スヘシ

第十八則

安治川監所ニハ毎日晝夜二人宛在テ神阪兩港ノ間運送スル外國人ノ荷物及ヒ碇泊ノ商船ヘ或ハ商船ヨリ積卸スル貨物ヲ改メ密商漏稅ヲ看破防遏スヘク若シ其貨物ニ附屬スル免狀ナキカ或ハ怪ムヘキ事由アルハ詳細ニ之ヲ尋問シ輸出品ハ其監所ニ留置キ輸入品ハ直ニ稅關ニ届ケ共ニ其旨ヲ課長ニ報スヘシ

第七編 關稅警察 警察事務

第十九則

解ヲ以テ運搬スル輸出入ノ貨物ハ其箇數記號等免狀ニ照應檢閲シ違却ナケレハ免狀ハ式ニ倣ヒ裏書ノ上荷主ニ附與シ晝夜共通船差許スヘシ

第二十則

解ヲ以テ運搬スル輸出ノ貨物既ニ積出シノ後事故アリテ之ヲ積戻ス時ハ其免狀ノ裏書ヲ消シ通船ヲ許シ且其旨ヲ本課ニ報スヘシ若シ風波ヲ避ル爲メ一時積戻ス者ハ其免狀ノ裏印ヲ消シ追テ積出ストキ更ニ檢印ノ上通船ヲ許スヘシ

小 監 吏

第二拾壹則

稅關前波止場ヨリ居留地川岸梅本町迄立番巡廻位置三箇所ヲ設ク左ノ如シ

立番位地

巡廻區部

第一號

傳信局脇ヨリ

第二號

本課西地境ヨリ

第三號

立番 本課西地境ヨリ
番 元長州濱西迄
番 梅本町濱西迄
巡 川岸古川筋ヨリ及ヒ梅本町竹林寺迄

第二拾貳則

各號ヲ二名宛ニテ隔日宿直警衛シ毎朝第九時ニ總員交換シ配布所ノ交換ハ晝夜共二時ヲ以テスヘシ

第二拾三則

第一號ヨリ第三號マテ巡廻立番各自ノ區部ヲ巡廻注意シ密商脫稅ヲ防遏スルハ勿論稅關壹番止場ヨリ船積引取ノ荷物ハ稅關手數濟ノ有無ヲ監視シ且川蒸氣船解船ノ輻輳舟路ノ壅塞等ヲモ指

圖督責スヘシ

第二拾四則

假令隣タリトモ事件差生セントキハ速ニ之ニ協力スヘク且職務上ノ義ニ付隣號ニ通知ヲ要スルトキハ速ニ之ヲ通知シ再ヒ其位置ニ復スヘク若シ故ナクシテ私ニ其位地ヲ轉離スル者ハ相當ノ謝意ニ處スヘシ

第二拾五則

若巡查ノ在ラサル處ニテ賊徒ヲ取押タル時ハ所持ノ贖物ヲ添ヘ速ニ巡回ノ巡查ニ引渡シ其旨ヲ課長ニ報スヘシ

第二拾六則

監吏ヲ拜命セハ先第一ニ監吏課章程及ヒ心得書并有稅無稅禁制品ノ類別ヲ諳誦シ且各國條約書稅關慣行法書ヲモ熟讀通了スヘシ

第二拾七則

奸主密商脫稅ヲ謀ルハ畢竟監吏職務上怠惰アルヲ窺ヒ機ニ投シ其利ヲ得ントスルナレハ監吏ニ於テ最モ恥辱トスヘシ故ニ密商脫稅ヲ發覺スルヨリモ奸主ヲシテ其欺詐ヲ施スニ隙ナカラシムル様平常勉勵アラント要ス

第二拾八則

密商脫稅ヲ看破セルトキハ穩ニ規則違背セシ箇條ヲ奸主ニ諭シ其品ヲ取押ユヘシ若シ奸主說諭ヲ聽カス擅ニ品物ヲ持去ントシ不待己力ヲ以テ之ヲ制スルアルトモ其品物ノミ取押ヘ決テ之カ爲ニ奸主ノ身体ニ手ヲ觸レ或ハ拘留スル等ノコトアルヘカラス

第二拾九則

第七編 關稅警察 警察事務

在港ノ船舶火災或ハ困難等アルトキハ休憩ノ中少監吏各力ヲ盡シテ之ヲ救助スヘシ若シ荷物ノ流失スルヲ見當ラハ本課ニ送致シ其仔細ヲ課長ニ報スヘシ

第三拾則

監船當直海上巡廻及各號位地へ出務中ハ殊ニ禮節ヲ重ンスヘキハ勿論喫烟讀書及ヒ猥ニ人々ト談話スルヲ禁ス

第三十一則

在船中船司或ハ士官等ニ自然親昵ニ及フトモ品物商品及ヒ贈品ヲ受ル等ハ堅ク之ヲ禁ス若シ所持品彼ヨリ乞出ツル時ハ其譯課長ニ報シ指揮ヲ受クヘシ

第三十二則

出務中必ス他人ト談話ヲ禁スルト雖トモ職務上ノ事ヲ尋ヌルトキハ懇切ニ說諭教示スヘシ

第三十三則

出務中睡眠ヲナスニ於テハ是非ヲ問ハス謝意ニ處スヘシ

第三十四則

監吏巡廻立番共交代ノ都度々々吏長机上ノ桁箱ニテ自己ノ名牌ヲ揚卸スヘシ

第三十五則

歸課ノ節ハ出務中異狀ノ有無ヲ課長ニ告白シ且事務ノ明細ヲ日誌ニ記載スヘシ

第三十六則

監船巡廻及ヒ立番ノ者明番ノ日ハ交替ノ後必ス本課ニ來リ交代前後別條ナキヤ否ヤ届ノ上退散スヘシ各所ヨリ直ニ退散スルヲ禁ス

第三十七則

出務中ハ勿論休憩中戸外ニ出レハ必ス帽ヲ戴クヘシ亦ツボンノ隠ニ手ヲ差入ルヘカラス

第三十八則

休憩中ハ喫烟讀書談話スルヲ許シタリト雖モ高聲ニテ讀書シ或ハ無益ノ雜談ニ時間ヲ費シ或ハ戶外ニ出テ恣ニ吹烟シ又時ナラスシテ飲食スル等ヲ禁ス唯言行ヲ慎ミ他局ノ誹謗ヲ受ケサル様各廉耻ヲ主トシ以テ奉職スヘシ

第三十九則

課中ハ常ニ清潔ニ爲サ、レハ健康ヲ害シ且体裁ヲ失フ故ニ監吏休憩中專ラ之ニ注意シ室中ノ醜態ヲ露サ、ルヲ要ス

第四十則

當直中病氣或ハ不得止事故アリテ同伍ノ者へ一時頼合セテ爲スハ不苦ト雖モ前以テ吏長へ届置クヘシ尤モ急病等ハ此例ニアラス

第四十一則

失火其他非常ノ節ハ總員出課スヘシ

第四十二則

毎朝出勤退關ノ途中下駄傘ハ勿論自服用スルヲ禁ス

第四十三則

毎朝出局ノ時限ヲ遅延ノ者ハ謝意ニ處スヘシ

第四十四則

病災等ニテ出務ナシ難キトキハ前夜其事故ヲ課長ニ報スヘシ若當日卒然病發スルトキハ其趣旨速ニ課長ニ報スヘシ其報出局定時限ヨリ遅延ニ及フト一時ニ至ルモノハ快愈ノ上謝意ニ處スヘシ

第七篇 關稅警察 警察事務

百七十四

第四十五則

中少監吏病氣ニテ欠勤スルトキハ大監吏臨時宿所ニ到リ狀態檢閲ノ上其當然ヲ筆記シ課長ニ報スヘシ

第四十六則

病氣ニテ欠勤三日ヲ過ルトキハ病院診察書ヲ課長ニ出スヘシ

第四十七則

病氣ニテ欠勤スルトキハ左目ノ如ク償金ヲ出スヘシ此金ハ補務ノ輩ニ配與スヘシ

三日以内 一日ノ金貳拾錢

十日以内 一日 金拾錢

十一日以外 一日 金五錢

第四十八則

課中貯備トシテ左ノ金額ヲ月給ノ内ヨリ積置クヘシ

大監吏

一ヶ月 貳圓

中監吏 一ヶ月 壹圓五拾錢

小監吏 一ヶ月 壹圓

第四十九則

右貯備金ハ手簿ヲ製シ之ヲ掲載シテ各自ニ判然タラシムヘシ

第五十則

監吏轉職スルトキカ或ハ事故アリテ免役スル時ハ右積置ノ金ニ相當ノ利息ヲ加ヘ渡スヘシ
右監吏心得書確定スル者也各自夫レ之ヲ遵守シ敢テ違背スルコト勿レ

明治八年 月

然るに明治十年五月職制の改正によりて監吏課を監視課と改稱するに及び先きの監吏心得書を監吏
補心得書と題して更に増補改定する處あり
今般監吏補心得書別冊ノ通制定致候條遵行可被致尤内國船へ對シ取扱向ノ義ハ追テ相達候迄從

前ノ通可被相心得此段相達候事

明治十年七月廿六日

大阪稅關

長岡義之

別冊

本課 詰

第一則

當務者ハ常ニ本課ト天保山詰所ニ在テ商船入出港ノ哨望艙口封緘ノ立會海上陸地ノ巡廻休憩監吏
補ノ取締等ヲ主トルヘシ

第二則

毎日出課ノ交代ハ朝第九時ヲ以テ定期トス

第三則

商船(外國航海ノ船ヲ云フ以下之ニ倣フ)ノ入出港ヲ認メハ直ニ之ヲ監吏ニ通報シ當直ノ者尋問監
吏ニ隨從其船ニ到リ艙口ノ箇數積荷ノ有無等ヲ見質シ夜中ナラハ直ニ其艙口ニ封緘ヲ施スヘシ

第四則

商船艙口ノ開鎖ニハ必ス之ニ臨監スヘシ其要タルヤ万一破封等ノ事アルニ際シ之カ證ヲ舉クルノ
爲ナレハ毎ニ其封緘ニ粗漏ナキカ或ハ安全ナルヤノコトニ意ヲ注キ若シ破封シタル時ハ其事由ヲ
詳細ニ質スヘシ

第五則

海陸時ヲ尅シ間斷ナク巡廻シテ其勤務者監視ノ及ハサル所ヲ補充スヘシ故ニ其心得方ハ海陸勤務
ノ條ニ就テ知ルヘシ

第六則

第七篇 關稅警察 警察事務

百七十五

海陸勤務者ノ休憩中非儀喧嘩或ハ心得違ノ輩ナカラン様兼テ之ヲ忠告シ且之ヲ説諭シ同僚ヲ相和熟セシムヘシ若シ力及ハサルモノハ其旨監吏ニ告白シ又監吏ヨリ其見聞ノ仔細ヲ尋問スルニ當ラハ其實ヲ以テ之ニ報答スヘシ

第七 則

哨船及ヒ通船等ハ常ニ注意シテ修理ヲ加フヘキモノハ監吏ニ報シ且船具ノ散セサル其取扱ノ暴ナラサル様水夫ヲ指揮督責スヘシ

第八 則

商船ニ畜類ヲ豢養スルアラハ之ヲシテ封緘ヲ破却セシメサル様注意スヘキ旨初日封緘ノ際ニ當リ其船司ニ通告シ置クヘシ

海上勤務

第一 則

勤務者ハ各商船ニ乗組ミ章程第一條ノ件々ヲ監視禁遏スルノ事ヲ主トルヘシ

第二 則

商船ニハ日出三十分前ヨリ日没ノ時迄其事務ノ繁閑ニ依リ一員若クハ二員乗勤スヘシ故ニ朝第九時ノ交代ヲ以テ常ニ天保山詰所迄出課シ其配布ニ就クヲ定期トス

第三 則

船中荷物積在ノ場所及ヒ其箇數并商物船用品ノ區別等ヲ概視豫算シ諸荷物揚卸ヲ監視スヘキハ勿論密ニ陸揚センカ爲メ船中艙外ニ隱匿セル荷物或ハ無許ニテ密ニ船積セシ品ノ有無ヲモ專ラ注意スヘシ

第四 則

卸シ荷ハ陸揚免狀ニ照シ之ヲ卸サシメ且其旨ト解ノ號數ヲ手簿ニ筆記シ皆卸ノ上免狀ニ見届ケノ證印ヲナシ其貨主ヘ返付スヘシ若シ右品多數カ或ハ最前積込ノ都合ニテ其日内ニ卸シ難キモノハ更ニ内卸シ免狀ヲ附與シテ本免狀ハ手簿ト共ニ之ヲ本課ニ差出スヘク又船積品モ同上手續ノ如シト雖モ皆積并内積共ニ免狀ヲ荷主ニ附與セサルナリ

第五 則

積卸免狀中記號箇數等實物ニ符合セサルモノハ免狀書載ノ誤謬ナルヤ否ヤヲ精數ニ穿鑿スヘシ若我筆者ノ誤謬セン證アルモノハ其事ヲ取扱置キ然シテ之ヲ本課ニ報スヘシ我誤謬ノ故ヲ以テ貨主ヲシテ其害ヲ蒙ラシムルナカラント要ス

第六 則

現ニ無免狀ニテ荷物船卸ヲ爲ントスル者アラハ一應懇切ニ規則ノ次第ヲ示諭スヘシ若示諭ヲモ聽カス擅ニ船卸シ之ヲ支留スル能サルトキハ巡廻ノ者或ハ解船ノ水夫ヲ以テカ又ハ時機ニ依リ自ら其旨ヲ速ニ本課ヘ報知スヘシ

第七 則

荷物船卸ニ付テハ運賃積ノ物カ或ハ船客ノ提携セル品カヲ詳ニ辨知シ其免狀ノ附貳スルヤ否ヤヲ區別スヘシ假令提携品ハ其實商物タリトモ保護ハ其船客ノ自任ナレハ上陸シテ免狀ヲ請ケ更ニ來ルコト能ハス是ニ反シ運賃積ノ品ハ其實僅カノ見本タリトモ積荷目録ニ掲載アレハ免狀請ケ得テ後船卸スルハ當然タリ

第八 則

漂流或ハ困難ニ遇フ船若求ムルコトアラハ課長ノ指圖ヲ受ケ成ヘク懇切ニ取扱遣スヘシ

第九 則

第七篇 關稅警察

警察事務